

初等中等教育における観光教育の推進に関する業務 報告書

令和3年3月

観光庁 参事官（観光人材政策） 付

< 目 次 >

I. 業務概要.....	1
1. 目的	1
2. 実施事項.....	1
3. 本業務の成果・課題	3
II. 協議会及び分科会の実施	5
1. 協議会運営	5
2. 分科会運営	8
III. 観光教育フォーラム 2021（シンポジウム・ワークショップ）の企画・実施	17
1. 実施概要.....	17
2. 参加者アンケート	29
IV. 業務総括	32
1. 本年度議論の意義	32
2. 初等中等教育における観光教育をとりまく「時代感・潮流」について	34
3. 初等中等教育における観光教育で育める「資質・能力」について	35
4. 初等中等教育における観光教育で学ぶことの「意義・価値」について	44
5. 初等中等教育における観光教育の「普及方策」について	55
6. 観光庁としての取組に関して	85

I. 業務概要

1. 目的

観光立国を実現するためには、観光が「地方創生への切り札、成長戦略の柱」として、その裾野の広さと経済波及効果の大きさを活かし、日本の津々浦々で活力にあふれた地域社会を築いていくことが必要である。このためには、成長の早期の段階から、地域固有の文化、歴史、観光による交流の意義や経済的な効果等に関する教育を推進することにより、日本及び地域の愛着と誇りの醸成を図るとともに、観光の意義に対する理解を深めることが重要である。

これまでも、小学校・中学校・高校（普通科・専門学科）の各段階で、観光教育に関する取組が行われているが、今後は、こうした取組の全国への普及・展開を見据え、観光教育の意義をあらためて確認するとともに、目的・方向性を共有し、観光教育を普及するためのプログラムの開発などに取組むことが必要である。

このため、本事業では、産学官の関係者が集い、観光教育の意義、目的・方向性、普及に向けた方策等を議論・検討し、今後の具体的な施策を提言する場として協議会・分科会の開催、並びに広報活動を行う。

2. 実施事項

(1) 協議会及び分科会の運営

産学官の観光教育関係者が集い、「①観光教育の『意義』の共通認識の形成」、「②各教育段階における観光教育の『目的』と『方向性』の相互共有・理解」、「③観光教育の普及に向けた効果的な取組方策の検討」を目的として、「初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会」を開催した。

1) 協議会の運営

本年度は協議会を2回開催し、初等中等教育における観光教育の動向や展望、検討課題について意見交換を実施した。

2) 分科会の運営

本協議会の下に、小中学校・高校（普通科）・高校（専門学科）の3つの分科会を設置し、成長過程を鑑みた具体的な教育目的や具体的施策について検討を行った。本年度は、各分科会を3回ずつ開催し、初等中等教育における観光教育を取り巻く社会動向や、観光教育の価値・普及方策について検討した。

(2) 観光教育フォーラム（シンポジウム・ワークショップ）の企画・運営

初等中等教育における観光教育の意義や価値に関する協議会・分科会の検討内容を紹介することや、観光教育の関係者ネットワークを拡充することを目的として、教育関係者や観光産業関係者等を対象にシンポジウム及びワークショップをオンラインで開催した。

1) シンポジウム（観光教育フォーラム 2021・午前の部）

観光庁による取組紹介、現役教員による実践事例の紹介、協議会委員によるパネルディスカッションを実施した。

2) ワークショップ（観光教育フォーラム 2021・午後の部）

「観光で新たな学びをデザインする」と題して、産学連携の観光教育プログラムについて、グループディスカッションの形式で検討を実施した、

(3) 業務総括

(1)、(2)の実施内容に基づき、初等中等教育で観光教育が求められる時代背景、実施意義、普及方策についてとりまとめた。

(4) 業務報告書の作成

(1)～(3)の結果を取りまとめた業務報告書を作成した。

3. 本業務の成果・課題

(1) 成果

1) 観光教育の意義・価値の捉え直し

観光教育を通じて育める資質・能力を学校教員の具体的な取組から抽出した結果、プログラムの内容に応じて、多種多様な力（資質・能力）を育むことができる可能性を確認した。

（※詳細は P.44 以降を参照）

2) 普及に資する取組の整理

観光教育の普及方策を検討するにあたり、「周知・気づき」、「教材・ツールづくり」、「プログラムづくり」、「ネットワークづくり」、「実施体制の整備」の各取組を意識し、議論を整理した。

（※詳細は P.55 以降を参照）

3) オンラインでの会議・イベントの実践

全国の観光教育関係者を対象に、会議（協議会・分科会）やイベント（シンポジウム、ワークショップ）をオンラインで実施できたことで、今後の観光教育の推進活動上、オンラインを活用した取組の有用性を確認することができた。

(2) 課題

1) 観光教育の普及方策に係る個別課題

観光教育の「周知・気づき」、「教材・ツールづくり」、「プログラムづくり」、「ネットワークづくり」、「実施体制の整備」のそれぞれに関して、継続的な検討課題が存在する。

そして、周知や教材・プログラムづくりの前提情報にも位置付けられる、観光教育の「目的」、「意義・価値」について、指針としてふさわしい表現方法の検討が求められる。

2) 観光教育の推進に係るグランドデザインを策定する必要性

観光教育の普及に関する動きの全体像や全体計画（例：どの主体が何を担うのか、どのようなスケジュールで推進するのか、等）が定まっていないことが今後の検討課題である。

II. 協議会及び分科会の実施

産学官の観光教育関係者が集い、「①観光教育の『意義』の共通認識の形成」、「②各教育段階における観光教育の『目的』と『方向性』の相互共有・理解」、「③観光教育の普及に向けた効果的な取組方策の検討」を目的として、「初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会」を開催した。

本協議会では、小中学校・高校（普通科）・高校（専門学科）の3つの分科会を置き、成長過程を鑑みた具体的な教育目的や具体的施策についても検討を行った。

1. 協議会運営

(1) 実施概要

本年度、下記有識者を委員に任命し、協議会を2回開催した。

図表 1 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会 開催スケジュール

回	日時
第1回	令和2年10月2日（金）13：00～15：00
第2回	令和3年2月17日（水）16：00～18：00

図表 2 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会 委員名簿

氏名	所属
内川 健	成蹊小学校 教諭
江藤 誠晃	株式会社 BUZZPORT 代表取締役
大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
勝瀬 典雄	関西学院大学 専門職大学院 経営戦略研究課 教授
河合 豊明	品川女子学院 教諭
宍戸 学	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
鈴鹿 剛	徳島県立 徳島商業高等学校 教諭
鈴木 俊博	特定非営利活動法人 TOSS 教育事業本部 本部長
高嶋 竜平	法政大学 国際高等学校 教諭
寺本 潔	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
中野 憲	株式会社 JTB 教育事業ソリューションセンター センター長
中村 晃	公益社団法人 日本観光振興協会 常務理事
森下 晶美【座長】	東洋大学 国際観光学部 国際観光学科 教授
村上 和夫【副座長】	立教大学 名誉教授

（氏名五十音順・敬称略）

(2) 実施内容

3) 第1回協議会

第1回協議会を下記要項で実施した。

図表 3 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会（第1回） 実施要項

実施日時	令和2年10月2日（金）13：00～15：00	
場所	経産省別館 1111 各省庁共用会議室	
次第	1.開会 2.挨拶（観光庁 審議官 五十嵐 徹人） 3.趣旨説明 観光庁 {観光庁 参事官（観光人材政策） 町田 倫代} 4.委員からの発表及び意見交換 5.閉会	
委員	内川 健	成蹊小学校 教諭
	江藤 誠晃	株式会社 BUZZPORT 代表取締役
	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	勝瀬 典雄	関西学院大学 専門職大学院 経営戦略研究課 教授
	河合 豊明	品川女子学院 教諭
	穴戸 学	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	鈴鹿 剛	徳島県立 徳島商業高等学校教諭
	鈴木 俊博	特定非営利活動法人 TOSS 教育事業本部 本部長
	高嶋 竜平	法政大学 国際高等学校教諭
	寺本 潔	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	中野 憲	株式会社 JTB 教育事業ソリューションセンター センター長
	中村 晃	公益社団法人 日本観光振興協会 常務理事
	森下 晶美【座長】	東洋大学 国際観光学部 国際観光学科 教授
	村上 和夫【副座長】	立教大学 名誉教授

4) 第2回協議会

第2回協議会を下記要項で実施した。

図表 4 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会（第2回） 実施要項

実施日時	令和3年2月17日（水）16：00～18：00	
場所	オンライン会議室	
次第	1.開会 2.挨拶 {観光庁 参事官（観光人材政策） 町田 倫代} 3.分科会の開催過程報告 4.議題 （1）各分科会の報告 （2）これまでの検討を踏まえた、本年のまとめ （3）意見交換 ○この協議会を通じて気付いたこと、今後ご自身の学校などで活かしていくこと ○来年度以降の事業についてのご意見 5.事務連絡等 6.閉会	
委員	内川 健	成蹊小学校 教諭
	江藤 誠晃	株式会社 BUZZPORT 代表取締役
	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	勝瀬 典雄	関西学院大学 専門職大学院 経営戦略研究課 教授
	河合 豊明	品川女子学院 教諭
	穴戸 学	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	鈴鹿 剛	徳島県立 徳島商業高等学校 教諭
	鈴木 俊博	特定非営利活動法人 TOSS 教育事業本部 本部長
	高嶋 竜平	法政大学 国際高等学校 教諭
	寺本 潔	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	中野 憲	株式会社 JTB 教育事業ソリューションセンター センター長
	中村 晃	公益社団法人 日本観光振興協会 常務理事
	森下 晶美【座長】	東洋大学 国際観光学部 国際観光学科 教授
	村上 和夫【副座長】	立教大学 名誉教授

2. 分科会運営

(1) 実施概要

本年度、下記有識者を委員に任命し、分科会毎に3回開催した。第3回分科会は、合同分科会として実施した。

分科会においては、観光教育で育まれる資質・能力を、学校教員の具体的な取組から帰納的に検証した。そして、過年度の観光庁調査事業の検討内容もふまえて、観光教育の意義・価値や、今後必要とされる具体的な取組について検討を行った。また、幅広い議論を行うため、オブザーバーによる話題提供の時間を適宜設けた。

図表 5 初等中等教育における観光教育の推進に関する分科会 開催スケジュール

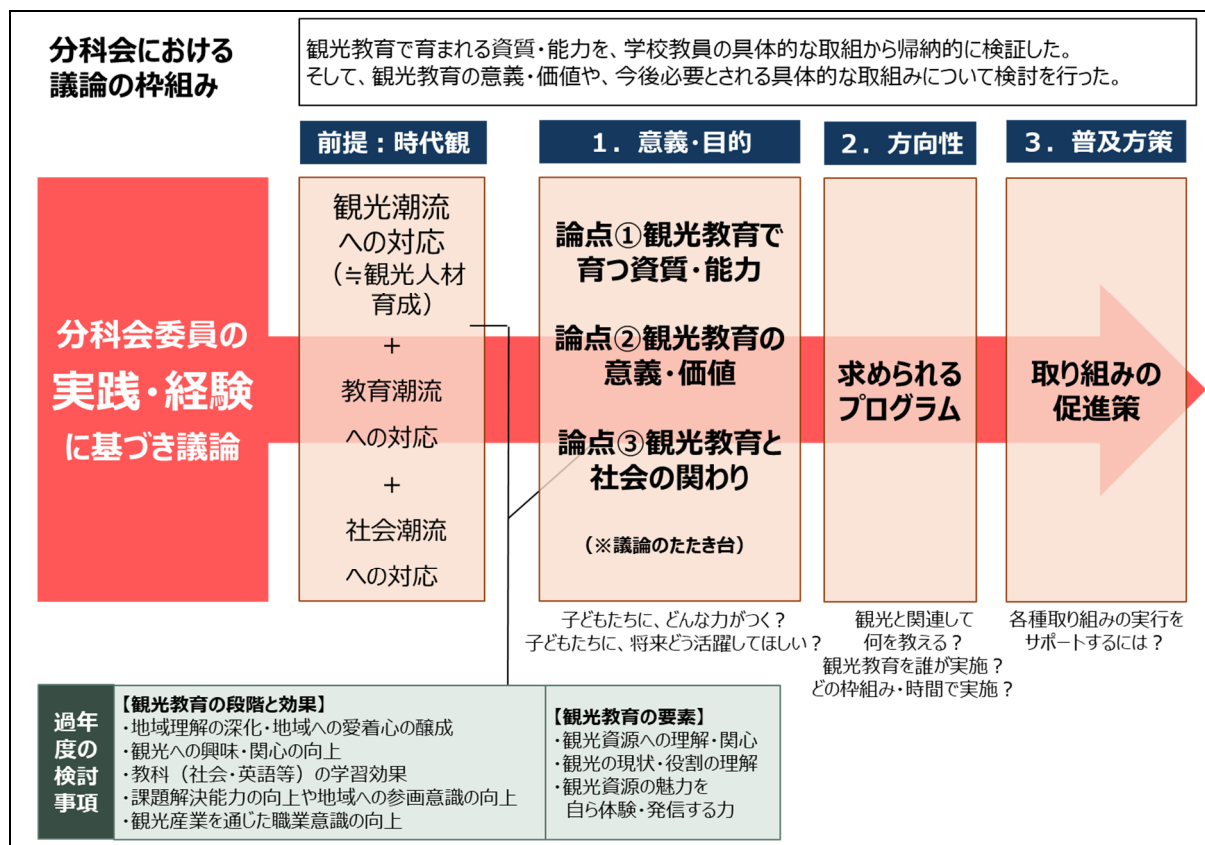
開催回	日時
第1回分科会（小中学校）	令和2年11月24日（火）16：00～18：00
第1回分科会（高校・普通科）	令和2年11月20日（金）16：00～18：00
第1回分科会（高校・専門学科）	令和2年11月30日（月）17：00～19：00
第2回分科会（小中学校）	令和2年12月14日（月）16：00～18：00
第2回分科会（高校・普通科）	令和2年12月23日（火）10：00～12：00
第2回分科会（高校・専門学科）	令和2年12月18日（金）13：00～15：00
第3回分科会（合同分科会）	令和3年1月19日（金）17：00～19：00

図表 6 初等中等教育における観光教育の推進に関する分科会 委員名簿

区分	氏名	所属
小中学校	内川 健	成蹊小学校 教諭
	河合 豊明	品川女学院 教諭
	清水 英俊	宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会
	寺本 潔【座長】	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	手塚 美和	静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭
	穴戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授
高校（普通科）	高嶋 竜平	法政大学国際高等学校 教諭
	中村 太悟	学校法人希望が丘学園 鳳凰高等学 教諭
	村上 和夫【座長】	立教大学 名誉教授
	穴戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授
高校（専門学科）	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	大屋 泰彦	沖縄水産高等学校 教諭
	北村 由美	金沢商業高等学校 教諭
	鈴鹿 剛	徳島県立徳島商業高等学校 教諭
	穴戸 学【座長／統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授

（氏名五十音順・敬称略）

図表 7 分科会における議論の枠組み



(2) 実施内容

1) 第1回分科会

第1回分科会は、各委員の具体的な取組や体験を基に、観光教育で育める資質・能力をはじめ、観光教育の良さ（社会との関わり、意義、目的）について議論を行った。

図表 8 第1回分科会（小中学校） 実施要項

実施日時	令和2年11月24日（火）16:00～18:00	
場所	三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 会議室 （オンライン会議併用）	
次第	1.開会・挨拶 2.趣旨説明 3.参加者自己紹介（観光教育に対する思い・課題感） 4.意見交換 ①観光教育で育つ「資質・能力」（観光の力）について ②観光教育と「社会の関わり」について ③観光教育の「意義・目的」について 5.事務連絡	
委員	内川 健	成蹊小学校 教諭
	河合 豊明	品川女学院 教諭
	穴戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授
	高清水 英俊	宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会
	寺本 潔【座長】	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	手塚 美和	静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭

（氏名五十音順・敬称略）

図表 9 第 1 回分科会（高校・普通科） 実施要項

実施日時	令和 2 年 11 月 20 日（金）16：00～18：00	
場所	三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社 会議室 （オンライン会議併用）	
次第	1.開会・挨拶 2.趣旨説明 3.参加者自己紹介（観光教育に対する思い・課題感） 4.意見交換 ①観光教育で育つ「資質・能力」（観光の力）について ②観光教育と「社会の関わり」について ③観光教育の「意義・目的」について 5.事務連絡	
委員	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授
	高嶋 竜平	法政大学国際高等学校 教諭
	中村 太悟	学校法人希望が丘学園 鳳凰高等学校 教諭
	村上 和夫【座長】	立教大学 名誉教授

（氏名五十音順・敬称略）

図表 10 第 1 回分科会（高校・専門学科） 実施要項

実施日時	令和 2 年 11 月 30 日（月）17：00～19：00	
場所	オンライン会議	
次第	1.開会・挨拶 2.趣旨説明 3.参加者自己紹介（観光教育に対する思い・課題感） 4.意見交換 ①観光教育で育つ「資質・能力」（観光の力）について ②観光教育と「社会の関わり」について ③観光教育の「意義・目的」について 5.事務連絡	
委員	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	大屋 泰彦	沖縄水産高等学校 教諭
	北村 由美	金沢商業高等学校 教諭
	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	鈴鹿 剛	徳島県立徳島商業高等学校 教諭
オブザーバー	鈴木 恵一	市立札幌啓北商業高等学校 校長

（氏名五十音順・敬称略）

2) 第2回分科会

第2回分科会では、第1回分科会の議論を踏まえ、また、オブザーバーによる論点提示も踏まえて、観光教育の意義、目的、育める資質・能力について、さらに議論を重ねた。

図表 11 第2回分科会（小中学校） 実施要項

実施日時	令和2年12月14日（月）16：00～18：00	
場所	オンライン会議室	
次第	1.開会・挨拶 2.討議事項に関する説明 3.話題提供 ①話題提供 ②議論（5つの論点に関して） 4.意見交換 ①観光教育の「意義・目的」について ②観光教育で育む「資質・能力」について 5.事務連絡	
委員	内川 健	成蹊小学校 教諭
	河合 豊明	品川女学院 教諭
	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 教授
	高清水 英俊	宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会
	寺本 潔【座長】	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	手塚 美和	静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭
オブザーバー	新保 元康	NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム 理事長

（氏名五十音順・敬称略）

図表 12 第2回分科会（高校・普通科） 実施要項

実施日時	令和2年12月23日（火）10：00～12：00	
場所	オンライン会議室	
次第	1.開会・挨拶 2.討議事項に関する説明 3.話題提供 ①話題提供 ②議論（5つの論点に関して） 4.意見交換 ①観光教育の「意義・目的」について ②観光教育で育む「資質・能力」について 5.事務連絡	
委員	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	高嶋 竜平	法政大学国際高等学校 教諭
	中村 太悟	学校法人希望が丘学園 鳳凰高等学校 教諭
	村上 和夫【座長】	立教大学 名誉教授
オブザーバー	原 一樹	京都外国語大学 国際貢献学部 グローバル観光学科 教授
	中野 憲	㈱JTB 教育事業ソリューションセンター センター長

(氏名五十音順・敬称略)

図表 13 第2回分科会（高校・専門学科） 実施要項

実施日時	令和2年12月18日（金）13：00～15：00	
場所	オンライン会議室	
次第	1.開会・挨拶 2.討議事項に関する説明 3.意見交換 ①観光教育の「意義・目的」について ②観光教育で育む「資質・能力」について ③観光教育の「普及方策」について 4.事務連絡	
委員	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	大屋 泰彦	沖縄水産高等学校 教諭（欠席）
	北村 由美	金沢商業高等学校 教諭
	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	鈴鹿 剛	徳島県立徳島商業高等学校 教諭
オブザーバー	中谷 知記	北海道ニセコ高等学校 教諭

(氏名五十音順・敬称略)

3) 第3回分科会（合同分科会）

第3回分科会では、3分科会を合同で実施した。

図表 14 第3回分科会（合同分科会） 実施要項

実施日時	令和3年1月19日（火）17：00～19：00	
場所	オンライン会議室	
次第	1.開会・観光庁挨拶 2.各座長による、挨拶・各分科会の意見紹介 3.事務局 実施内容の説明 4.意見交換 ①グループ討議1 「発達段階別の取組イメージ」 ②グループ討議2 「取組の促進策」 ③全体討議 5.議論のまとめ 6.閉会・事務連絡	
委員	内川 健	成蹊小学校 教諭
	大日方 樹	岩倉高等学校 教諭
	大屋 泰彦	沖縄水産高等学校 教諭
	河合 豊明	品川女学院 教諭
	北村 由美	金沢商業高等学校 教諭
	宍戸 学【統括座長】	日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授
	鈴鹿 剛	徳島県立徳島商業高等学校 教諭
	高嶋 竜平	法政大学国際高等学校 教諭
	高清水 英俊	宮城県牡鹿郡女川町 教育委員会
	手塚 美和	静岡県静岡市立清水有度第二小学校 教諭
	寺本 潔	玉川大学 教育学部 教育学科 教授
	中村 太悟	学校法人希望が丘学園 鳳凰高等学校 教諭
	村上 和夫	立教大学 名誉教授
オブザーバー	中谷 知記	北海道ニセコ高等学校 教諭

（氏名五十音順・敬称略）

(3) 各分科会における主たる論点・意見

各分科会における論点・意見を以下に示す。観光教育という同じ枠組みにありながらも、発達段階や学校種別に応じて、取り組むにあたり意識すべき事項が異なることがうかがえる。今後、それぞれの事情を考慮したうえで、観光教育の普及方策を検討・実行することが求められる。

図表 15 3 分科会における主たる論点・意見（共通意見）

- 観光教育でないと教えられないことを明示していく必要がある。
- 初等中等教育では観光推進を支える基礎教育が含まれる。地域理解や観光分野の関心など狭い印象にならないよう、教育がもつ意義が観光にも波及する視点を含め、観光庁として初等中等教育における観光教育の意義・目的を打ち出していくと良い。
- 小中学校で培ったことが高校や社会人の段階で活きるなどの、理論的背景があると先生方に響くか。小・中・高・大・社会という流れで、身につける能力や素養について整理がなされることが望ましい。この機会にそのようなつながりを構築する場を作るのが重要。
- 観光教育はビジネスや専門教育の認識が強いが、それでは広がらないため小中学校の段階から取り組む必要がある。小学校では、低学年と高学年で違いはあると思うが、観光教育の実務面より、教育理念・教育価値を重視して認めていただくことが重要。高校普通科の教育は専門学科の教育と異なり、小中学校の延長線で発展させていく取組だと思われる。高校専門学科では、観光教育の認知が少しずつ広がり始めており、具体的にどうすれば効果的な観光教育を導入・実践することができるのか、知見を求める教員が増えつつある状況。

図表 16 分科会（小中学校）における主たる論点・意見

- 他者理解、自文化理解だけではなく、世界に目を向けることや、自分が住んでいる地域と他地域を比較することは、自分の成長や地域の活性化のために必要である。
- 狭義の観光産業だけでなく、他産業も日本や地域の観光を支えている。我がまちの独自性を見出し、それがまちに対する肯定感につながれば、子どもたちにとって価値のある観光教育に繋がる。観光という題材は、主体性を育む学習に適している。
- 小学校では、子どもたちは学びが楽しいと積極的に学ぶため、観光という題材は、主体性を育む学習に適している。グループワークや観光客へのインタビューなど、地域に出かけて様々な学習を行うことの意義・効果は抜群という話が、各種の取組から示唆される。
- 中学校では、社会科や理科、国語科、家庭科など、観光教育を扱える教科が多い。加えて、総合的な学習の時間やキャリア教育（中学校では職業体験が入るため“仕事”を学ぶことが重要）において、将来の進路、観光産業の担い手育成に繋がる教育が必要である。
- 中学校の修学旅行にある班別行動において、SDGs を取り入れた探究学習が始まっている。「持続可能な観光はどうあるべきか」という課題解決の視点を入れると、観光教育の小中学校の系統的な学びが実現できるのではないかと。

図表 17 分科会（高校・普通科）における主たる論点・意見

- 高校普通科の生徒は進路が非常に広く、就職もあれば進学もある。生徒は多様な目的をもって学ぶ。観光教育では「旅行の方法を習得し、観光を通じて日々の生活や人生を楽しく豊かに生きる意義を理解する機会」とする。同時に「社会との関係の中」「自分との関わりの中」でそれを実現するための問題点や課題を発見して高等教育につなげたり、社会での自分の働き方につなげたりすることが必要である。
- 従来の高校生の学び方が大学と合わず、大学入学後に苦勞している。特に「気づく力」「問いを立てる力」の欠落が大きくその育成が課題である。そこを高校と大学との接合で育成するかを検討する事が課題である。（探究学習や課題研究で、研究テーマが決まらず、議論どころか、問いも出ない。）
- 高校における芸術・文化等の教養の醸成は、一部の学校を除き蔑ろにされてきた。これらは、物事に対する洞察力や俯瞰的視野、美意識や品位の向上など生きる姿勢を育むために不可欠な力である。観光教育では、時代を貫く「教養」を育む基礎を自己の内部に据える事と旅行との繋がりでの育成が必要である。
- 観光に関わる産業の発展、関連する仕事、社会活動や自己研鑽の機会が、上記の学びから世界には多様に存在する事を学ぶ。その上で、教育を通じて、観光における自らの関わり方とリーダーシップの在り方をグローバルに考える機会を与える。それは、持続可能な社会の形成上で最も大切な学びである。
- 高等学校普通科における観光教育は広範囲であり、人々との相互関係、観光産業等の既存の社会活動に基礎をおく事から、学校の中に留まる事なく、社会的・国際的な連携において行われる必要があり、産業界や機関等にその教育機会を共創する働きかけを行う必要がある。

図表 18 分科会（高校・専門学科）における主たる論点・意見

- 2022 年度新学習指導要領で商業科の中に「観光ビジネス」の科目ができることで、高等学校における観光教育への期待も大きい。なお、現状では、商業は簿記や情報処理の授業を中心とした検定教育に重きが置かれ、現状では観光教育への理解と関心は低い。
- 専門学科で観光教育を議論する際に、商業に関する学科だけでなく、他の専門学科も含めて、幅広く考えると良い。専門学科において、観光教育をテーマに、横串を刺すこともできる。その場合、商業高校の観光教育を工業、農業、福祉といった他の専門高校にどのように展開していけるのかが課題。
- 授業内容に加え、「教員の研修方法」や「具体的にどのように教えるのか」の悩みが大きい。
- 専門学科では、地域連携に取り組む学校が多い。実務的な能力やプロデュース力、社会に役立つスキルを、観光を通じて磨き、観光事業や観光の取組に貢献してくれる人材を育てたい。他にも、コミュニケーション能力や積極性、協働力、たくましさ等が育まれる。
- 専門高校は学びを実践に展開する機会も多く、地域への関心も高いので、高校生が地域課題に取り組むことで、課題解決する（コーディネートをする）役割ができることもある。そのような能力を身につけ、地域に貢献できると良い。
- 職業としての観光スキルの修得とともに、旅行者として観光を楽しむ力を育むことも必要。

III. 観光教育フォーラム 2021（シンポジウム・ワークショップ）の企画・実施

1. 実施概要

初等中等教育における観光教育の意義や価値に関する、協議会・分科会の検討内容を紹介することや、観光教育の関係者ネットワークを拡充することを目的として、シンポジウム及びワークショップを開催した。

図表 19 観光教育フォーラム 2021 の実施概要

実施日時	令和3年3月13日（土） 10：00～11：30（シンポジウム） 13：00～15：00（交流ワークショップ）
場所	Zoom オンライン会場
対象	■教育関係者・観光関係者 教員、教育委員会、教科研究会関係者、学生（小中高大問わず）、支援組織・NPO、観光・商工部門の自治体担当者、観光関係団体、等
プログラム概要	■午前の部 シンポジウム ○観光庁による講演 「初等中等教育における観光教育の推進について」 ○事例紹介 「コロナ禍の制約下における課題探究学習～観光教育をデジタルで～」 内川 健（成蹊小学校 教諭） 鈴鹿 剛（徳島県立 徳島商業高等学校 教諭） 高嶋 竜平（法政大学 国際高等学校 教諭） ○パネルディスカッション 「これからの観光教育」 ■午後の部 交流ワークショップ ○討議テーマ「観光で新たな学びをデザインする」 【検討テーマ 1】 観光教育で何が教えられるだろうか？何を教えてもらいたいのか？ 【検討テーマ 2】 学校以外の組織と連携した子どもたちの学びを深める授業を考えてみよう ○全体共有
申込人数 参加人数	シンポジウム：当日参加人数 181 人（事前申込 287 人） ワークショップ：当日参加人数 36 人（事前申込 48 人）

図表 20 観光教育フォーラム 2021 における各セッションの実施要旨

	実施要旨
観光庁講演	・観光教育に関するこれまでの取組、観光教育を推進する必要性、本年度事業（協議会・分科会）の取組紹介、今後の取組展望について情報発信を実施した。
事例紹介	・担当学年や学校種が異なる 3 名の現役教員より、コロナ禍においても社会と関わりながら観光教育を展開する方法について、写真や動画を交えながら実践事例を報告いただいた。 ・観光教育に取組む魅力や、活動を設計する中で乗り越えた課題、教育効果に関する現場感等について、それぞれの視点で報告いただいた。 ・視聴者からの質疑（例：実施枠、活動時間、等）にも回答いただいた。
パネルディスカッション	・初等中等教育における観光教育の課題や対策、展望についてパネリストより提言いただき、その後、コーディネーターの進行により議論を展開いただいた。 ・社会・教育・観光の潮流を踏まえた場合に見えてくる観光教育の「意義・価値」や、実効性が高いと思われる「普及方策」について様々な提案をいただいた。 ・視聴者からの質疑（例：具体的な取組方法、等）にも回答いただいた。
交流ワークショップ	・観光関連の事業者や団体の所属者、学校教員、児童・学生が混成のグループに分かれて、学校以外の組織と連携した学習プログラムを検討いただいた。 ・教員や観光事業に携わる大人が感じる子どもに観光教育を通じて教えたいこと、育みたいことに対して、学校内外の活動リソースを活かしたプログラムのアイデアがそれぞれ考案された。 ・最後には、各グループの検討内容を全体共有する時間を設けた。

図表 21 観光教育フォーラム 2021 のチラシ（表面）

観光教育フォーラム 2021

～教育界と産業界で育む小中高生の「豊かに生きる力」～

2021.3.13 土

午前の部

シンポジウム

10:00～11:30

午後の部

交流ワークショップ

13:00～15:00

形式▶▶ オンライン開催 (Zoom) ※事前申込制

参加費▶▶ 無料

対象者▶▶ 教育関係者・観光関係者

教員、教育委員会、教科研究会関係者、学生（小中高大問わず）、支援組織・NPO、観光・商工部門の自治体担当者、観光関係団体 等

観光庁では、観光立国の実現を目指し、次代を担う子どもたちが観光の意義や持続可能な社会について学び合う観光教育の普及に取り組んでいます。本年度は、教育界や産業界が集い、初等中等教育における観光教育の意義や価値について改めて検討してきました。

本イベントは、2020年度の検討内容紹介や、観光教育の関係者ネットワークの拡充を目的として、シンポジウム及びワークショップを開催します。教育関係者の皆様（教員、教育委員会、教科研究会関係者、学生（小中高大問わず）、支援組織・NPO、等）や、観光・産業界関係者の皆様（観光・商工部門の自治体担当者、観光関係団体、等）をはじめ、観光教育にご関心のある全国各地の皆様のご参加をお待ちしております。

お申込み専用URL

<https://forms.gle/bHEhSqVLr2huRp2W9>

お申込みフォーム
QRコード



■お申込み締切■ 2021年3月10日(水)

※定員になり次第、受付を締め切らせていただきますので、お早めにお申し込み下さい

※午前の部のみ、午後の部のみ、両方参加が選択できます

※予約内容の変更・取り消し等ございましたら裏面の「お問合せ先」までご連絡下さい

申込フォームの表示

ページ内にある「お申込みはこちら」からお申込みください

※セキュリティ警告が表示された場合は「許可」をクリックしてください

申込フォーム入力・送信

申込フォーム用のメール内に、各項目を入力し送信してください

申込確認メールの受信

翌営業日中に、ご登録いただいたアドレスに、申込確認メールが配信されます

当日

申込確認メールに記載のURLからZoomにアクセスしてください

※事前にZoomアプリをインストールしておくこととスムーズにご参加いただけます

● 主 催 ● 観光庁

● 後 援 ● 日本観光ホスピタリティ教育学会、日本地理教育学会、日本感性工学会 感性価値創造研究部会

(2021/3/1時点)

図表 22 観光教育フォーラム 2021 のチラシ（裏面）

午前の部 シンポジウム(10:00～11:30)

■定員■ 400名 ※定員になり次第、締め切らせていただきます

■プログラム■

10:00 開会

10:05 観光庁による講演「初等中等教育における観光教育の推進について」

10:15 事例紹介「コロナ禍の制約下における課題探究学習～観光教育をデジタルで～」

発表者 ▷▷▷▷▷内川 健氏（成蹊小学校・教諭）

発表者 ▷▷▷▷▷高嶋 竜平氏（法政大学国際高等学校・教諭）

発表者 ▷▷▷▷▷鈴鹿 剛氏（徳島商業高等学校・教諭）

10:55 パネルディスカッション

テーマ「これからの観光教育」

コーディネーター▷▷穴戸 学氏（日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授）

パネリスト▷▷▷▷▷寺本 潔氏（玉川大学 教育学部 教育学科 教授）

▷▷▷▷▷村上 和夫氏（立教大学 名誉教授）

▷▷▷▷▷森下 晶美氏（東洋大学 国際観光学部 国際観光学科 教授）

▷▷▷▷▷中野 憲氏（株式会社JTB 教育事業ソリューションセンター センター長）

▷▷▷▷▷江藤 誠晃氏（株式会社BUZZPORT 代表取締役）

11:30 閉会

午後の部 交流ワークショップ(13:00～15:00)

■定員■ 40名 ※定員になり次第、締め切らせていただきます

■ワークショップテーマ■ ～観光で新たな学びをデザインする～

①「観光教育で何が教えられるだろうか？何を教えてもらいたいのか？」

②「①で選んだテーマについて学校以外の組織と連携した子どもたちの学びを深める授業を考えてみよう」

■討議内容■

子どもたちの身の回りには、観光と関連した多様な学びのテーマやチャンスが存在しています。様々な地域・立場の参加メンバーによる意見交換を通じて、新たな気づきや学びあいの場になることを目指し、ワークショップを実施します。

事務局で事前に振り分けたグループで、グループワークを行います。

■お願い■

オンライン会議（Zoom会議室）に参加いただける通信環境・通信端末のご準備をお願い申し上げます。

お申し込み・開催に際しての留意事項

- ☐ 反社会的勢力に該当すると認められる場合は、お申し込みを受付することができません
- ☐ 同業者の方はお申し込みをお断りさせていただく場合があります
- ☐ お申し込み多数の場合、ご参加人数の調整をお願いすることがございます
- ☐ 止むを得ない事情により、予告なくプログラムに変更が生じる場合がございます
- ☐ 録音・録画は固くお断りいたします

個人情報の取り扱いについて

- 1.ご記入いただいた氏名、住所、電話番号、その他の個人情報は、当社の「個人情報保護方針」（<http://www.murc.jp/corporate/privacy/>）及び、「個人情報の取り扱いについて」（<http://www.murc.jp/privacy/>）に従って適切に取り扱います
- 2.お預かりした個人情報は、当社において、本セミナーの運営及び本セミナーに関するご連絡、今後のセミナー等のご案内、セミナー等企画の参考、コンサルティングのご紹介の目的に限って利用し、厳重に管理いたします
- 3.お預かりした個人情報は、本事業の委託者である観光庁に対し、参加者名簿として提供する場合がござります。前記の場合及び法令等に基づく場合を除き、ご本人の同意なく第三者には提供いたしません
- 4.お預かりした個人情報は、業務委託により当社以外の第三者にその取り扱いを委託する場合がござります。そうした場合には、十分な個人情報保護の水準を備える者を選定し、契約によって個人情報の保護水準を守るよう定め、個人情報を適切に取り扱います
- 5.申込書の必須項目には必ずご記入ください。必須項目にご記入頂けない場合は、お申込みをお受けできない場合がございます。また、ご記入内容に不備がある場合は、改めて内容の確認をさせて頂く場合がございます。なお、必須項目以外のご記入は任意ですが、できるだけご記入いただけますようお願い申し上げます
- 6.お預かりした個人情報の開示、訂正、利用停止等若しくは利用目的の通知のご請求、または個人情報に関する苦情の申し出、その他の問い合わせにつきましては、表面記載の「お問い合わせ先」までご連絡ください

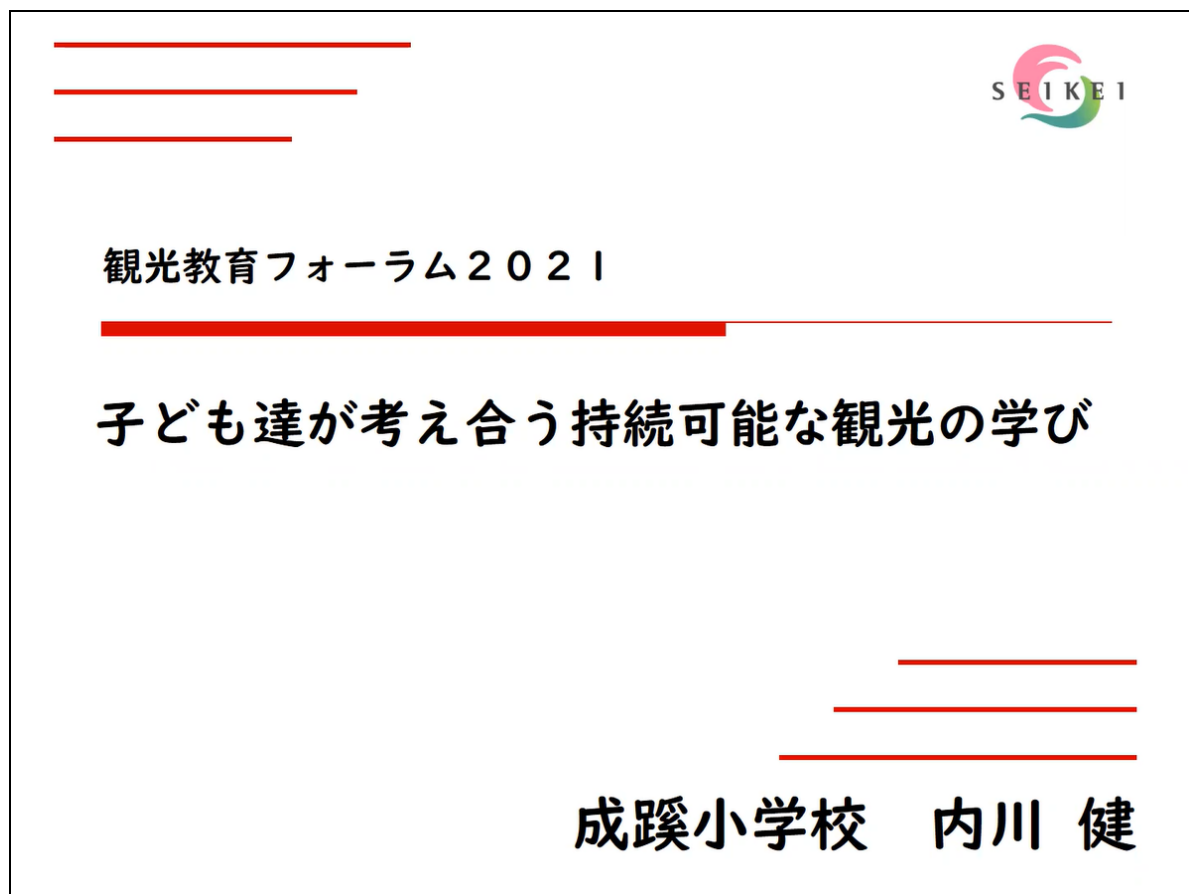


お問合せ先

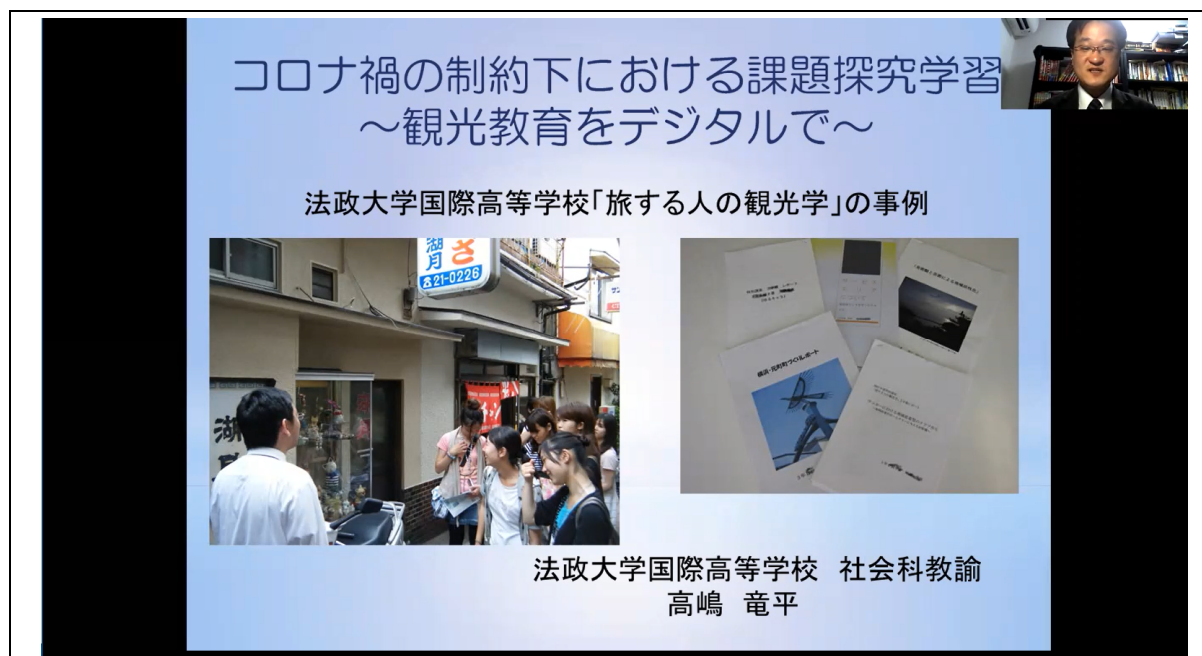
三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) 観光教育シンポジウム・ワークショップ2021 事務局

担当: 吉田夏稀、平川彰吾、小森清志 E-mail: k-edu@murc.jp

図表 23 観光教育フォーラム 2021 事例紹介の様子（内川 健（成蹊小学校 教諭））



図表 24 観光教育フォーラム 2021 事例紹介の様子（高嶋 竜平（法政大学 国際高等学校 教諭））



図表 25 観光教育フォーラム 2021 事例紹介の様子（鈴鹿 剛（徳島県立徳島商業高等学校 教諭））



図表 26 観光教育フォーラム 2021 パネルディスカッションの様子



図表 27 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップの様子（集合写真）



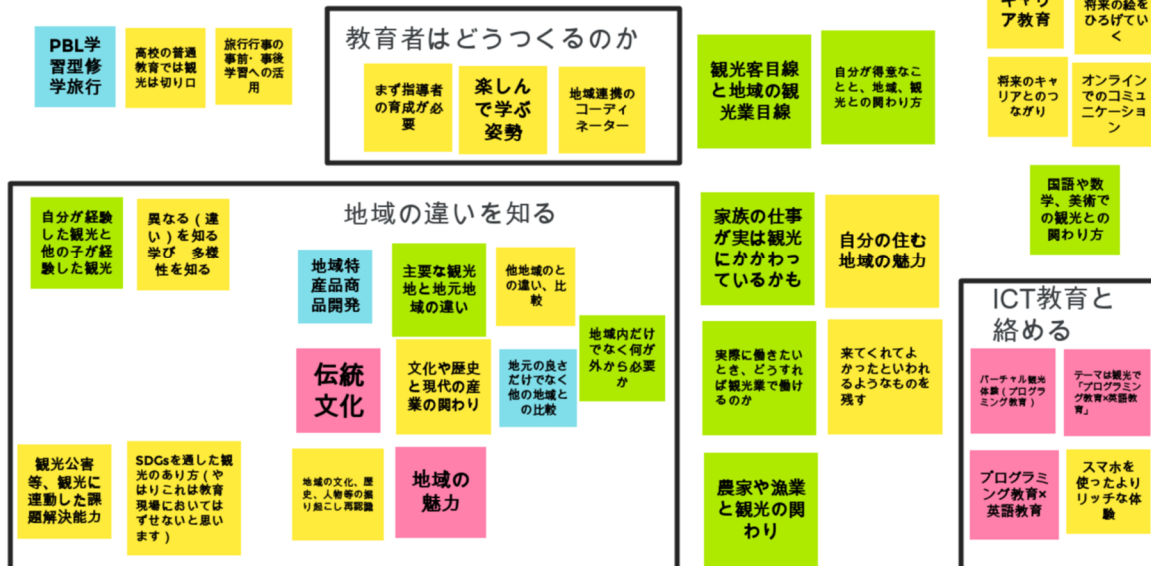
図表 28 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ1 討議結果

■グループ1

テーマ1

「観光教育で何が教えられのらうか？何を教えてもらいたいのか？」

※付箋の移動は事務局で行います。



テーマ2

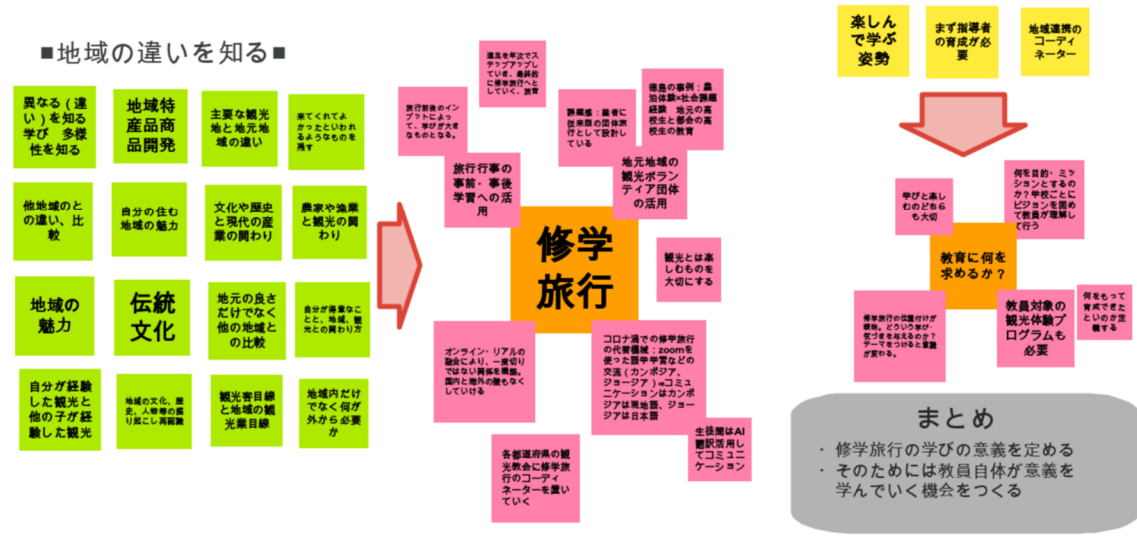
「学校以外の組織と連携した、子どもたちの学びを深める授業を考えよう！」

（IIで議論した内容を基に...）

※付箋の移動は事務局で行います。

■教育者はどうつくるのか■

■地域の違いを知る■



修学旅行

まとめ

- ・ 修学旅行の学びの意義を定める
- ・ そのためには教員自体が意義を学んでいく機会をつくる

図表 29 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ1 討議結果 (つづき)

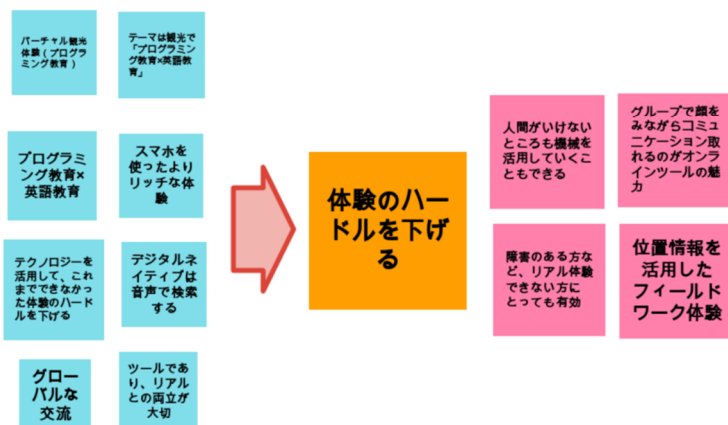
■グループ1

テーマ2

※付箋の移動は事務局で行います。

「学校以外の組織と連携した、子どもたちの学びを深める授業を考えよう！」
(IIで議論した内容を基に...)

■ICT教育と絡める■



図表 30 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ2 討議結果

■グループ2



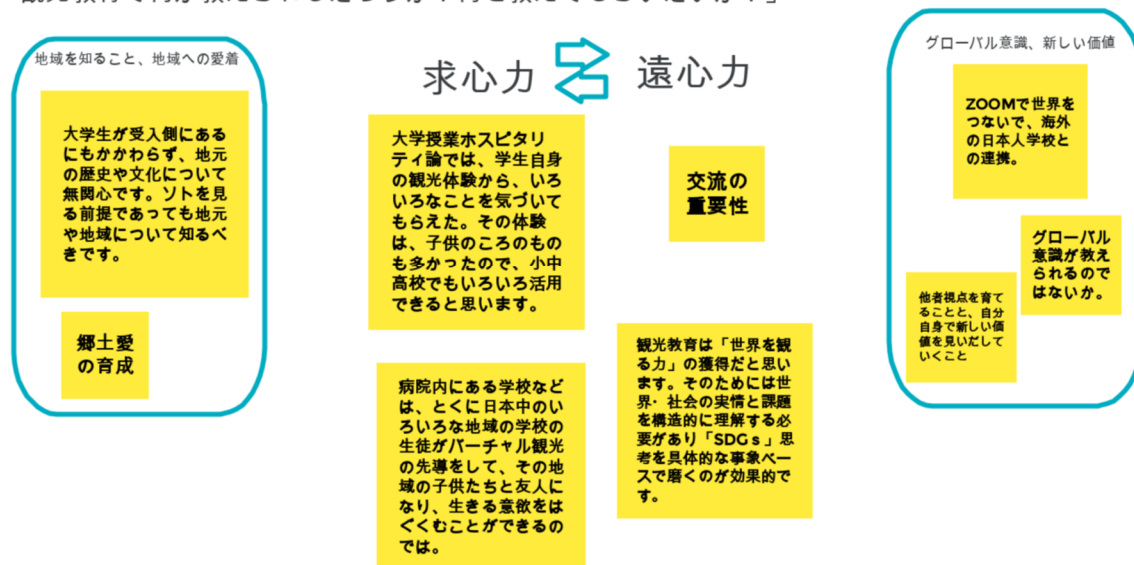
図表 31 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ3 討議結果

■グループ3

テーマ1

「観光教育で何が教えられようか？何を教えてもらいたいのか？」

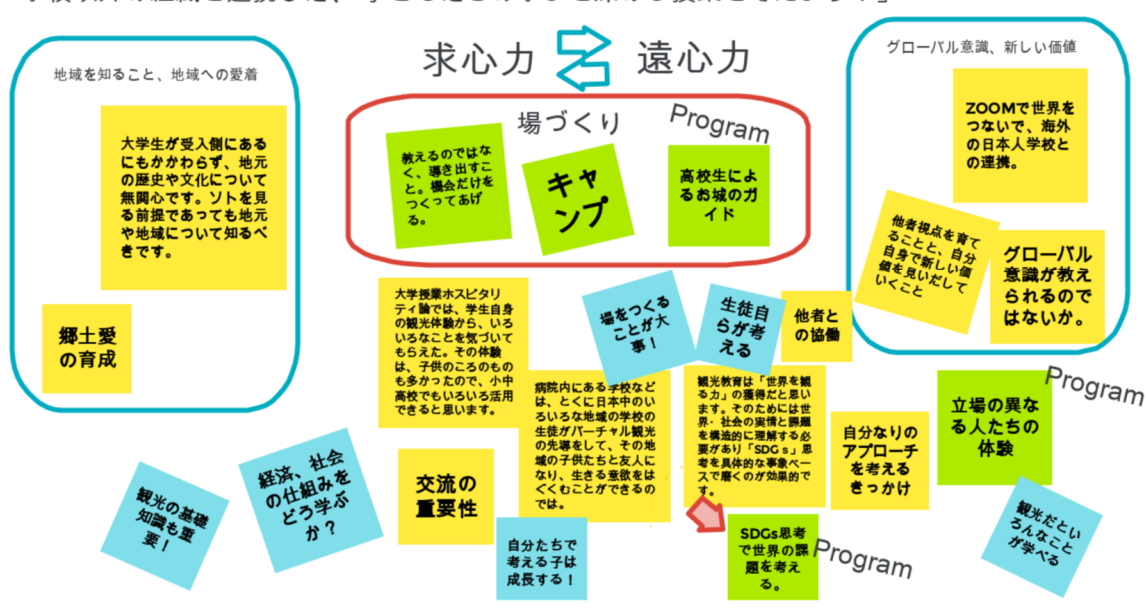
※付箋の移動は事務局で行います。



テーマ2

「学校以外の組織と連携した、子どもたちの学びを深める授業を考えよう！」

※付箋の移動は事務局で行います。



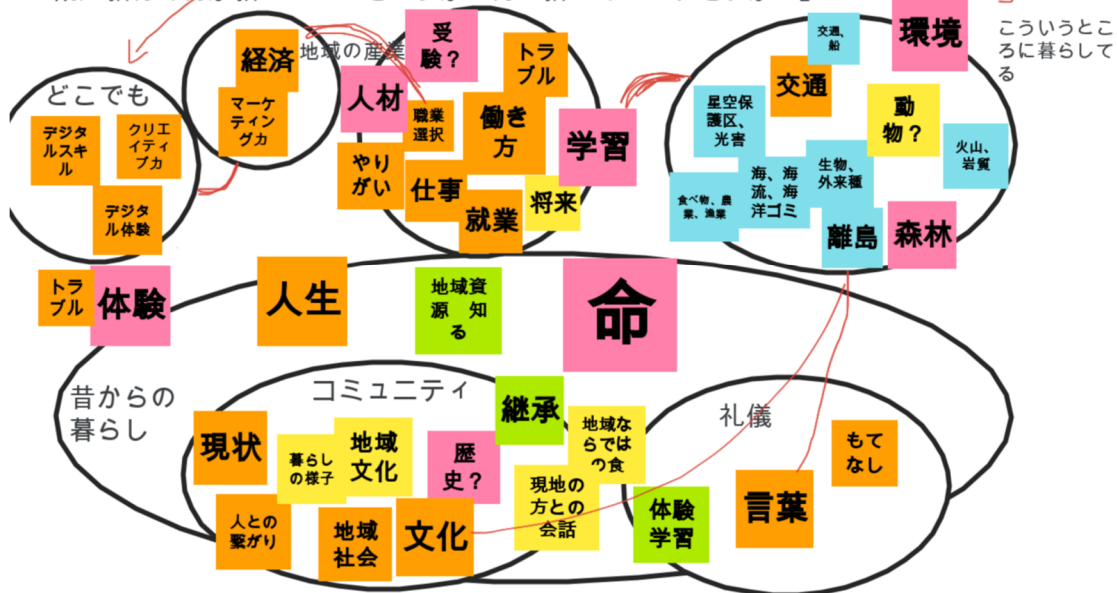
図表 32 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ4 討議結果

■グループ4

テーマ1

「観光教育で何が教えられようか？何を教えてもらいたいのか？」

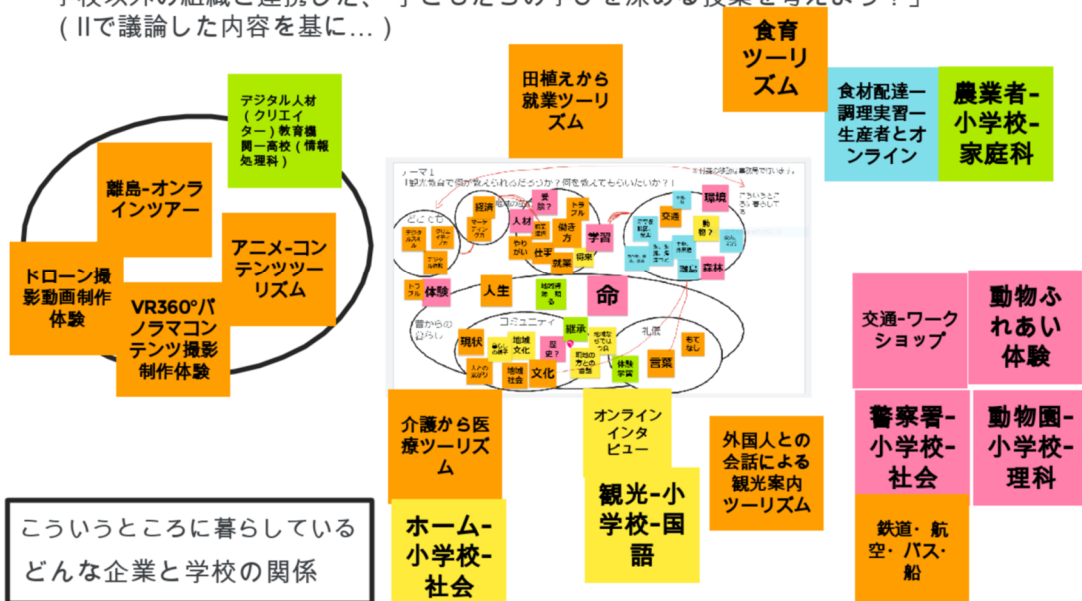
※付箋の移動は事務局で行います。



テーマ2

「学校以外の組織と連携した、子どもたちの学びを深める授業を考えよう！」
(IIで議論した内容を基に...)

※付箋の移動は事務局で行います。



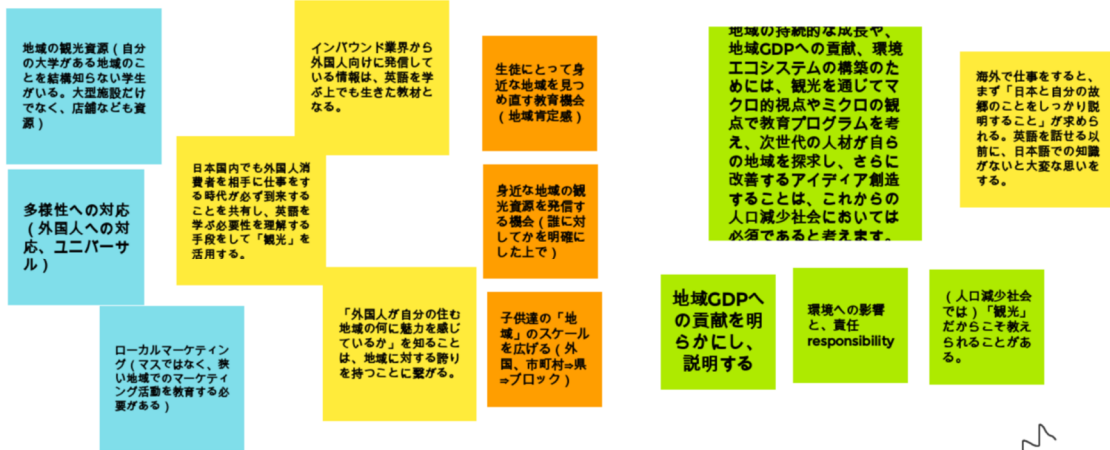
図表 33 観光教育フォーラム 2021 交流ワークショップ グループ5 討議結果

■グループ5

テーマ1

「観光教育で何が教えられるだろうか？何を教えてもらいたいのか？」

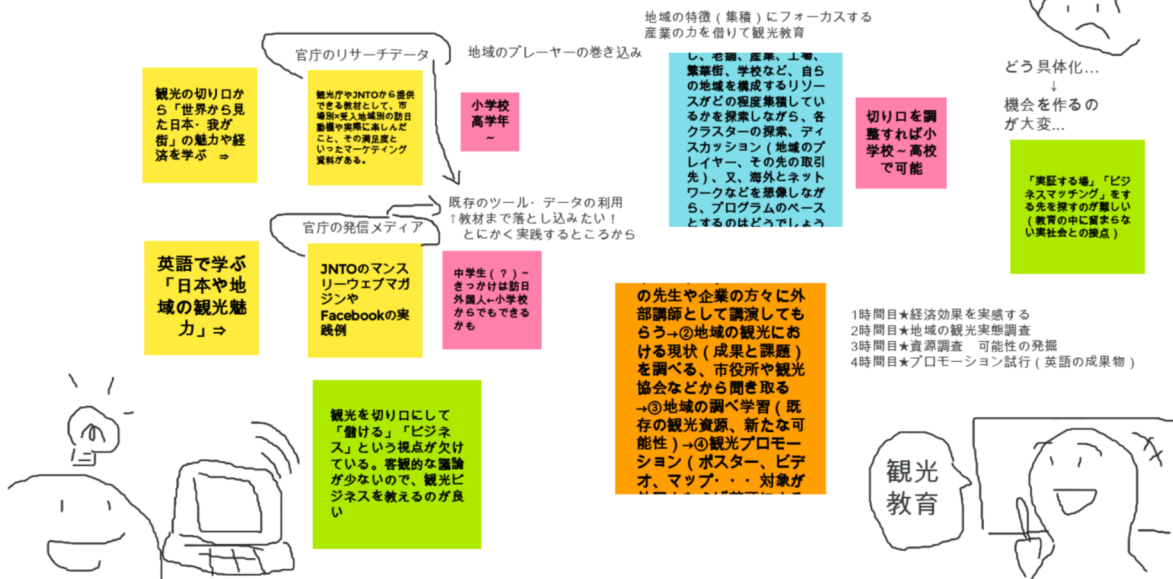
※付箋の移動は事務局で行います。



テーマ2

「学校以外の組織と連携した、子どもたちの学びを深める授業を考えよう！」

※付箋の移動は事務局で行います。

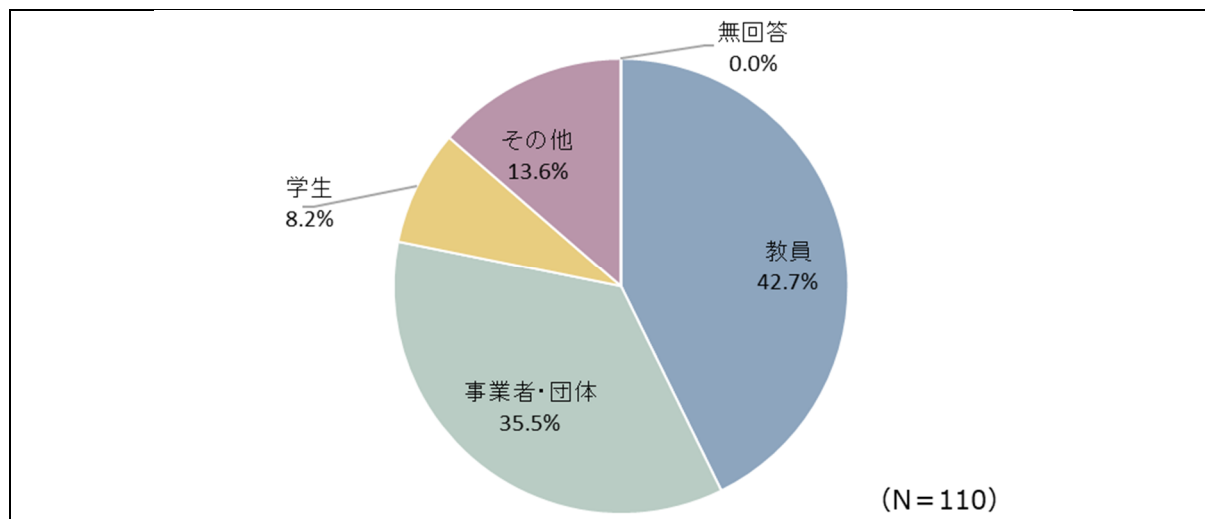


2. 参加者アンケート

参加者アンケートの結果を以下に示す。

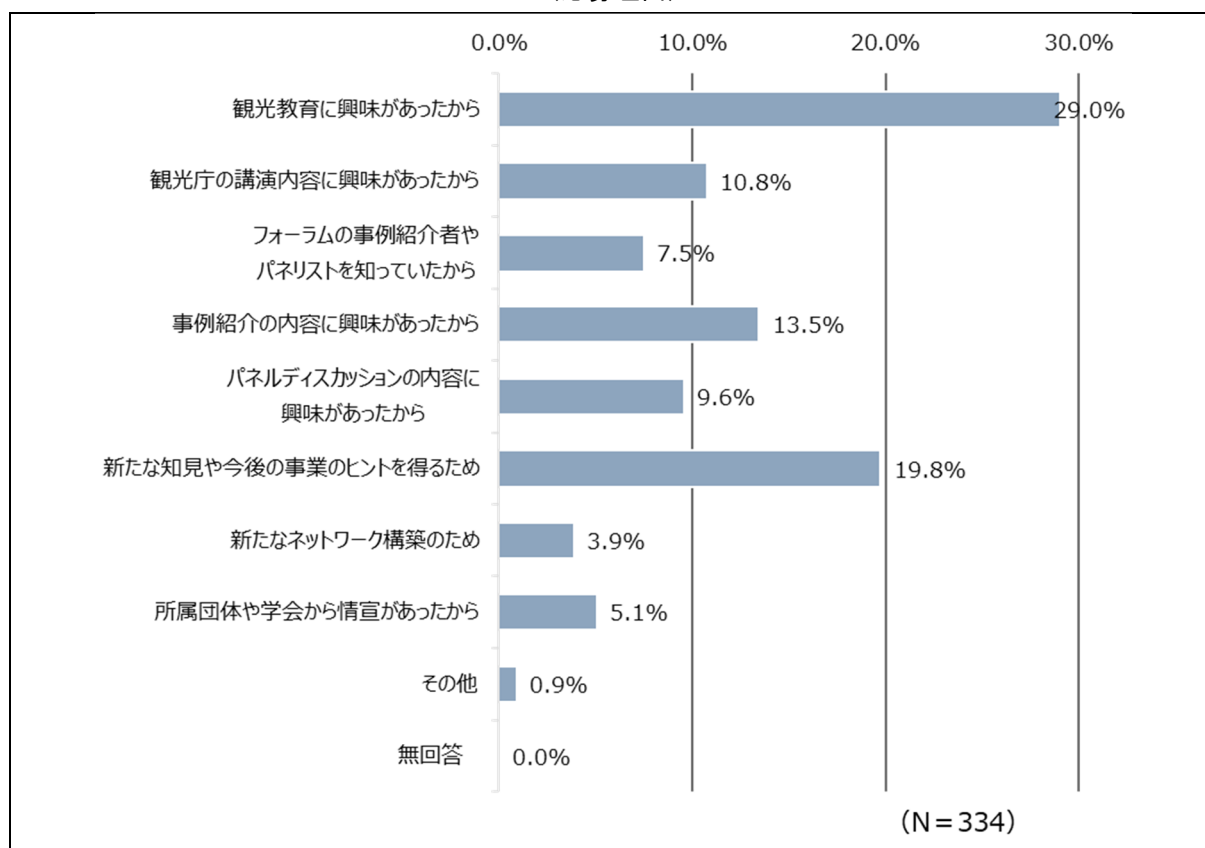
図表 34 交流ワークショップ参加者アンケート

(属性)



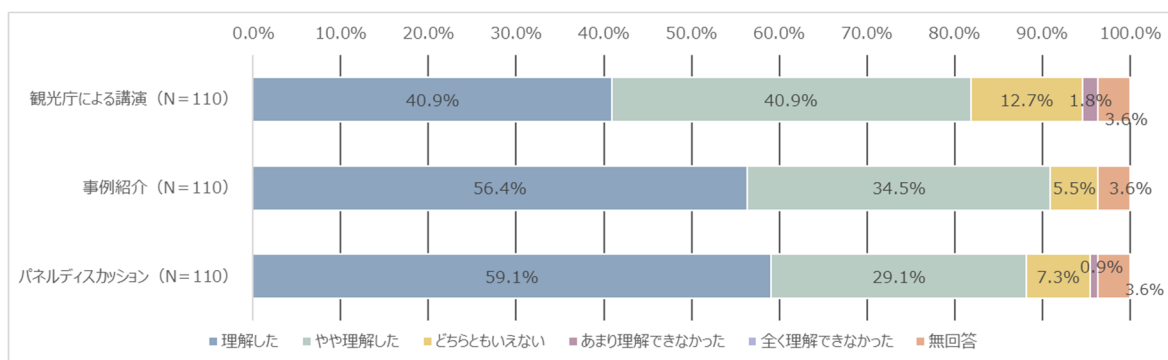
図表 35 交流ワークショップ参加者アンケート

(応募理由)

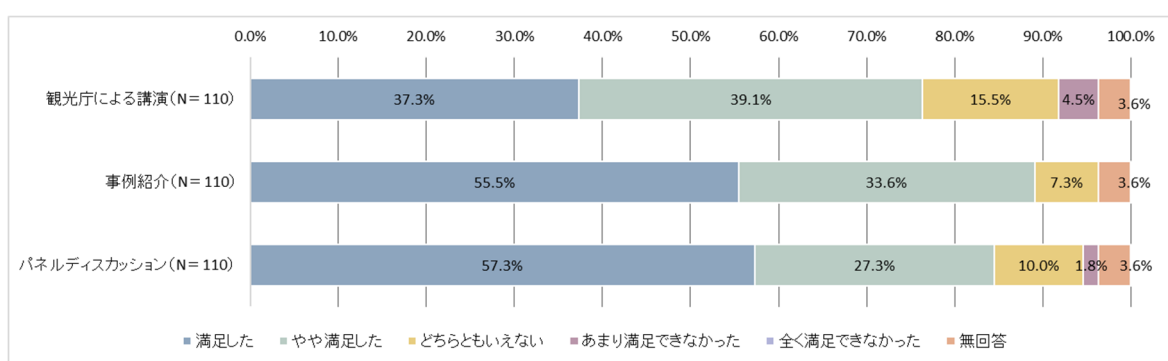


図表 36 交流ワークショップ参加者アンケート
(午前の部：理解度・満足度)

理解度

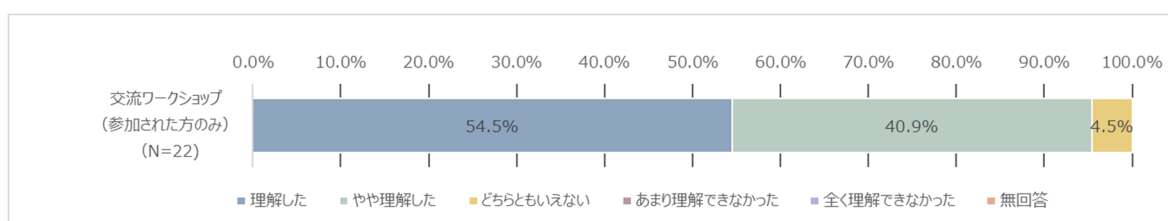


満足度

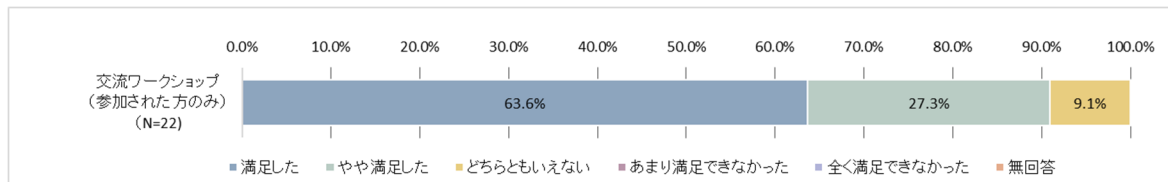


図表 37 交流ワークショップ参加者アンケート
(午後の部（交流 WS）：理解度・満足度)

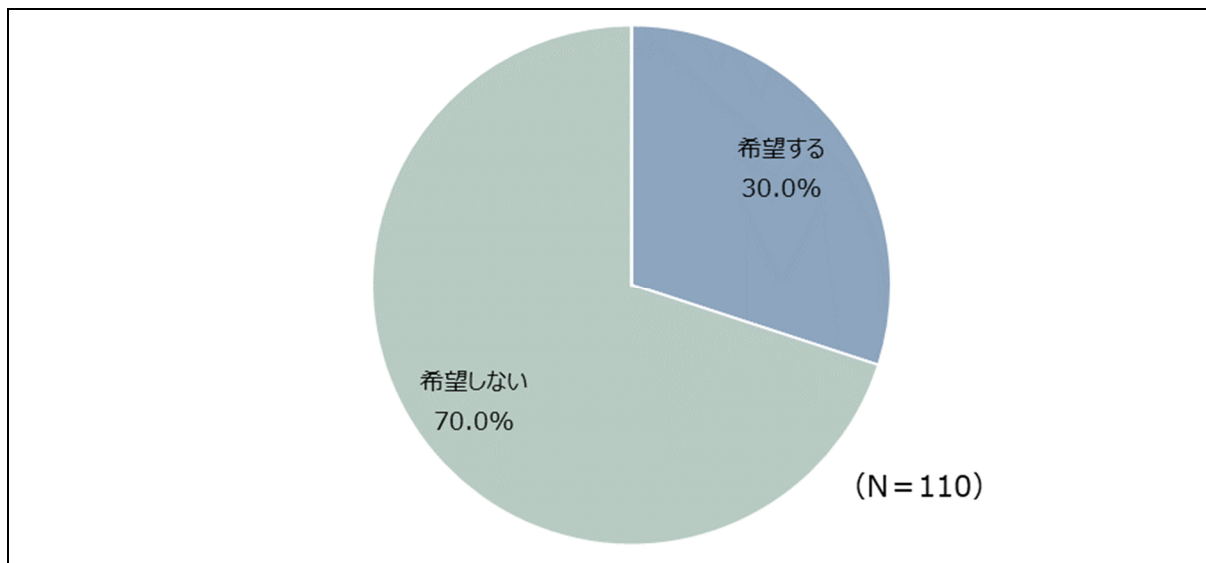
理解度



満足度



図表 38 交流ワークショップ参加者アンケート 「観光教育に関する、観光庁との意見交換意向」



IV. 業務総括

1. 本年度議論の意義

本年度の協議会・分科会での議論を通じて、昨今の時代背景を考慮して観光教育より広く捉えなおし、観光教育に特有の意義・価値を見つめ直した。様々な教育シーンへと観光教育が浸透しやすくなることも意識し、「今、この時代に観光教育を実施することに意義がある」として、本年度の議論は展開された。

以下、過年度事業のとりまとめに基づき、観光教育の効果を3段階（基礎・発展・実践）に大別し、本年度の主要な論点や、新たな論点について概説する。なお、各段階の活動イメージを端的に表すキーワード（例：出会う・気づく・感じる）を、案として併記している。

（1）出会う・気づく・感じる ～観光教育の基礎となる効果～

観光資源としての価値を持ちうるあらゆるものを対象に、様々な価値と触れ合うことが、様々な観光教育に共通する学びの出発点として捉えられるものと整理を試みた。

そして、観光領域の学びへとプログラムが展開しやすくなるように、間口をより広げる概念として、観光的な営みという表現を検討した。観光的な営みは、幅広い業種に内在する行為であるとともに、普段の暮らしの様々な場面に存在している。子どもに身近なテーマや、関心を持つようなテーマが観光教育には多く存在することを本年度の議論を通じて確認した。

（2）広げる・深める・高める ～観光教育の発展となる効果～

暮らしの様々な場面に観光的な営みが存在すると同時に、様々な教科においても観光的な営みが扱われうることが議論された。社会科や英語だけでなく、人文系の科目（国語・芸術・道徳）や生活系の科目（家庭科・保健体育）、さらには、理工系の科目（情報・技術・理科・数学）においても、観光と関連する学びを行える可能性が本年度は議論された。これは、専門学科における、観光教育との関わりがあまり論じられていない専門科目にも同じことが言える。

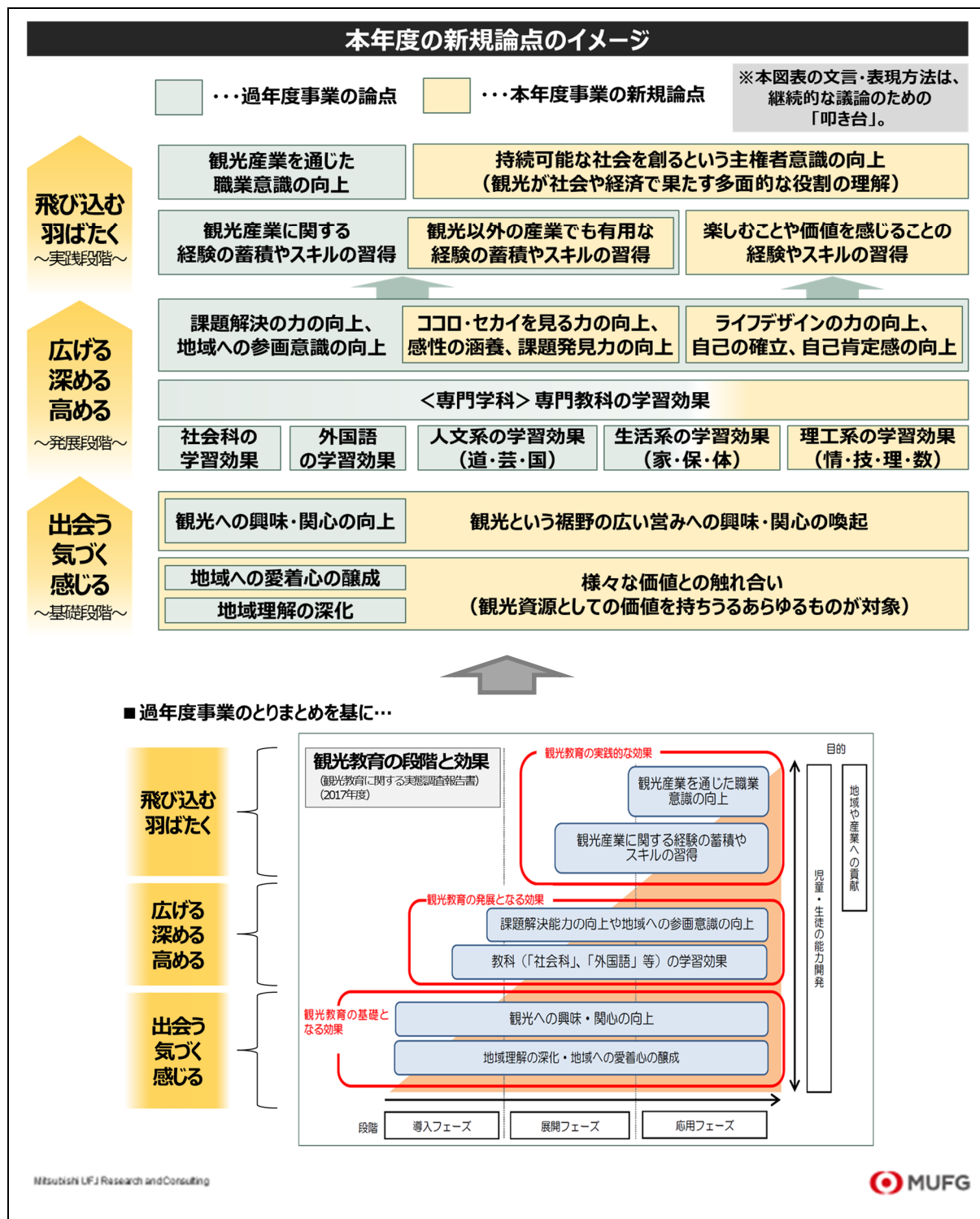
議論を通じて、様々なアプローチの観光教育が示唆される中、観光教育に特有であり、かつ、社会動向に鑑みると重要と思われる教育効果として、感性の育みを通じた課題に気付く力が挙げられた。さらに、社会と交わることで、自身のキャリアを見つめることや、豊かな人生とは何かという視点（例：ワーク・ライフ・バランス）を持つことにつながり、結果として自己の確立に繋がることも重要であると議論された。

（3）飛び込む・羽ばたく ～観光教育の実践的な効果～

観光産業の裾野は広い故に、観光教育の効果は観光人材の確保にとどまらず、観光以外の産業でも活躍できる人材の育成にも貢献すると議論が及んだ。そして、観光の提供者側だけでなく、観光の享受者側としての経験やスキルを習得することも意識することで、需給両面から日本の観光振興を支える取組になりえるとの議論がなされた。

そして、観光教育を経験した子どもたちの未来の姿として「持続可能な社会を創ること」を観光教育の大きな目的として掲げることで、様々な立場の関係者が観光教育を受け入れやすくなるとともに、あらゆる教育シーンに馴染みやすくなると提言がなされた。

図表 39 本年度の新規論点のイメージ

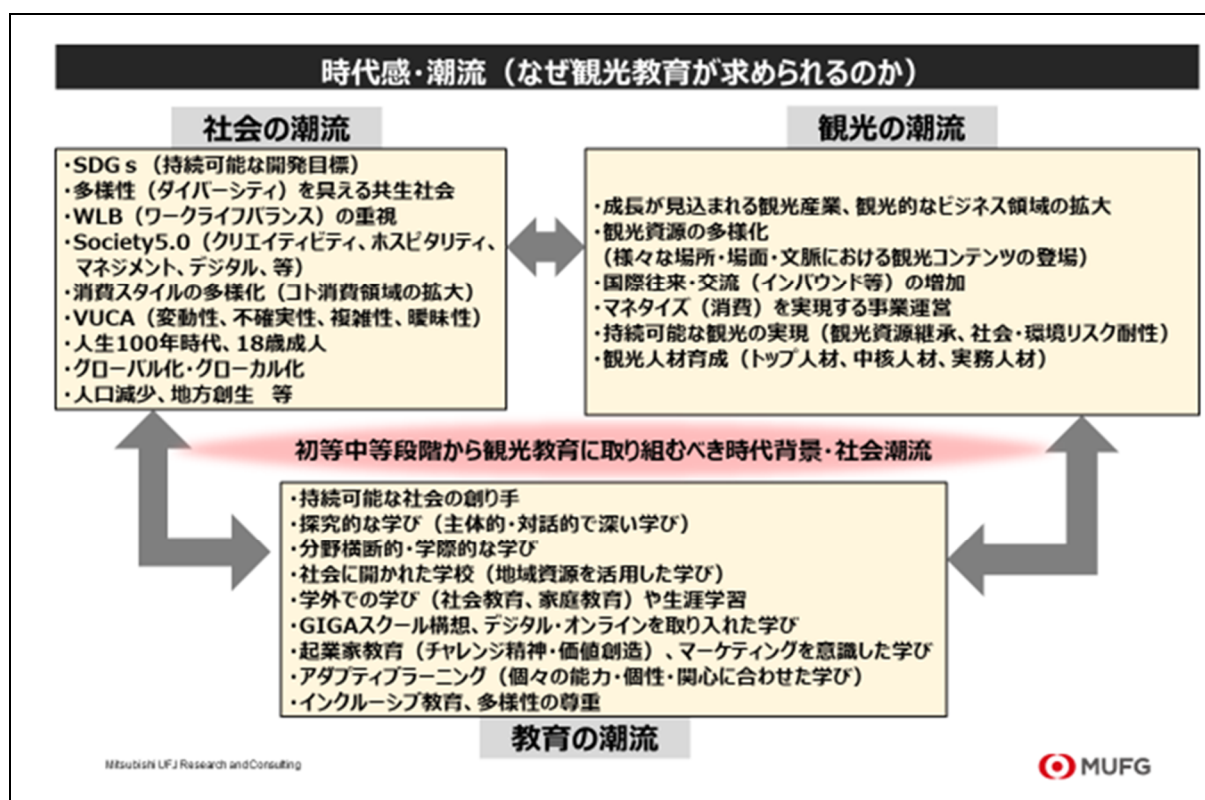


2. 初等中等教育における観光教育をとりまく「時代感・潮流」について

(1) 総論 ～各種の社会動向に沿う観光教育～

初等中等教育で観光教育に取り組むことで、各種の社会動向（社会・教育・観光の潮流）に対応した教育を展開していける可能性が議論された。例えば、下記図表に示すように、多様なトピックを意識した学習プログラムを設計することができる。いずれも重要な社会要請・社会課題であるために、初等中等教育における観光教育は、次世代の観光人材育成にとどまらない社会的な効用を期待することができる。ここに、観光教育を初等中等教育から取組んでいくことの大きな意義が存在すると指摘がなされた。

図表 40 初等中等教育における観光教育をとりまく「時代感・潮流」



(2) 継続的な検討事項

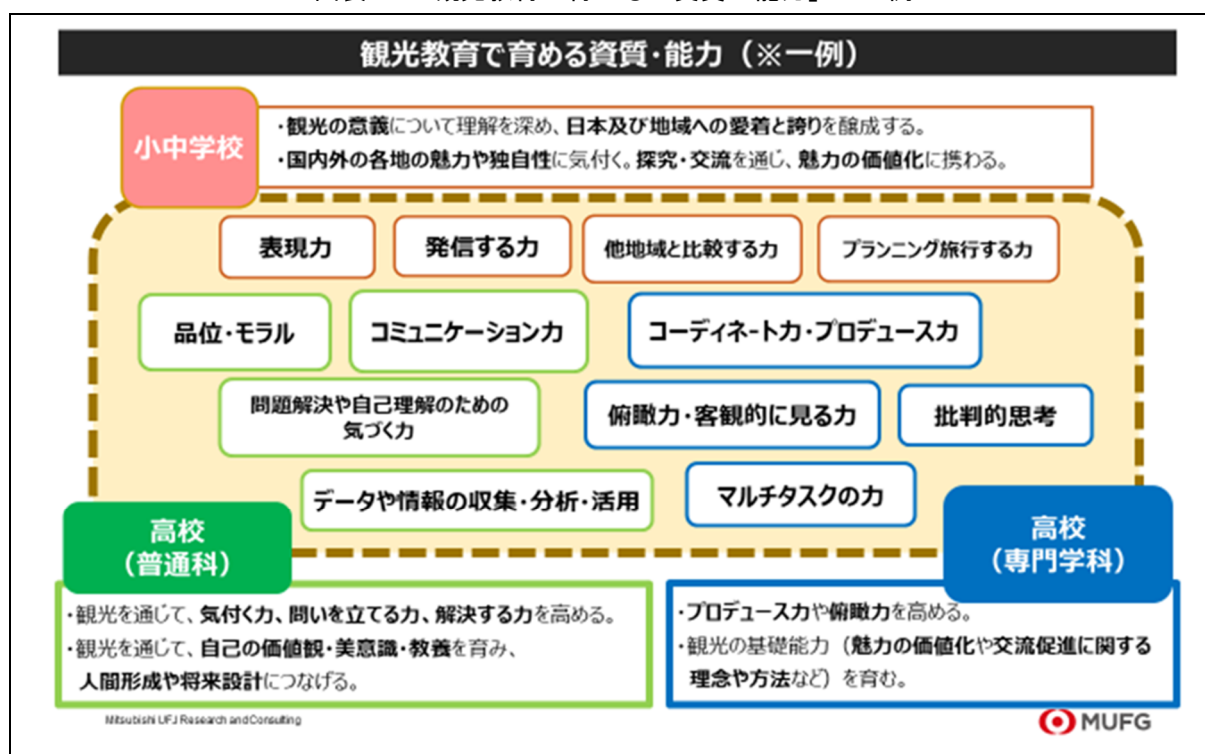
今後、それぞれの社会課題・社会要請に対応する学習プログラムを積極的に創出することが求められる。そして、どのような取組が生まれているのかを整理することで、初等中等教育で観光教育に取り組むことの社会的な意義に関して、認知が進むと考えられる。

3. 初等中等教育における観光教育で育める「資質・能力」について

(1) 総論 ～多種多様な力を育める観光教育～

観光教育を通じて育める資質・能力を、学校教員の具体的な取組から抽出していった結果、プログラムの内容に応じて、多種多様な力（資質・能力）を育むことができる可能性が確認された。一方で、下記図表に示すように、各発達段階・学校種別に応じて、中心的になると考えられる活動のイメージが議論され、その活動に付随する主な資質・能力がいくつか例示されるに至った。

図表 41 観光教育で育める「資質・能力」の一例



(2) 観光教育で育める「資質・能力」について

小学校段階に関しては、探究活動や交流活動を通じて、「地域の魅力や独自性に気付く」、それらを「表現・発信」することで、地域の魅力を価値化する一翼を担える可能性などが議論された。

高校（普通科）に関しては、大学への進学や、その先の多様なキャリアを念頭に、「価値観・美意識・教養」を養い、「気付く力、問いを立てる力、解決する力」を育むとともに、「人間形成や将来設計」に繋げていくことを意識することが導入につながりやすいのではないかと議論された。

高校（専門学科）に関しては、実務的な能力やプロデュース力など、社会で役立つスキルを磨き、実際に観光振興に貢献する人材の育成を意識していくことが重要であると議論された。

検討を通じて挙げられた、観光教育を通じて育むことのできる力を以降に示す。観光の提供者に求められる力だけでなく、観光の享受者に求められる力にも議論が及んでいる。

1) 観光教育では様々な力を育めるという事実

● 事前意見も含めて、育む力はいっぱい出されており、どれも大事で、今日示していただいた観光教育の目的の中にもたくさん良い言葉が入っていて選べないのは事実。どれも大事で、全部並べて良いのであれば並べたい。
● 育てたいと思っているものが多く育つのが観光教育。例を挙げると、国際的な視野、郷土を愛すること、コミュニケーション能力、言語学習への意欲、取材力、企画力、課題発見力、課題解決能力、アイデア発想力などがある。
● どこまで入れるかによって、何でもありになってしまうので悩ましいものの、外に非常に目が開かれていくというグローバルな視点を持つ部分がない印象。
● 民間事業者として観光教育を提供する中で、教育効果をコンピテンシー（非認知能力）としてあらわす中では、①認知（課題設定、解決意向、論理的思考、疑う力、創造性）、②自己（個人的実行力、内面的価値、ビジョン、自己効力、成長、興味、耐性、感情コントロール、決断力）、③他者（表現力、共感・傾聴力、外交性、柔軟性、寛容、影響力の行使、情熱・宣教力）、④コミュニティ（組織への働きかけ、地球市民、組織へのコミットメント、誠実さ）に分けて整理している。

2) 他者の視点、観光先進国の国民、マーケティング、ホスピタリティ

● 観光教育がふるさと教育と異なる点は、「他者の視点」があるかないかが大きな違いだと考える。来訪者の立場で自地域をどう見るのか、逆に旅をする際は現地の人と関わりながら自分たちがどのように見られているかを類推しながら旅を楽しむなど、観光大国までいかずとも観光先進国の国民を標榜できないか。観光先進国の担い手づくりとして、観光教育のターゲットの1つになる。
● 相手が本当に行きたいと思っているのかという問いかけを改めてすることで、初めて他者の視点に立てる。自己中心的な見方からの脱却により、広い視野を得ることができる。観光教育こそが楽しさを感じながら、マーケティングを含めた他者の視点に立つことができる機会になる。
● 観光ではもともとホスピタリティが非常に重要。他人を楽しませるといった観点や、他者の目線で思いやりをもつことが原点。地域の素材に入っていって誰かに楽しんでもらうことを交流を通して体験するためのきっかけは、小中学校の時点では観光が適しており、「人間の心に関わる力」を育てることができる。

3) 旅行する力

● 旅行の技術（どこの国に行っても旅行ができる能力）を育むことは重要な視点。
● オンラインも活用し、コミュニケーション力や、人と交流を促進する方法や理念を学んでもらいたい。
● 旅行する力、例えば、スマートフォンの利用方法、電光掲示板の見方、情報処理力は中学生で学びがスタートするか。
● 生きていく中で、旅をするにどのような意味があるのかをきちんと捉えることが重要。
● なぜ人々は旅行をすることになったのか、ということ学ぶことも重要。

4) 品位・モラル

● 観光をしたときや、外に行った時の態度やマナーなどを悪いと感じており、それを教える機会がないことを問題だと感じる。
● 文学・美術・音楽・スポーツなどの実技系の学びでは楽しさがあると思うが、さらにその中の最高の美しさのようなものに「触れたいと思う」、「目指したいと思う」ということを観光で体験させたい。(例：なぜ京都がきれいなのか、体験し、考え、品位を磨く)

5) 価値観・美意識・世界観・教養・問う力・気づく力

● 現状は教育全般として就職のための学習が強く、豊かに楽しく過ごすことの視点が欠落している。経営やビジネス・まちづくり・システムなどの視点が観光教育には多いが、小中学校の多感な時期こそ観光の楽しさや、観光の魅力を教えることが必要。
● 今まで観光は、産業や日本の教育で美德とされる労働、稼ぐ、成長という文脈で教えられてきた。今後は国語（文学）や芸術が担ってきたような、いかに豊かに生きていくか、生活にゆとりを持つかなど、今までにない哲学的な価値観を表明することも大事ではないか。
● 旅の受入れ側として生徒がどう振る舞うか、キャリア形成をどうするかという視点だけでなく、自分が楽しむという視点、「自分のライフを楽しむ視点」も存在する。
● 日本というのは、働くことが正しい、働かないことは正しくないと教える風潮がある。つまり、生産は正しいが消費は正しくないと教えており、その典型が（お金の）ムダ使いをするなという教えか。でもそれは、観光からすれば間違い。
● 実際に就職すると、働くことだけでなく、働く時間以外の時間の重要性に気付く。
● 何に楽しみを見出し、人生を豊かに生きていくか、高校教育ではなかなか持ちにくい観点。どこかで豊かな人生をイメージしながら進路を検討してほしいと思う。大学などの進路選択では、将来の楽しみや仕事のバランス、こんなスキルがほしいなど、人生を楽しむ視点も含めた進路指導が必要。観光を通じて自分のやりたいこと、豊かな人生を考えてみないか、と提案できるかもしれないと思う。
● 美意識や世界観が育たなければ、自分がどう取組んだら良いかという自分の構えができず、観光産業も前向きに発展していくための資源を多く失ってしまうことに繋がる。
● 物事を多角的に判断できる幅広い教養として大学・社会人ではリベラルアーツがあり、それを小中学校や高校の段階に落とし込む意味では、ベースとなる生きる力と捉えられる。
● 教養に関しては、知れば知るほど面白くなることを教えること。
● 視点を広げると、今後、何か断片的な知識を持ったところで、知識は更新されていってしまう。自分には何が足りないか、世の中としてはこれが必要、として動くための体力として教養も必要。
● 問題を立てる力が大事。そもそも、問題を発見することができない人も多い。問題を与えれば、答えられることは結構できる。100分与えられたら、95分ぐらいは問題を立てる方に時間を使った方がよい。問題が立てられたら、あと5分で回答はでる。問題を立てる力というのは、よく見る、観察するなど当たり前のことになる気がする。
● すごく視野を広げると、本質的なポイント・問題はここなのだと収斂していかないといけない。拡大と収斂を小中高の学科や科目でやれば良いのかもしれない。

● 民間事業者として観光教育を通じて中高生と触れている中でも、問う力、気づく力についてはあまり焦点が当たっていないかもしれない。探究学習や課題研究に取り組む学校も多いが、何の問いも出ず、最初の研究のテーマやディスカッションなど初めの一步がものすごく踏み出しにくい印象がある。
● 美意識や世界観、問う力などを今の高校生に対して講座があると、自分の世界がもう1つ膨らむのではないか。
● 教養の取り扱いは、偏差値の違いや学校によって違うと思われる。偏差値がそれほど高くない学校は、教養というよりも身体知で教えていくことができる。偏差値の高い学校は、教養を教えることがシステム化されている。悩ましいのは中の上ぐらいの学校で、第2志望でも受かれば良いかという雰囲気のある学校だと教養がないがしろになり、まとまりがない状況になっているかもしれない。
● 昔から言われているが、人間は好き勝手に良いといわれても分からないのでお題をくださいということになってしまいがち。自由であることについて教えないといけない。
● 好きなものを見つけさせるということを早い段階からやらないと、あまり面白い人が育たない気もする。逆に言うと、各科目を学ぶ意味は何か、なぜ自分は勉強しているのかを学んだり考える機会がないのかもしれない。
● 学ぶ意義について、高校までは、あなたがこうすると社会はこう発展します、と教える一方で、学ぶとあなたはどのように自分の糧にできるか、という話はあまりないかもしれない。

6) 国際理解・共生社会

● 共生がキーワードか。家族や友人の共生→地域の共生→人類の共生（≒平和）と繋がる。共生社会の取り戻しや実現が観光のキーワードと捉えられる。
● 実社会との関わりや意義目的に繋がる学びへと磨き上げ、観光教育を成熟させる必要があり、国民各層に観光教育が必要な学びだと理解してもらう必要がある。

7) 社会の中で学ぶ

● 普通教育は教室で実施し、社会と接点を持たない授業が一般的。社会との接点を持って活動できることが観光（教育）の強み。それを伝え、現場の先生がどこまでやる気を持ってくれるか気になる。
● 子どもの興味関心を高めるためには、机の上だけでは絶対に伸びないと思う。色々な体験活動や、自分が出向いて体感することや学ぶことを取り入れる必要性がある。
● 社会とのつながりの中で、キャリアについて教えられる可能性があるのが観光教育の特殊性。
● 観光教育は主権者教育の面を持つ。社会への関わりを意識するきっかけになり、教員の用意した枠組ではなく自分の力で社会が動くことを実感することも時にはできる。観光教育で実感できる特徴的な成果であり、観光教育の意義・目的ではないか。
● 主権者教育は、政治・投票など二項対立で課題を捉えるのではなく、どのように社会と関わるかということを学んで体験するかということ。
● 学校は教員だけの組織なので、教員間で社会と関係ないことを一生懸命やり、それが学校の権力構造と繋がるなど、不健全な状況に陥ることもある。そのため、社会とつながって、社会で動いていることと教員が連携する必要がある。社会がどう動いているか、教員も学べ、生徒も学べる。社会連携で教員も学生も学ぶ仕組みを作って、それを観光庁が証明（ディプロマ）する仕組みがあると良い。
● 高校の専門学科も普通科も同様に、社会との関係づくりが重要。観光としてどのような職業の広がりがあるか、そこに関わる人たちはどのような人たちか、どのような仕組みと制度でつながっているのか、をきちんと教える必要がある。また、それらの方々と交流をしながら、観光における価値や課題を知ることが重要（例：外国の文化との違いは、教員ではなく外部とのつながりで深めていく必要がある）。

8) 俯瞰的・客観的に見る力、批判的思考

● 他地域との比較を通じて、「俯瞰する力」が身に付く。皆が同じ地域を調べるのではなく、共通した1つの見方を基に様々な地域を調べていくという取組方もできる。
● 高学年の場合は、観光を軸に自治体間比較などを通し、視野を広げるなど、多角的・批判的な視点も含めていくと良い。観光を軸に俯瞰的な視点を持つことができる。そういった視点を、カリキュラムに落とし込めるかの検討が必要になる。
● 小学校段階では地域に目を向けて学ぶ段階で、中学校や高校では地域から県内に広がったり、場合によっては日本に広がったりという形で広い視点になり、専門高校は海外まで含めてきちんと見ていく、比較していくというのが発達段階別で見ていくべきところか。
● 地域との関わり中で、どのように地域の人がお金を生み出しているのか、消費者になる前に生産者の経験をしてほしい。
● 海外に行った子は日本の郷土の良さをもう一度見ている子が多く、一回は外に出てもまた戻ってきたいとなる子も多いのは事実。
● 観光リゾートコースがグローバル観光コースに改名され、英語力の向上、異分野理解、観光の知識や技能を身に着けたグローバル人材の育成が狙いとなっている。

9) 応用力・多角的視点

● 観光は非常に応用が利く。
● 観光教育が様々な教科で横断的に実施教育できる。
● 専門教科だからこそこ他にはない色々な学びや方法がある。
● 観光教育を受ける生徒は、観光教育をあまり受けない生徒と比べて、異なる視点を持つようになっているという評価を受けている。
● 小中高どれをとっても、地域を深く知ることができる。その結果、外にも興味を持って知っていけることが観光教育の持つ価値。
● 高校普通科は、専門的な技術や知識をそれほど重視しないところがある。この技術や知識が社会の中でどう作用するのか教える必要があるか。
● 小中高と学んできた、いわゆる国語・算数・理科・社会の枠組みから社会の実際の研究あるいは実社会での活動につなげていくときに観光の観点で地域を見ていくと、今まで持たなかった発想を持てるのではないかな。今までの学校教育の枠を壊して、社会に自分がつながっていくことを考えていく観点が観光教育の中で得られる。
● 観光教育ではアウトプットがしやすい。教育活動には様々な教育目的をもって各教科や学校全般の活動に取り組まれているが、その成果が具体的に見える形にならないことが多々ある。しかし、学校には教育活動に一定の評価をしなければいけないため、こういった形で地域とつながり、生徒たちはこのようなことを考え、実際にこのようなことをやってみましたということを見える形にすることができる点で、観光教育は取組やすい。観光という大きな枠組みで教育を考えてみませんか、今後観光教育を普及していく中で是非とも PR したいところ。

10) 創造力、提案力、企画力

● 単純に旅行ツアーが企画できるということだけではなく、様々なモノの考え方としてのコーディネート能力、プロデュース能力を育てていけると、観光分野のみならずもっと広い分野で活躍できる生徒が増えていくのではないかな。
● 行きたいなと思うような、地域素材を活かした観光を考える「創造する力」も資質・能力の一つ。
● 観光教育では、設計によって様々な資質を育むことができる。そして、(それらの組み合わせである) 創造性の育成は観光教育の特徴。
● 現実にはないものを作っていくという創造力は、観光はフレキシブルで適しているか。
● 提案のできる企画系人材をいかに育てるかも、大きな意義となる。星空観光・夜空観光が今はブレイクしており、10年前では夜空が観光資源になるとは誰も思っていなかった。

11) つながり力、統合する力、プロデュースする力

● 色々なことを統合的にやったり、専門的にやったり、観光は学際的な学問なので、異分野のものをつないでいく力が観光で身につく印象。
● 比較したり、実際にあるもの同士を組み合わせ新しいものを生み出すプロデュース能力が付く。

12) 問題解決や自己理解のための気づく力

● 学問の入り口としても重要な「気づく力」を育むことに観光教育は貢献するか。レポートや現地調査で、生徒は無難にこなす状況もあるなか、対象に対して主体的にアプローチする体験が重要。子ども自身の「興味を持っている内容」、「出かけて楽しかったこと」などは、観光の枠組みで考えると立派な研究対象。興味の赴くままに調べて出てきたことは、素晴らしい社会調査に繋がる。
● 生徒に「何が楽しい?」、「何がしたい?」と聞いても「分からない」という回答が多い。自分が好きなこと、興味のあること、得意なこと、やってみたいことに気づかず、あるはずなのに蓋をしてしまっている印象。
● 自分のワーク・ライフ・バランスを考えてもらいたい。現状の日本の教育は W（ワーク・労働）を充実する教育が先行しており、その労働の義務の次に L（ライフ）が意識されるべきことを観光教育を通じて学んでもらいたい。
● 高校教育を通して将来設計能力も身につけてくるのではないかな。

13) 表現力

● 観光を取り上げることで、様々なツール（はがき、マップ、双六、CM 作成など）を使って表現を豊かにすることができる。

14) 主体性・実行力

● 高等学校は実行力が重要であり、学習指導要領の主体性と表裏一体。
● 「実行力」は観光教育において育てたい能力。「能力がない」、「私にはさすがにできない」など謙遜する生徒がとても多いが、まずは「実際にやってみる」、「続けてみる」といった能力の方が先行的に重要。
● 失敗を恐れる高校生が非常に多い。「正解を答えられないといけない」、「間違えていたらどうしよう」などというところから、結局何も行動しない生徒が非常に多い印象。
● 周りの人が認めてくれるものだけしようという風潮になっており、「自分の生活も豊かにする楽しいことである」ということを観光教育の中で求めないといけないと思われる。
● 無難に成績を稼いだがる生徒が多い。普通科におけるよくない部分かもしれない
● 専門学科においても簿記や情報処理を学ぶ生徒に比べ、観光を学ぶ生徒たちは自分から何かを探してつかみ取ろうとしていることが多い。
● 問題を解決できなくても、次の行動として何を起こすか、何をすれば良いか考える力が育める。

15) マルチタスクの力

● 地方ほど 1 つの仕事だけでなく、パソコンを触ったり、POP を書いたり、ディスプレイをしたり、発注をしたり、複数の能力が求められる。おもてなしの接客だけでなく、色んなタスクを身に着け、プロデュースする力みたいところが非常に求められるのではないかな。

16) 協働力

- できないことをだれかにやってくださいなど、一緒に協働する力、お願いできる力も1つの資質・能力ではないか。

17) コミュニケーション力

- 旅行の技術（どこの国に行っても旅行ができる能力）を育むことは重要な視点。
- オンラインも活用し、コミュニケーション力や人と交流を促進する方法や理念を学んでもらいたい。
- 観光を学ぶ子は、物おじせずに話せる子が多く、何を尋ねても必ず答えが返ってくる。観光を学んでいるから人間力が高いのか、いろんな人と知り合う機会があるので、どこへ行っても物怖じすることがない。
- コミュニケーション能力は、日に日に成長する。また、プレゼン能力、おもてなしの心も育める。例えば、水たまりがあると「水たまりがあるので、こちらにどうぞ」とか、とても暑い日は「暑いのでこちらの日陰で説明します」という、ちょっとした気遣いができるようになり、商業高校の生徒が就職した際にすぐに求められる能力が自然に観光ガイドで身に着けられる。

18) データや情報の収集・分析・活用

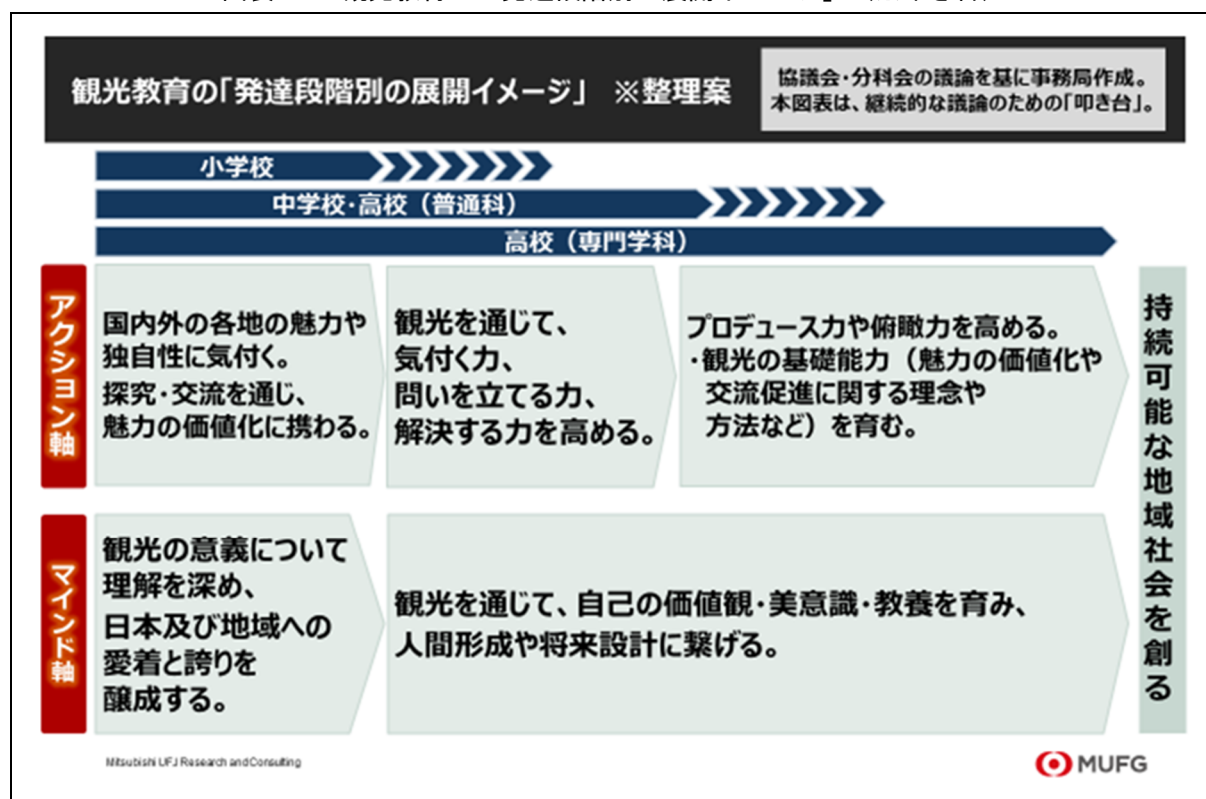
- 小中学校で情報の仕入れ方、見方について経験すると、高校におけるデータ分析に繋がる。現在のデータ分析は数学でメインに取り扱われており、地理に応用されている。高校の新しい学習指導要領に出ている地域分析でも、データ分析が要求されている。データ分析の前に行く側と受け入れ側で齟齬がないようファクトチェックを取り入れると、データ真偽の判断材料となり、データ分析の意味も大きくなる。データの視点は社会科だけでなく様々な教科に繋がるのではないか。

(3) 継続的な検討事項

本年度の議論では、観光教育で育める資質・能力を網羅的に抽出・整理することは行っていない。そのため、観光庁の過年度調査事業の成果等も踏まえつつ、観光教育で育める個別具体的な資質・能力に関する知見が、蓄積・共有されていくことが望まれる。また、「コンピテンシー」に基づいて、計画的に子どもの成長を促すことや、学習評価を行うことも重要であると指摘がなされている。

本年度は、発達段階別の観光教育の展開イメージを検討し、以下のような整理を試みている。本年度、新たに注目された視点（例：自己の価値観・美意識・教養を育む視点、小学校段階からでも魅力の価値化に何らかの形で携わることができる視点、等）に関するプログラムを充実させることや、先端的な取組（例：従来よりも低い年次での実践、新たなツールを用いることで実現できるプログラム、等）を創出することにも取組みながら、観光教育が子どもの成長へとどのように貢献したのか、検証をする視点が引き続き求められる。

図表 42 観光教育の「発達段階別の展開イメージ」（※叩き台）

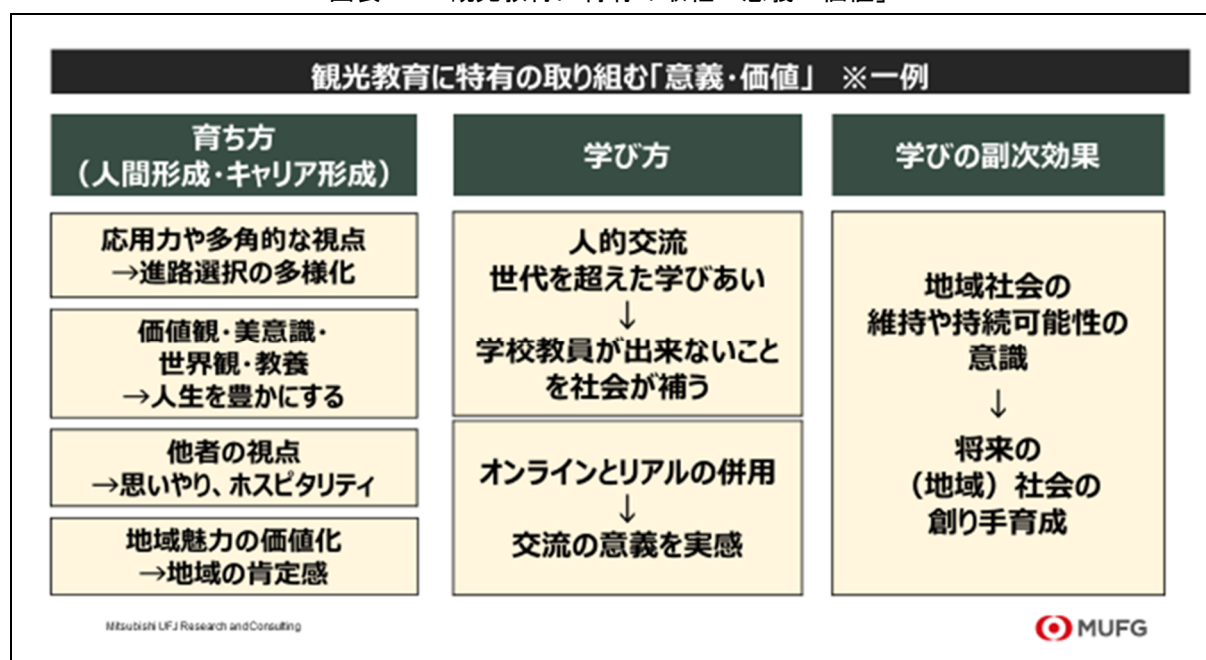


4. 初等中等教育における観光教育で学ぶことの「意義・価値」について

(1) 総論 ～関係者（子ども・大人・社会）の全員にメリットがある観光教育～

観光教育は、観光教育を受ける子どもたちの成長に資するのはもちろんのこと、活動プログラムを通じて、地域社会の維持にとって良い影響を与えることも示唆された。

図表 43 観光教育に特有の取組「意義・価値」



(2) 観光教育で学ぶことの「意義・価値」

1) 育ち方 ～様々な力を育むことができる～

観光教育ではプログラムのアレンジ次第では、様々な力を育むことができる。それらの育める力の中で、他の学習・教育と比較した際に、観光教育に特有と思われるものとして、「応用力や多角的な視点を持つためのプログラムを設計できる」、「価値観・美意識・世界観・教養が養われることで人生を豊かにできる」、「他者の視点が求められるために思いやりやホスピタリティの力を育める」、「地域の魅力に目を向けた活動をすることで地域に対する肯定感を育むことができる」などの意義・価値があるとして議論された。

① 参考：キャリア選択に関する意見

● 観光教育を実際にやってみると、生徒の進路に大きく影響が出てきていると思う。商業高校＝事務職の傾向だが、観光を学ぶ生徒は事務職以外の可能性も秘める（留学する子、日本語の勉強をしない子）。
● 観光に携わる人の地域への思いは、高校生にとって楽しいなどの感想に繋がる。
● 社会調査を通じて、人とのふれあいで得た感動などが、大学や社会人になった際の調査の動機になるかもしれない。
● 大学進学だけでなく、職業とは何か、働くこととは何かについて興味を持つ子どもが多い。
● 外国人と交流すると、仲間になれることを理解し、海外と何か関わるような仕事への抵抗はかなり減る。
● 生徒や教員は、就職では旅行会社かホテルしかないという、狭い範囲の思考に陥っている現状が課題。企業や行政との連携で社会と関わる学びを行うと、旅行サービスといった観光領域だけでなく、商品開発、地域消費やマネタイズ、関係者間の連携などを知ることで、様々なことを学びたいと思う生徒が増え、それに関わる仕事や進路に関心を高める生徒が増えることとなる。

2) 学び方 ～様々なシーンで実施できる～

① 全国どこでも

観光産業は日本のほとんどの地域に存在しており、全国どこでも実施できることが、観光教育の特徴であると議論された。さらに、オンライン学習を取り入れることで、地域の観光事情に必ずしもとらわれずに学習を行うことができることも言及されている。

② 誰にでも

初等中等教育の段階にある子どもたちは、専門性やキャリアの方向性が分化・確立する前の段階にある。子どもたちがどのような進路を選択しようとも、観光教育は将来に生きる学習テーマであることが議論された。例えば、観光産業は裾野がとても広く、様々な産業・業種において観光教育を通じて身につけたことが活きると指摘された。また、観光の提供者側に求められる「魅力を価値に昇華させること」や「他者（顧客、地域、等）を思いやり行動すること」等は、あらゆる業種に求められる行為とも捉えられ、その有用性が議論された。

さらに、観光を享受する側面にも着目し、私生活や普段の暮らしに観光や旅がとりこまれることで、豊かな暮らし（例：精神的にも充足した暮らし）を設計する力を育むことにも繋がるため、全ての子どもが観光教育を受けることに意味があることが確認された。

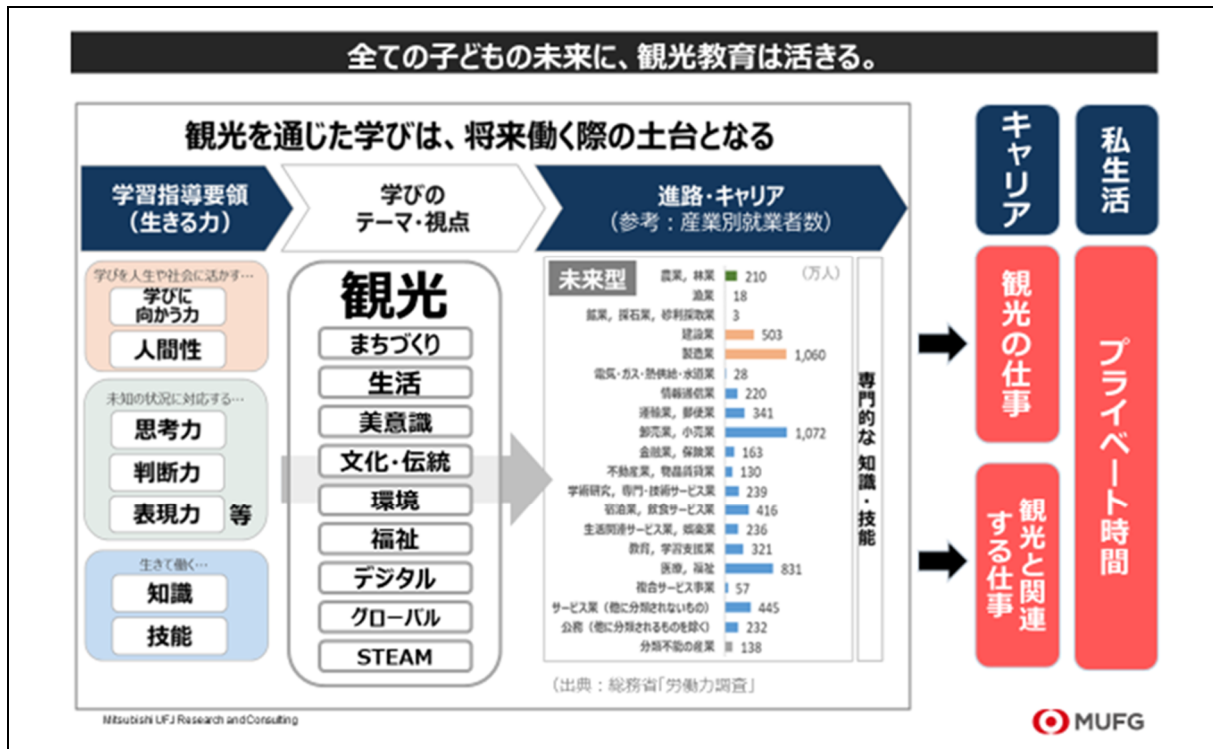
③ 誰とでも

観光は、幅広い学年・年代の人々が一緒に取組める学習テーマであることが、観光教育の良さであると議論された。

④ 参考：幅広い世代が一緒に取組める観光教育

● 観光は、地域だけでなく人や交流に焦点を当てられることが大きな意義。3世代間の交流や、地元との交流などの要素がある。
● 観光とは、全ての人が旅行をし、地域に出ていくことのできる活動であるため、どの学年でもそれぞれの体験を語って、議論をしやすい。小中学校、高校普通科、高校専門学科が同時に縦を意識しながら一緒に活動できるのは、観光以外ではできないのではないかな。
● 同世代の中学生・小学生同士での地域を超えた学びあいを通して、各地域に共通していて一般化できることと個別化していることの二つのテーマ学習ができるのは、観光だけなのではないかな。一般化することと個別化することは、意外と難しく、重要な視点。
● 小学生同士の発表では形にはまったものしか中々表現できないが、例えばプレゼンした相手が大学生や高校生であれば、質問する内容も具体化される。
● 我々大人も、小学生に説明したりすることで、大人が分かりやすさを学ぶこともできる。例えば外国人が来た時に、日本の文化や言葉を知らないため、初心者に教えなければならないという中で、異者・他者にどのような言葉で伝えるかといったコミュニケーションの観点が観光にはたくさんある。

図表 44 全ての子どもの未来に生きる観光教育



3) 学びの副次効果 ～各種の社会動向・社会課題に応える活動となる～

初等中等教育における観光教育は、その活動を通じて、次世代の観光人材育成にとどまらない社会的な効用を期待することができる。

① 参考：地域社会の維持・振興

● 地域の方々や企業と連携において、高校生が地域に出ていくことは非常に価値があり、そこは観光という方法が有効。
● 観光教育はこれからの日本の地域社会を救うための一つの教育であり、教育界が無関心ではいけない。
● 人口減少社会を怖がる教師がいなくて、その問題意識がまだ地方の教師には足りない。観光教育というのは、将来の日本の行く末に不可欠な学びとして訴えていく必要がある。
● 観光は非常に裾野が広い産業であるため、観光産業を理解するというのはなかなかつかみどころがないという難点もあるが、逆に言うとそれだけ他産業に影響を及ぼす非常に公共性の高い産業ともいえる。
● 観光業界に就職をしたい学生は多いが、観光業界のことをよくわかっていない。観光業界の裾野は広いものの、「観光業界＝旅行代理店」と思っている人が多い印象もある。
● 観光振興も、地方創生も、人口減少社会対策も地域の問題だが、学校の先生は、地域立脚の学校だと表面ではいうものの、全体としては大きなうねりにはなっていないという、このあたりの意識の差がある。
● 観光自体を学ぶことで生徒の地元に対する意識が大きく変わってくる。
● 生徒の活動とは別に個人的に色んな企業を訪問して話を伺い、地域で開催されているイベントやコミュニティに参加して、企業間や国家間の利権などを肌身で感じることができる。
● 地域協働では「生徒が知識をつくりだし、地域に還元する」と捉えられる。「知識創造」や「知識定着」とセットで語られても良い。
● 子どもは地域の中で能力を発揮した経験がないまま県外に出て行く。進学のために夏休みも補習で教室にいるなど、将来の夢が育たない一因。地域の中で社会との関わりを作っていくことで、自分の能力を発揮できる経験がUターンにも繋がる。
● 地域との関わりで思わぬ化学反応がある。活動が文化継承などにも繋がる。
● 伝統を守る、見せるものがある、これだけで一つの観光教育であり、自分たちの地域の観光素材を自分たちの手で守っているのは非常に大きな取組。各地域にもこのようなことがあると思うので、まず小学校段階では地域に目を向けて学ぶ段階。
● 自分が住んでいる地方と日本の魅力、さらに世界の中でどう位置付けるかという、入れ子構造の中で私たちは生きている。そういった広い視野から、自分の文化や地域の魅力を、「価値」というレベルまで研ぎ澄ませて考えることができるかどうかが重要。また、観光産業や地域の観光関連に携わっている方々、あるいは一般の人たちが、いかに自分の地域の観光水準をあげようと努力していくかということを学びつつ、自分も参画していこうと、そんな次世代が育成できたら日本の未来も少しは明るくなるのではないかな。
● 地域が観光によって光が当たったことによって、そこからブランディングされていき、地域がより魅力的になっていく、僕たちの魅力はここなのだと他の地域の人たちが認めてくれたことによって、より自分の地域の魅力を高めていくことができるのもこれからの未来を作っていく上で大切なこと。

(3) 継続的な検討事項

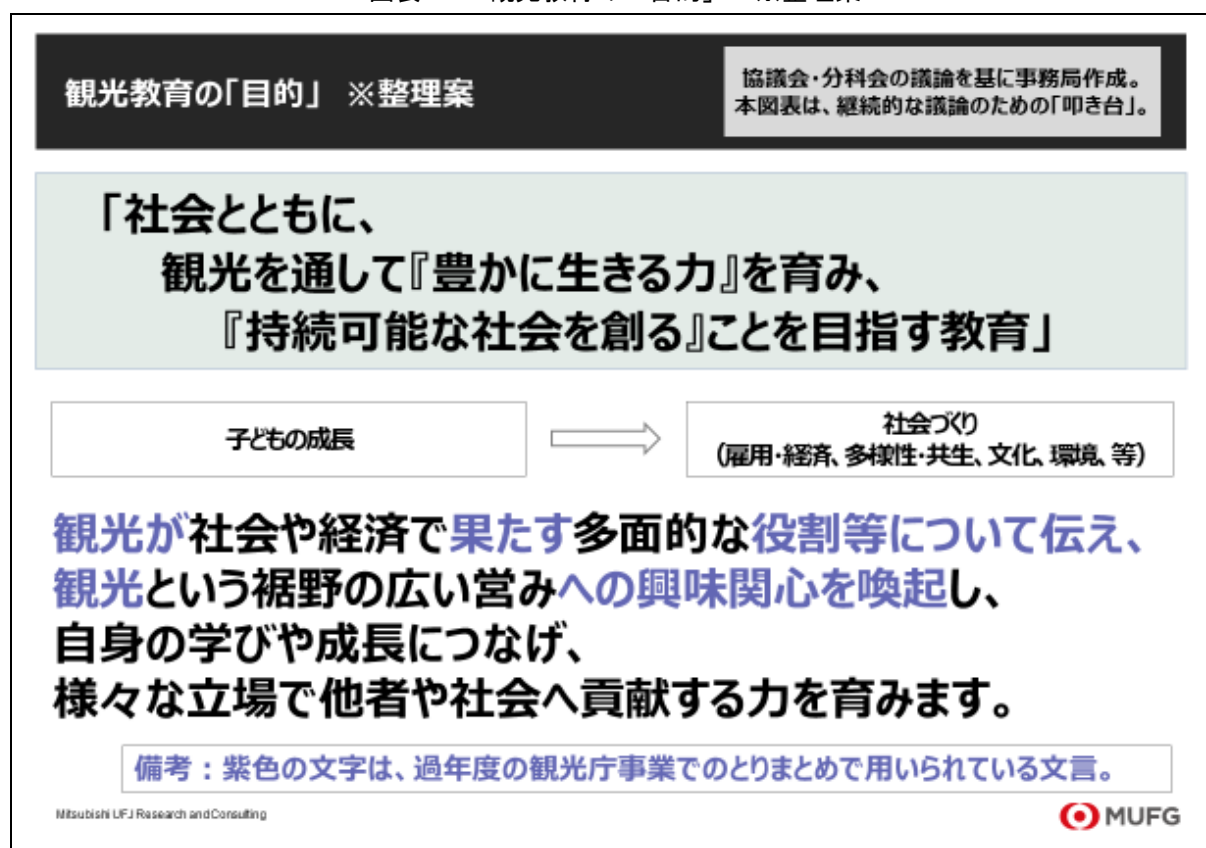
観光教育を通じて育める「資質・能力」や、観光教育の「意義・価値」の議論を踏まえて、観光教育の「目的」や「意義・価値」について、引き続き議論を継続していくことが望ましい。

1) 観光教育の「目的」に関して

教育現場に観光教育が導入されるためには、「人間形成の視点」を明確にしないといけないことが重要であるとの議論が展開された。学習指導要領に記載の「生きる力」というフレーズを意識したうえで、観光教育に特有の学習効果に鑑み、『豊かに』生きる力という表現が、教育界に理解されやすいものとして提案がなされた。

また、子どもの成長を通じた先のゴールとして、観光人材の育成にとどまらず、社会づくりに繋がる表現をすることが、教育現場をはじめ、様々なステークホルダーの理解や協力を得ることに繋がると提案がなされた。とりわけ、「持続可能な社会を創る」という表現は、SDGs を重視する社会・経済動向や学習指導要領の記載内容、世界観光倫理憲章の内容とも一致する点で、初等中等教育における観光教育のゴールとして設定することが望ましいと提案がなされた。

図表 45 観光教育の「目的」 ※整理案

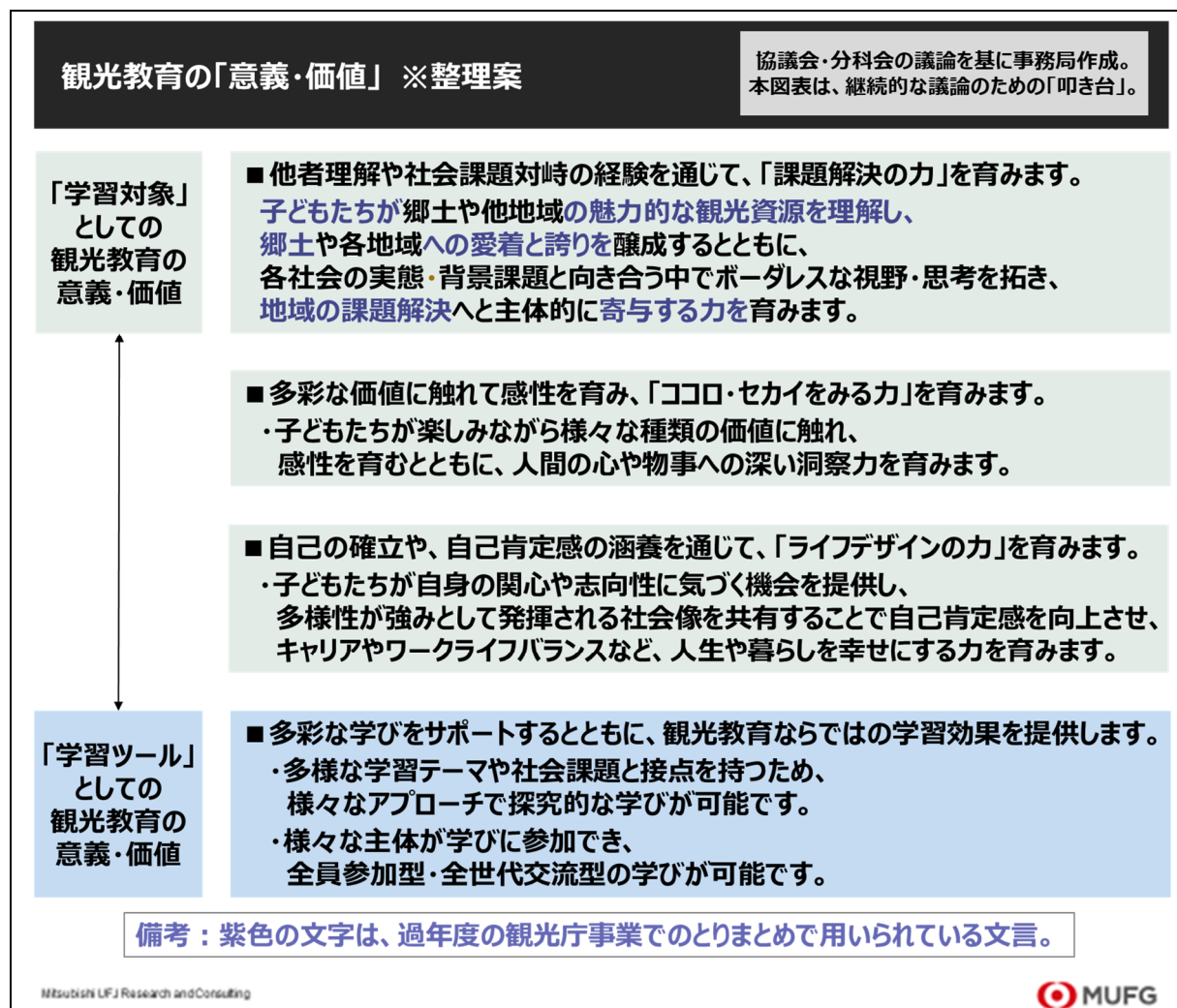


2) 観光教育の「意義・価値」に関して

観光教育の導入メリットとして、学習の対象・テーマとして導入することの良さだけでなく、学習のツールとして導入することの良さも謳うべきであることの提案がなされた。

とりわけ、「学習対象としての観光教育の意義・価値」に関しては、観光教育における多種多様な育める力を包摂するように、また、他の学際的な教育テーマや社会教育ではあまり見られない事項を意識しながら、観光教育に特有の育める力を集約・表現することが求められる。とりわけ、学校教育の管理者層や、教育行政の関心・理解を得るためには、この点を丁寧に検討していくことが重要な取組になることが予想される。

図表 46 観光教育の「意義・価値」 ※整理案



① 育む力：課題解決の力に関して

課題解決の力は、あらゆる学習シーンだけでなく、人生のあらゆる場面（仕事、私生活）で求められる力としても重要な力である。その意味でも、地域の魅力を理解して観光振興に寄与する（観光振興のために各種課題の解決を行う）とともに、郷土への愛着や誇りを醸成することは、引き続き、観光教育の中心的な活動になると考えられる。

他者理解という表現は、小学校・中学校・高校普通科で求められる人間としてのベースの力を意味するだけでなく、観光教育における課題解決活動の1つのゴールでもある「魅力の価値化（例：観光客に選ばれる・喜ばれる）」へ到達するためにも重要な行為である。そのため、他社理解という行為は、職業系の専門高校におけるマーケティング（顧客を起点にした各種活動）や、中学生・高校生年代の起業家教育（事業を通じて個人や社会の課題解決を試みる精神を育む教育）に通じる概念として位置づけることができる。

観光教育の目的（案）にも提示するように、持続可能な社会の創り手となるためには、主権者教育もまた重要視されていることも背景に、「主体的」に課題解決に取り組むことの重要性も指摘されている。

本年度の議論を通じて、「地域の魅力」における「地域」の解釈として、自らの生まれ育った郷土に限定されないことも重要であると議論がなされた。郷土の魅力は自分たちでは見出すことができないこともあり、他地域と交流しながら（外部の目を取り入れながら、又は、自身が外部の目となる中で）、学習プログラムを展開していくことの重要性が指摘された。

そして、課題解決の過程において、観光教育では、多面的な視野・思考が求められることが特徴的であると議論がなされた。例えば、昨今の観光シーンはグローバル化・グローバル化が進んでおり、観光教育では「国境を越えた視野や思考」が求められやすい学習テーマと捉えることができる。さらに、観光を提供・享受する際には、「知識領域・学問領域・職業領域を横断する視野・思考」が求められるため、発展的・総合的な学習になじみやすい学習テーマであるとも言及されている。

② 育む力：ココロ・セカイをみる力に関して

観光教育では、魅力を持つ様々な観光資源（ヒト、モノ、コト、等）に触れることとなる。様々な事象に魅力を見出す活動としては、そこに内在する、大事にされてきた歴史、他にはない固有の特徴、多様な美しさ等と向き合うこととなる。人間の心や人間社会、自然の移ろい等と向き合う中で、子どもたちの感性を育むことに繋がるのが、観光教育の重要な側面であると議論がなされた。

観光資源は子どもたちの身の回りにあり、また、観光である故に堅苦しくなく、興味や関心を引き出すようなテーマ・トピックとなりやすい。これらを踏まえると、高等教育において展開されるリベラルアーツを、初等中等段階で楽しみながら実施できる特徴が観光教育にはあると言える可能性がある。

リベラルアーツに取り組むことの意義として一般に論じられているように、観光教育で感性を育むことの教育効果として「課題を発見する力」を育むことに注目していく必要性が提案された。前述の「課題解決の力」を育むにあたり、課題解決活動の最初に求められる行為でもあり、重要な力であると捉えられる。

③ 育む力：ライフデザインの力に関して

観光教育は、子どもが社会と何らかの形で交わり、自分なりの着眼点で、領域横断的に知識を活用しながら活動が展開されていくことが多い。教育現場の感覚として、自身の関心や志向性が分からない子どもが少なくないという意見が挙げられる中、自身の関心や志向性に気づく機会を子どもに提供できる側面に注目すべきであると議論がなされた。

さらに、観光教育の重要な教育効果として、以下の提言がなされた。

①観光の多様化（担い手の多様化、観光者の属性・嗜好の多様化、観光事業運営のあり方の多様化、等）が進展し、観光教育を通じて共生社会（≡「個」が相互に尊重される中で多様性が強みとして発揮される社会）の概念に触れるケースが増える展望があること

②主体的な活動が展開されていくことを踏まえると、「自己肯定感の向上に貢献」すること

その結果、観光教育を通じて自身の興味・関心の幅が広がる中で、自分なりの考えをもって進路やキャリアを検討・選択していくことができるとの報告がなされた。

キャリア上の有用性が確認される一方、ワーク・ライフ・バランスが強く求められる社会背景や、観光先進国を支える需要者創出の視点も考慮すると、観光の提供側として就業時に生きる学習プログラムだけでなく、観光の享受側として私生活や暮らしで生きる学習プログラムも重要視されるべきであることが、本年度の重要な論点の1つとなった。観光や旅をプライベート面での暮らし・人生へといかに取り入れるか、即ち、移動・体感・交流等を通じて真に豊かな人生

（例：精神面の充足も実現される人生）をいかに実現していくかという視点は、他の教育にはあまりない観光教育の特徴であると言及がなされた。

子どもの自己の確立を通じ、公私両面から豊かな人生を設計（ライフデザイン）することに観光教育は貢献し、この側面にも光があてられるべきであると提案がなされた。

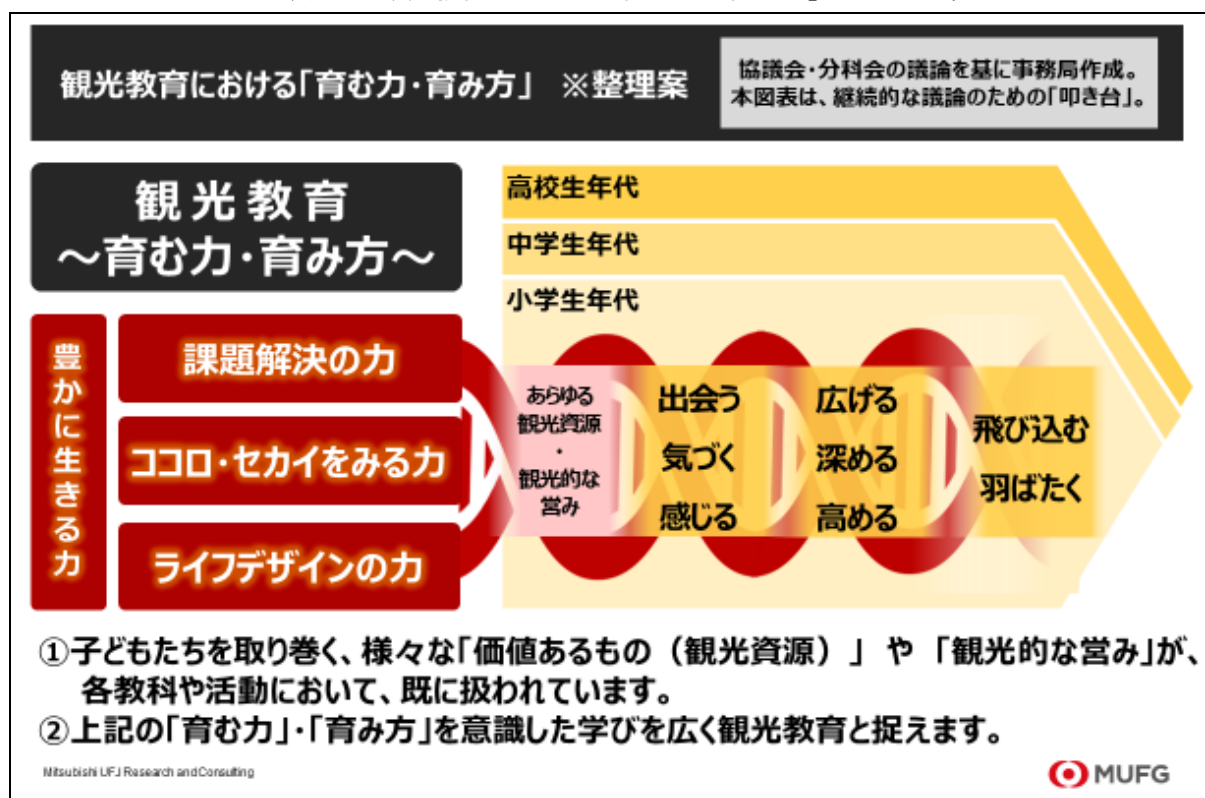
④ 育み方

本年度の論点のひとつとして、子どもの発達段階に応じた観光教育の取組のイメージを検討した。発達段階別に、個別具体的な資質・能力を設定する表現方法も検討したが、観光教育では学習プログラムのアレンジによって多種多様な力を育むことができることから、本年度時点での統一的な整理は観光教育の普及上の枷（狭い印象や、アレンジした上での導入は観光教育から外れるという誤解を与えてしまう恐れ）となる可能性に鑑み、下記図表の表現として整理を試みた。

観光教育における育み方（学習設計の思想）に関しては、本章の冒頭（IV. 業務統括 1. 本年度議論の意義）でも示すように、過年度事業のとりまとめに基づき基礎・発展・実践という3段階の流れや取組領域があると整理できる。下記図表では、観光教育を知らない一般教員や教育行政の担当者による観光教育の直感的な理解の実現を期待して、活動イメージを端的に表すキーワードで、各段階を表現している（「基礎的な効果：出会う・気づく・感じる」、「発展的な効果：広げる・深める・高める」、「実践的な効果：飛び込む・羽ばたく」）。

それらの活動サイクルは発達段階や学習状況に合わせ、小学校・中学校・高校とどの段階でも繰り返されるものと捉えることができる。例えば、小学校段階でもカリキュラムの設計次第では実践段階の活動を行うことができる（例：地域の魅力を調査し、発信することで、観光振興・地域振興の一翼を担う）。高校段階においても、学習のテーマや切り口を工夫することで基礎段階や発展段階の活動を充実することができる。

図表 47 観光教育における「育む力・育み方」 ※整理案



⑤ 参考：発達段階別の整理に関する議論

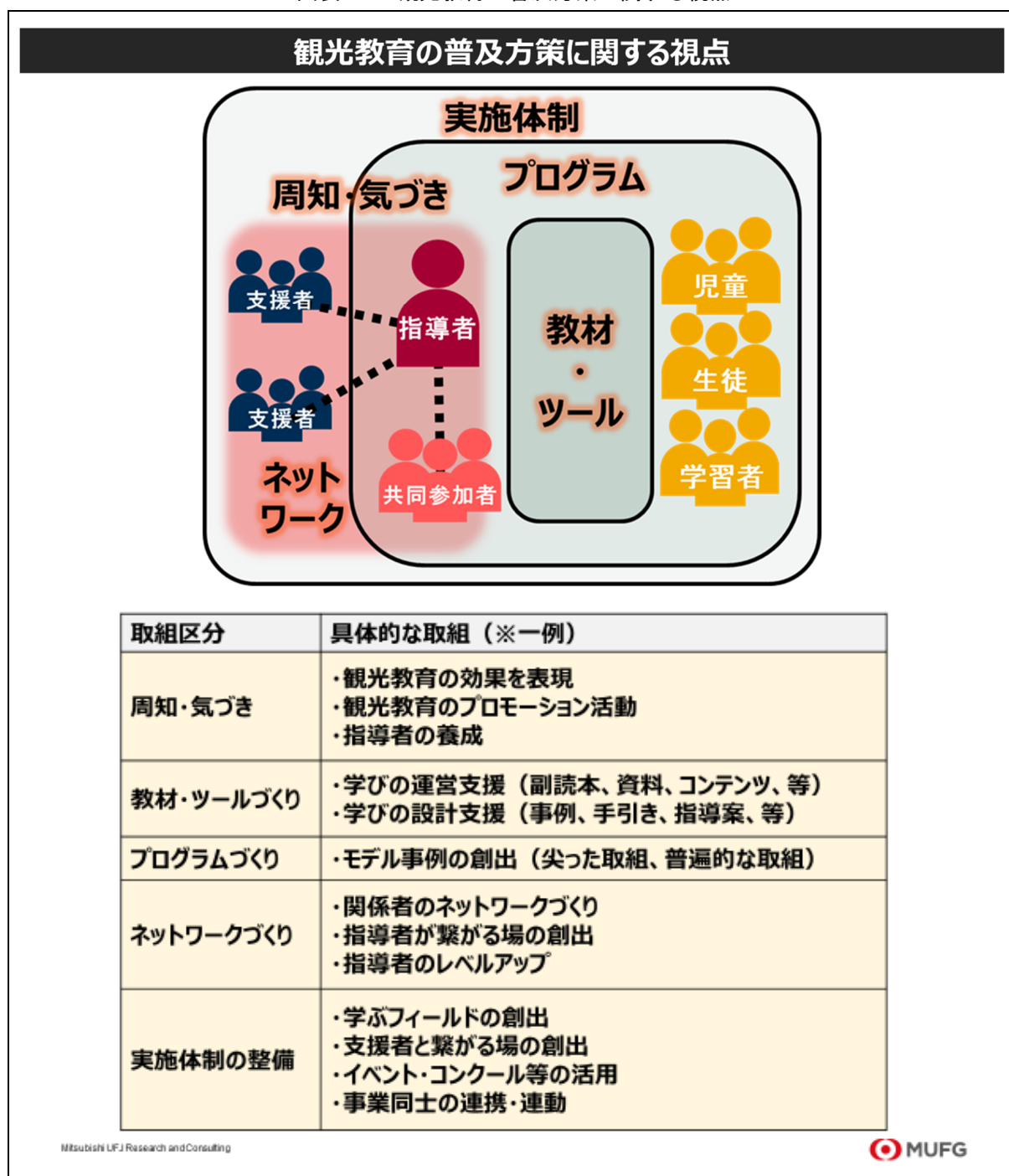
- 未来会議などから出された学齢に合わせた観光教育の発段階やイメージが、最終的にこの協議会の示す1つの大きな役割であり、異議がないところと思われる。
- 小学校としてはルールにとらわれず楽しむということで、冒険や何もない近場の山に登るというイメージがある。中学校では、ある程度のルールを守って規則的に行ってみたり、ある程度決められたグループで動くようになる。高校では、地域の見方を変えて自分の育った地域の課題は何だろうという形で、自分で企画するような大人たちと協働するような絵が考えられる。専門教育では、昔からのワクワクを通して色んな人を楽しんでもらうとか、地域課題を解決して満足してもらうとか、そういう形が考えられる。
- 発達段階ごとの姿で行くと、小学生時代から地域の一員であるということを意識させることが目的で、自分は地域の一員で、こんな地域で、こんな観光の地域の中で生きているのだということをまずは認識する世代か。中学生になると、地域とつながっていく。何ができるかはわからないけれど、とりあえずいるところと繋がったり、外の世界とつながったりして、目が広がっていくようなイメージか。高校のいわゆる普通科と専門学科の違いが何かというと、多分、普通科は課題を自由に発見できる感じか。専門学科は、課題を発見した上で解決に向かって実践するというのが専門学科であるイメージの絵があると良い。
- 小学校の頃は、地域の魅力とか周りに関心を持ち、自分もそのメンバーなのだと、アイデンティティに気づくとき。中学校になると、その中の輪に入っていく感じ。高校生になると動き出すイメージか。高校普通科の子は、ドアを開けて外の世界に目を向けて、もっと上の学び、大学やビジネスや研究や専門学校などその先に道が広がっていく。専門教育の

場合は、輪を作って道を広げて、新しい道を少しずつ作っていくようなイメージ。
● 課題解決の力は、学校ごとに発達段階で分かれていて良いと思うが、分かれていくものなので、横並びではない方が良いかもしれない。
● ライフデザインの力については、小学校から高校まで一貫・横並びで良いか。小学校段階から、ライフデザインを意識していく上で、観光は非常に役に立つのだという形で示すことは良いと思う
● どういう切り口でどこまでの範囲（地域）を見るか、そのような分け方をしても良いのではないか。小学校段階では、世界全体をというところはちょっと違うのかなと思われ、中高生になった時には、自分の地域だけで良いかというところも違うと思う。
● マトリックスでこの箱の中に埋めていくというこの表現方法に拘らずに、矢印の太さが年齢発達に伴って段々と太くなっていくとか、あるいはスパイラルモデルとかもあり、この1種類だけで入れ込むというのは無理があるのではないか。
● 小中高の積み上げスパイラルでも良く、積み上げが専門学科にも繋がることで専門教育が活きてくるのではないか。
● 区切るよりは、段階的に広がっていくのかもしれない。当然、小学生と高校生などではグローバルな視点に差異が出てくると思うので、もう少し上手い整理の仕方があるのではないか。
● 小学校などの研究構造図などで使われるように、小中高、専門教育が竜巻型のフレームの中で、スパイラルに学んでいながら総合的学習のコンセプト、デザインも情報収集、課題設定、分析などで回っていくので、そのようなイメージでグランドデザインを整理してみるのはいかがでしょうか。

5. 初等中等教育における観光教育の「普及方策」について

観光教育の普及方策を検討するにあたり、「周知・気づき」、「教材・ツールづくり」、「プログラムづくり」、「ネットワークづくり」、「実施体制の整備」の取組を意識し、議論を整理した。

図表 48 観光教育の普及方策に関する視点



(1) 取組領域 A：周知・気づきに関して

1) 提案された取組事項

① 周知に関する総論

● 観光教育は学校によって臨み方に違いがあって良い。
● 観光教育と言っても戸惑う先生が多く、何をしたら良いのかという声を聞く。
● 広く普及するにあたっては、学校へ難しいことを言いすぎているのではないかと考えている。こちらがもっと目線を下げていって、やさしく語り、楽しくやることがすごく大事なことはないか。
● 授業を通した子どもの変容などを見て、ここ数年で学校にも受け入れられるようになった。
● 観光教育を実施している学校でも、観光を理解している先生が半数に満たない状況は往々にしてある。子どもの資格取得の科目を推進したい先生も当然存在する。学校全体の観光教育における理解醸成が重要。
● 個別の教員が興味を持っても、管理職が理解できていないと違う力学で動いてしまう。
● 高校における学校数としては、高校普通科が最も多いが、取組事例が報告される機会が少ないのが悩み。普通科に対して観光を伝えていく方法は今後の課題。
● 先生が様々な情報を持っていないと、授業のネタを作れないため、観光庁の先導で教員の引き出しを増やせるような場があるとありがたい。
● 観光教育に熱心な先生方は、観光教育を非常に教育的なものと思って活動に取組もうとしている。特に普通科などを対象にする場合、観光教育は、観光という産業や仕事の解説ではなく、観光教育は教育プログラムであり、教育の議論をすることになると、目的・意義が、誤解されずに伝わっていくことが求められる。観光教育といったらホテルでの働き方の解説なんでしょと感じる人たちとのギャップを、関係者が感じているのではないか。
● 普通科では「観光を『通じて』学ぶか」をいかに伝えられるかが大事。
● 普通科の場合は、もしかすると職業教育の側面をあまり持ち出さない方が良いかもしれない。知識のインプット、学習成果としてのレポート作成、プレゼンなどが行われるなか、子どもたちが本当に自分のやりたいことを発見しているのかが疑問。型にはまっていくような状況に対して、観光教育は、自分の好きなものを見つけたり、気づいたり、こういう旅をしたいなど「消費をする中で自己表現されている部分」があって、人との違いを表現することができる。そのあたりを先生方や一般の方にどう理解していただけるかが難しい。
● 観光教育を正しく捉えていただけると、各教科の先生をはじめ、観光の色々な要素と関連して、各科目の先生方が心の中で思っている大事なことを響かせられる気がする。

② 観光に関する誤った印象・前提知識の払拭

● 観光教育は非常に応用が利く。この認識を、学校教育や先生方に知ってもらうことが、観光教育の理解を深めることに繋がる。
● イギリスやフランスの教科書には外国に旅をするという内容が教科書にあるのに対し、日本は掲載がない。旅行は遊びだから教育ではないと捉えられる印象を払拭する必要がある。
● 普通科では、もしかすると職業教育の側面をあまり持ち出さない方が良いかもしれない。

● 観光というと代理店のイメージが強い。観光分野は広すぎて知識が少ないため、企業や大学教員など様々な人の協力のもと、どのような仕事があるのかを話してもらうことが重要。自校では、県や市の観光部局の方や旅行会社の方に協力いただいているおかげで、観光教育に取り組んでいる。
● 6次産業化を含めて、観光は様々な背景にある産業に関わっているため、観光が衰える地域は衰退していくということを学校の先生に知っていただく必要もあるか。

③ 観光教育の全体像の見える化

● 小中学校の教職員は、子どもがどんな枝分かれをしても良いような素材や引き出しを子どもたちに植え付けておく必要性があり、上位の学校がどのようなことを目指すべきなのか、どのようになるのかを知るタイミング・チャンスがあれば良い。
● キーワードとしてコンピテンシーという言葉が出たように、何を育てたいのかということと同時に考えていかなければいけない。この学びを体験し、こういう能力を身に付けたい、この段階でこのようなところまで育つと見える状況が作れると良い。ネット以外にも知識を得るために最低限必要なものがある。それがどこまでなのかということも含めて、その部分が小学校段階の基礎・基本にもつながってくると思われるので、そのあたりのアバウトな指標ができれば良い。
● 大学での就職実績という出口から攻めて、幅広い分野における観光教育の有用性を示していく必要がある。

④ 既存の学びの見つめ直しというメッセージ

● 既に行う教育を見つめ直すと観光に繋がっていることがある。
● 現在、既に先生方が取り組んでいる内容と類似したものが多くある。それらの見直しという形が受け入れやすいか。
● 学びの選択肢を増やすという視点が重要。学校内だけの学びだけではなく、学校外でも学べるようにしたい。生活と学校との学びが分断されているのが普通科高校としての課題。生活圏の中でも学んでいけるような選択肢が、観光教育でも用意されると良い。
● 小学1年生から観光教育と類似した学びはやっているため、そこをどう肉付けしていくかを考える必要がある。学校というのは新しい内容に拒否感があるので、それをどう解決していくかが重要。今ある内容のエッセンスを少し変えていく形にすると良い。例えば、1, 2, 3年生は遠足があり、遠足は観光教育の1つの手段となる。自分の住んでいる場所から他方に足を向けていくのは、観光教育に繋がるものと思われる。そのあたりをどのようにプラスして、中学年や高学年で広められるかを探っていく必要がある。
● 今後はSDGsが重要なテーマだと思われる。やらなければいけないのに、どうやったら良かわからないため、観光が一つの事例となり得る。
● SDGsやICTの視点を含めると、新しい教育テーマとして取り組む動機のある層に観光教育を浸透させることとなる（船舶でも、自然エネルギー活用や自動運転・プログラミングという要素がある）。
● 観光というのは、1つの大きな括りにしやすい。キャリア教育の枠組みで小中高大の各年

代の子どもと一緒に、観光を通じて学びを行っており、ものすごく成長している肌感覚。

⑤ 学習設計の思想伝達

- 観光教育の中身のコンテンツや生徒の変容なども視点として大事である一方、自己肯定感を育むために教員が生徒とどのように関われば良いのか教員は戸惑うことになる（例：教員の意図する方向へと口出ししないなど）。学校の教員試験でどう動いていったら良いかなど、まだイメージがついていない部分がある。
- 観光教育も含めて、学校が社会とともにやっていくことが必要な時、お互いに尊重して組んでいくことが何よりも重要だということを地域の方たちに発信する必要がある。

⑥ 周知の場・経路・手法

- どう発信するか、色んなニュースソースにどれだけ載せて伝えていくかというところが、今後の課題。
- 大きな機運に乗せていく必要があり、そのためには、世間的に、観光教育が盛んに取組まれているという雰囲気を作ることができると良い。コンクールのようなイベント（子どもが評価されるイベント）から入っていくのは一つの手段。
- 教員が勉強する機会になかなか参加しないこともある。一般の企業では研修などが組織のプログラムとしてあるが、教員になると強制でない限りなかなか参加しないので難しい構造となっている。
- 教員の研修受講の一形態として、実際の現場にいく機会があっても良いか。九州の学校では、先生が1年間ホテルに研修に行って実際に働くという取組もあるようだ。
- 教員免許更新時に観光教育に関する指導があると良い。
- 自身の大学の授業では教員づくりに取組んでいるが、他大学での取組はほとんどない。しかし、近年、社会科や地理教育の分野では教員づくりが論議になり始めている。米国では、ワシントンで中央研修会を夏に実施し各州に持ち帰り州内で展開していく活動があり、こうした活動も必要。
- 生徒に活動をしてもらう際は、教員自身のファシリテーション能力が重要。観光教育は教員自身が教えられるものではないので、探究活動を上手く進めるために観光教育を使うようになると面白い。

2) 継続的な検討事項

前項に示す各種論点が、観光教育を普及させるためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと、着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には、一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

(2) 取組領域 B：教材・ツールづくりに関して

1) 提案された取組事項

① 学びの運営支援：副読本・資料・コンテンツ、等

● すべての先生がやってくれる状態を作りたいと考えるにあたり、学習指導要領には書かれていないものの皆がやってくれるようになるにはどうしたら良いか考えると、その 1 つの方策として、当該地域で広く使われる何かしらの副読本に、観光教育の内容を記載する方法などが挙げられる。
● 副読本があると良い。
● 市町村単位、都道府県単位、それぞれで副読本があることが望ましい。
● 観光教育における教材や資料が不足している意見が、学会にて挙げられた。
● 自地域の観光資源に関する教材が整備されていると指導を行いやすい。中心的な教科書・教材と、時々の方針やトピックを鑑みた教材を組み合わせる方法もある。
● 当校では、学校の図書室に観光に関する本がなく、あるとしても日本の図鑑として貸出禁止の扱いとなっている。市内の図書館でも、小学生向けの観光に関する本はほとんどなかった。教師向けも、子ども向けの観光教育に関する本がないため、もっと充実させる必要がある。
● 観光の最大の教材とは「観光に携わる人」と捉えることもでき、現場の声を伝えることが役に立つ。
● GIGA スクール構想を念頭に置いたコンテンツが今後不足することは明らか。
● 全国標準的な学習については、デジタル教科書をはじめ、子どもたちが理解しやすいコンテンツはある程度提供されている一方、地方では大人向けのものしかなく、子どもたちには意味が全く分からない。また、大人がコンテンツを検索しても、良い情報に辿りつけない現状。そのあたりをハンドリングして、小学生でも辿り着けて理解できるようなコンテンツが山のように必要。その制作にはお金もかかるため、アイデアとしては高校生の学習で小学生に分かるような教材を作るコンテストをすると面白いのではないかな。
● インターネット環境の整備とも相まって、まず取組まれなければいけないのは、地方の地域理解や観光資源理解に通じる動画コンテンツが圧倒的に不足している。
● 旅行技術の向上などを見据え、ゲーム感覚で旅行を学べるものがあると良いかな。
● 商業高校における「観光ビジネス」の教材は助かっている一方で、教科書だけでは難しい部分がある。地域・日本・世界について、各種の視点で内容を深められる必要がある。例えば JTB 総合研究所の観光学基礎というテキストのように、旅の歴史なども含めて全てが盛り込まれたテキストが必要で、さらに小中高でそれぞれあると望ましい。
● 観光産業は大きく変化するため、それに対応できるコンテンツを作らなければならない
● 狭く深く様々なテーマで観光教育をやる必要があるが、学校だけでは限界があるため、例えば、旅行業、宿泊産業などの業界がまとまって、高校のための観光教育みたいなものを作り、配信してくれるのが理想。
● 教材として、観光教育で手軽に扱える統計データがあると取組みやすい

② 学びの設計支援：事例、手引き、指導案、等

● 一本の授業として成り立つような、どんな人でもできるテキストがあったら良い。ある程度自由な部分があり、導入の部分で「こういうことを身につけていく」と指示のあるテキストの類に加え、外部（ほかの高校、県外の高校、大学、企業、など）と行き来するパイプ的なプログラムがあると良い。
● 教育とは違うところから教材づくりにアプローチすることも含めて検討されると良い。
● 動画コンテンツ等は、教員たちが作っていくものをいかにシェアしていけるかという仕組みづくりがあれば、動画コンテストや教員の教材のシェア等、もっと進んでいく時代になるのではないかな。
● 観光庁の観光教育の普及動画は非常によくできていると感じる一方で、典型的だと思ったのが、二人の先生がどういう授業をしようかと議論しているシーンがあり、あれが今までのスタイル。色々あっても、最後は先生方で考えてしまうという世界。そこから一步踏み出す時には、指導案も授業に合わせて思いっきり簡単なものにしようと思っており、その段階では観光業の人たちと教育関係者が一緒にやるような形で、実際に教育として教える場面は先生がやるという構造にすることがポイントとも考えている。
● 自分が授業をするとしたらと考えると、魅力を価値という観点で、授業の素材となるようなビデオ教材が様々なネタで 100 本ぐらいあって、社会や理科などの既存の授業で組込んでいきたい。観光の良さや学びの価値は、様々なものに反映されていることも良さだと思われ、観光の授業をするというよりは、「既存の授業で観光を扱えるようなツール（指導案、動画）」があると良い。
● 「指導案の簡略化」もポイントか。色んな取組をする中で、副読本を作ろうとすると厚いものができてしまうので、それをやめようとしている。普通の単元の中に、1〜2 時間やりたくなるようなマイクロ学習のようなものを開発しようという取組を始めており、コンテンツとして 90 秒程度のビデオクリップを作る場合には GIGA スクール構想とも関連する。今までは、立派な学習を作るということをやってきて、それが 1 つのステータスでもあったのですが、それだとやはりやらしてもらえないのでそうではないやり方もあるのではないかな。
● 文部科学省からも出ているニューノーマル時代の学習環境整備では、GIGA スクールも入っている。令和 6 年度からの教科書編集の会議が既に始まっており、大幅にデジタル教科書に移行していく流れになっている。教科書の内容がページ数の制限がなくなってくるのではないかな、つまり、学校や先生が取捨選択をして資料や画像を活用していくといった教科書活用になるのではないかな。
● タブレットが広まり動画も活用できるようになっているので、教科書を丁寧に教えるという日本の文化がかなり変わってくるのではないかな。
● ランドマーク的に、どこに行けばどのような情報を得られるかが分かると良い。
● 学外関係者から話を聞くことを念頭に、「誰に、どのようなことを話してほしい」ということがパッケージ化されていれば、様々な業界の方との外部連携をお願いしやすくなる。特に、中学校の段階から職場体験など観光業とは何かに迫れる場面が増え、学外の観光関係者から話を聞ける機会が生まれる。一方で、教員の想定する子どもたちに話してほしい内

容と乖離することも考えられる（例：行政と旅行会社に依頼した場合、行政は自組織の観光行政について、旅行会社は近隣住民をどこに連れていくかについて話していただける一方、ちぐはぐになる懸念もある）。
● 今は、ネット上にオンライン授業が山ほどある。非常に分かりやすく、非常に面白い。GIGAスクール構想によりどのようなコンテンツが生まれてくるか分からないが、ユーチューバー等を教育にはなじまないものとして排除するのではなくて、むしろ活躍してもらえば、観光では特に良いのではないか。
● 不思議なことに学校を介すと生徒たちは尻込みするところがあるため、自主的に学んでもらえるような仕掛けや仕組みが必要。そうすると、カスタマージャーニー（生徒がどのように観光教育を勉強していくのかの一連の流れ）を作ることも重要。カスタマージャーニーに合わせて、学校の観光教育を動かしていくということもできるかもしれない。学校は二の足を踏む場合は、外部の専門機関に担ってもらえば良い。

2) 継続的な検討事項

前項に示す各種論点が、観光教育を普及させるためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

(3) 取組領域 C : プログラムづくりに関して

1) 提案された取組事項

① 各教科の学習における観光教育の実現

● 教科横断的な学びが検討事項という意見が、学会にて挙げられた。
● 教員のノウハウやこれまでの取組みから、それぞれがどのようなことをしてきたか教員間でもコミュニケーションを取り、材料を並べてそこから考えてみることもできる。
● 普通科は専門学科に比べて商品開発などのハードルが高く、地域との接点を作りにくい。
● 高校普通科では、課外活動がメインになっているケースと、教科の中で素材として取上げているケースがある。授業として継続していく観光教育と、トピックス的にやっていく観光教育がある。
● 高校生のうちに地域との関わりを実感して、成長することが大切だという理念は理解してくれる一方で、各教科の先生は、自分の担当している科目の単元をいかにちゃんと終わらせるかがまずは重要であり、そこを踏み越えてくると拒否反応が出てくる。何が高校普通科の目的か考えると、やはり単元を終わらせて大学に送り出していくということが意識として強い。
● 2006 年頃から総合学習のカリキュラム開発の中で、先生方が観光に関連する教材について熱心に研究等されている印象を持つ。しかし、高校普通科の場合、進学や大学受験が中心となり総合学習にはあまり熱心ではない印象もある。
● 「総合的な学習」は有望であるが、学校全体の取組となりコントロールができない。
● 学校教育の中に入るとしたら総合授業だと思っていたが、観光だからこそ全ての教科に関わることができ、様々な産業とも繋がることのできる。観光を主で授業を作るのではなく、各教科の中で観光に関する授業を作ってもらい、そういった授業を集めた全国大会のようなものがあれば、みんなでシェアし合えて良い。
● 色んな教科において観光の学びで使えるものをピックアップし、それらをプログラム化する取組が必要と考える。
● 平易的なものでも良いので、学習指導要領通りにやっていれば観光教育に関連する内容として、ここまでやっている、この部分は始めから話をする必要はない、観光学習でこれとこれは置き換えられるなど、ここでこれを学ぶということが分かるようなものがあると、他の教科や総合学習でも受け入れられやすい。
● 各教科において、観光と繋がるものは何かを探して、それぞれの教科で広げ、全体的に横断的に観光教育ができると、各校の特色も出る。本来であれば、観光をキーワードに様々な教科が横断的にできる（例：地理や歴史はブラタモリのような発想で学習することで、家庭科であれば地域の物産や駅弁などから学ぶことで観光教育になる。専門学科でも、国内旅行業務取扱管理者の学習を通じて、国内の地理学習、運賃計算、約款や法律などを一体的に学ぶことができる）。
● 総合学習だと学校全体でコンセンサスを図る必要があるが、教科となると担当教員の意向で、外部の各種教育事業（例：政策アイデアコンテスト）に参加できるため、実施の動機づけに繋がりやすい。この面でも、観光庁がイニシアチブを持って取組んでいく必要があ

る。経産省と内閣府における地域経済分析システムを教育に普及させる取組が、先行事例として挙げられる。

② 修学旅行や遠足などの捉えなおし

- 修学旅行は観光教育を支える重要な実施体験の時間。修学旅行の在り方が変質しつつあり、SDGs と絡めて修学旅行に観光教育の視点を取り入れていくことができる。
- 旅行会社の提供する修学旅行は画一化されたものも多く、修学旅行の在り方が、今問われているのは事実。
- 修学旅行などで楽しかったという経験は心に残り、次に活きる気がする。学習に直接結びつきにくいので、教育で理解されづらいかもしれないが、行ってみたい、知ってみたいという意思是貴重で、いかにトータルな学びとしてとらえられるかが重要。
- 学校教育で既にあるものを上手く使う意味では、GIGA スクールなどトレンドをおさえるのは上手なやり方であるが、遠足や修学旅行などについても、どう意味あるものに変化させるかということでは「古くて新しい」を意識する必要がある。学校現場では遠足や修学旅行は、過去から続いている単なる行事のイメージしかないところが多く、そこに意味を持たせる必要性がある。ただ近くに出向いて、こんなところがあるね、楽しかったねというのも観光教育の一つのポイントになるが、それだけで子どもたちは何か感じ取ったのか、学び取ったのかといえ、そうではない気がする。そこに行くためには、それなりの準備が必要で私たちがどのように感じて、子どもたちに何を感じさせたいのかを抑える必要がある。
- 徳島県に「そらの郷」という体験型の修学旅行の受け入れなどを行う団体がある。東京の学校が参加し、都会の子どもと田舎の子どもが交流しながら社会課題解決型の修学旅行を実施されており非常に面白い事例。このような事例が広がっていくと良い。

③ 縦・横の連携や連動を確立

- 観光に関わる科目を学んだ生徒を、どのように社会に輩出していくか検討が必要。こんな生徒を育てたい、だからこんなカリキュラムが必要で、それを実現するために必要なモデル授業とは何かと検討・提示していくことが必要。
- 普通高校の生徒でも問題提起は結構できる資質を持つ。文献調査にプラスしてリアルな場や、現地に行って感じるなどが資質・能力を高めるため場作りが重要。
- 観光関連産業と教育界を結びつけるという水平的な横のつながりに加えて、学齢の異なる子ども同士が縦に垂直に繋がる観光題材としてのパイプも始めないと、観光教育における発達段階に伴って育てていくという視点は、十分ではなくなると感じる。領域と系統（スコープとシーケンス）として、縦軸と横軸の両方を常に考える必要がある。
- 教員が持っていない機能を社会が持つ時に、学校＋社会の組み合わせの中で、育みたいコンピテンシーを達成することができる仕組みをつくることが重要。
- 国内旅行の資格は年に1回しか受験の機会がないため、高校生が複数回受験できるようになれば観光に興味・関心を持ってもらえる

2) 継続的な検討事項 ～プログラム作りに関して～

前項に示す各種論点が、観光教育を普及させるためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと、着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には、一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

本章（取組領域 C：プログラムづくり）に関しては、継続的な検討事項の大きなトピックとして、「プログラム要件」や「実施枠」について議論がなされたため、以降に示す。

3) 継続的な検討事項 ～教育効果の高いプログラム要件とは～

図表 49 効果的な観光教育の「プログラム要件」の一例

効果的な観光教育の「プログラム要件」の一例		
周知・気づき	指導視点・指導技法に関して	他者（他学年や社会）への貢献を同時に実現する学び
教材・ツールづくり	観光の範囲を理解した上での学び	デジタルツールを活用した学び
プログラムづくり	子どもたちがわくわくし、楽しんで取り組める学び	学外組織・社会の力の活かした学び
ネットワークづくり	事前準備・事前インプットの必要性や取組方法	グローバルな活動・国際交流
実施体制の整備	他地域との比較やファクトチェック	将来の観光需要者を創造する視点
	魅力を価値に変えること、誰かの役に立つ、という落としどころ	進路・キャリアの視点

Mitsubishi UFJ Research and Consulting

MUFG

① 指導視点・指導技法

- 子どもの自己肯定感の低さや、その背景としての完璧主義の存在に関して、子どもに自由にして良いよと言いつつ、教員が口出しをして教員の意図する方向（≒学校の方針）に子どもたちを寄せていくシーンをよく見るとともに、その一因となっていると感じる。
- 教員はきっかけを作り、見守りつつも突き放す場づくりも大事。
- 観光教育として授業や教室の内外で様々な場づくりをしてきっかけを与えることが重要。
- 高校の場合、実質は1年半から2年の期間の中で、様々な経験や主体的にどう動くかというところで、色々な場づくりを我々大人が作ることで生徒が考えることができる。
- アクティブラーニングが言われている中、ただ覚えるだけの学習は避けた。知識を持った上で議論できる場や教材を作っていくことが重要。調べながら何か1つのものを作り上げる、各々が調べた結果をまとめる探究的な取組が良い（例：地域食材で作る駅弁）。
- 子ども側（学ぶ側）も、大人側（教える側）も、一方向の学び・教授に留まらず双方向のコミュニケーションが重要。

● 「なぜ自分のふるさとは観光で人が来ないのだろう」というクリティカルシンキングな学習が少ない印象もある。一方で、シャッター通りを題材とした学びでは大きな労力が伴ったようだ。
● 今の高校生世代が、働き盛りになる 2050 年には経済規模が縮小し、海外資本が入り込む圧力が高まっているなどの状況も視野に、日本のあるべき姿を一緒に考えていこうと主体的に考える場づくりを観光教育の文脈で設けることも検討したい。
● コロナ禍で外国人観光客の受け入れに消極的なアンケート調査がある。受入側の在り方に関する観光教育も今後検討が求められる。
● 多文化共生、ダイバーシティを目指す過程で、特定の層に「我慢が生じていないか」を気に掛ける視点も持ちたいところ。例えば、観光地においては観光客を逆に煙たがる教員もいると思われる。
● 観光庁から出ている観光地域づくり人材育成のガイドラインには、リーダーに必要な能力として、企画戦略・分析計画力・組織づくり・PR・商品化・事業化が挙げられている。当該内容を小学校に当てはめると、企画戦略は観光における基本知識を学ぶことや地域資源を調査し、それをどのように創造するかを考えることであり、地域の人とのディベート、次に県外の人とディベートし仲良くなることで県外に行きたい気持ちも強まるのではないかな。最初から県外を考えると小学校教育においては飛躍しすぎる印象もあるので、まずは地域から発信していくことも 1 つの方法。
● 高校では、受験・進学を通じて、近い学校に観光を教える学科があると、そこにしか行けない・行かない子どもがいる。ある意味、強制的に入ってくる子もいるなか、どのようなモチベーションを持たせて中学まで学んできた観光の内容を磨き上げていくかが必要。

② 観光の範囲を理解した上での学び

● 普段高校生や中学生を見ている中で、結局のところ観光産業を分かっていると感じる。観光との関わりが薄い職業が観光にどう結びついているのか子どもにはイメージしづらい。
● 観光資源を見つけて、それを基に観光企画を考えるということはやられるが、観光業はそもそも誰が観光関係者なのか分かりにくい。どこからが観光業なのかという境目がはっきりしているわけではない。我がまちの観光業ということで、誰が観光業の関係者なのかというステークホルダーを理解することが大事と感じている。

③ 子どもたちがわくわくし、楽しんで取組める学び

● 小学校の時から決められたことをするのではなく、わくわくさせながら、広げていくような流れみたいなことがあれば良い（サッカーには純粋にボールを好きになるゴールデンエイジの概念がある）。
● 取組が机上の活動だけではワクワクしない。実際に現場を見ながら、変化を見ながら、人と出会いながら、進めていけるように小学校段階から教育として展開できれば面白い。
● 昔ながらの教材は見て「こうなんだね」で終わってしまうものが多いが、そうではなく、実際に行って心が震えるような面白い仕掛けやツールがあると、子どもたちも飽きず、行

ってみたいという気持ちも沸く。そのような教材やツールがあると良い。
● 高校専門学科の授業の中でも、観光を楽しむことをどう伝えるかが重要。楽しむことで、消費を生んで生産するという働き手の立場だけでなく自分が消費者になる感覚も育んでいくことに繋がる。今までの高校専門学科では、どうしても職業の方に目が行きがち。サービスを受ける側と提供する側の両方の立場を学ぶということは、できていないようにも思われる。「相互理解」を発達段階で意識させていくことが必要。

④ 事前準備・事前インプットの必要性や取組方法

● 活動面と知識面の2つをしっかりと身につけると、もっと幅が広がるのではないかな。
● 世の中のどこに何があるかを学ぶ機会が少ない。良し悪しは別として議論するためにはある程度の知識が必要であり、知識がなければ出かけたいたい気持ちにならず、その機会の創出が課題。
● 知識から入るときもあれば、活動から入っておのずと知識を学ぶ時も、両方ある。一概にすべてを知識からではなく、テーマを与えてやれるだろうというところでやらせているのも事実。
● 現実を伝えることも大事。地元の問題点をするところから始め、学校間交流や現地訪問を通じて他地域の問題点を知り、それぞれがお互いの問題点を提起することで、新たな問題点や改善点を知り新たな知識や交流が生まれてくる。そこで社会との関わりが生まれる。社会の中で生徒たちがきちんと学べる準備をするというところが、日本では欠落している気がする。生徒を連れて志賀高原に行ったときは、無職の高齢者がどうやって暮らしているのか調べたいとして、調べるための相当な準備とそれを補佐してくれるボランティアグループを用意して、生徒たちがヒアリングをしに行き帰ってきて自分たちが得た学習の成果を学校の中で討議していく形になった。
● 観光のツアープランを検討する際など、現在は予備知識なしに生徒が各々調べてきているが、観光に対し、どのような情報源をどのような切り口で見るかが分かると良いのではないかな。小さい頃から家族旅行で海外を経験している子どもは、どのような情報源をたどって、どのような切り口での視点を入れるべきかを何となく理解しているように見受けられる。面白い内容を取り上げている生徒は、インターネットやガイドブック以外の資料も当たっている。

⑤ 他地域との比較やファクトチェック

● 自分の地域と他の地域の比較が大事であり、内に来てもらう視点（インバウンド）だけでなく、外に出ていく視点（アウトバウンド）も重要。
● 自分の町の観光資源を知った上で、他の市町村と比較・評価することも重要。
● 他者理解や他文化理解、自文化理解に加え、グローバルな理解、世界に目を向けるということ、総合的に自分が住んでいる地域と他地域を比較することは、自分の成長や地域の活性化のために必要なこと。両方を見ていくようなスタンスは、個人の成長にとっても観光が持つ力の中でも非常に重要。
● 地域情報に対するファクトチェックをどこかの段階で取り入れることができれば良い。東

京と宮崎の高校生でオンライン交流する機会があり、宮崎に東京の高校生を連れてきたという前提で、東京の高校生は宮崎のどこに行きたいかを考え、宮崎の高校生は宮崎のどこに連れていきたいかと考えた。結果を見たら両者のギャップが非常に大きかったことが印象的だった。
● ファクトチェックをマンツーマンで行うことも志向したいところ。全国一万以上の小学校でやれたら盛り上がる。
● 観光は産業とは違って全国各地にどこにでもある。成功している地域もあれば失敗している地域もある。どうやったらこの地域の観光がうまくいくか、他の先行事例を知りたくなくなり自地域の学びだけに陥ることは無いのではないか。

⑥ 魅力を価値に変えること、誰かの役に立つ、という落としどころ

● 高校生が外に出ることへ理解のある企業や行政、団体とうまく連動し、子どもに社会を見せて学ばせて、同時に地域を良くしていけたら良い。学校側と外部でギャップがある場合もあるため調整は必要。
● 地域の魅力に関しても、小学校段階ぐらいはあれもこれも良いねという感じで、ランキングや絞り込みができない学習が展開して、いわゆる自己満足の「良かったふるさと学習」になってしまう。観光教育をより磨いていくためにも、地域の魅力を価値に変えていく視点、1ランク上に上げないと新しさがない。特に、小学校の高学年、中学生ぐらいの段階になると、より高めていく方法が求められる。
● 高校でも「地域理解」という言葉があり、自分の住んでいる地域のことが分かっているだけで良いとすると、これが良い、これが良いと羅列して終わってしまうので、やはりどこかで他と比べるというところの視点が必要。「地域理解」が段階毎にあって、その後「国土理解」という形で、他の地域を理解することにより、自分が住んでいる地域の特色を知るという形が良いのではないか。国土という言葉が出てくれば、地理関係の先生方は飛びつくかもしれない。
● あれもこれも良いと牧歌的では観光資源にならず、磨き上げる視点(ブランディング)も重要になる。
● 現在の観光地として思い浮かぶ場所には、魅力があるから人が集まるので、そうしたところに行って体験することが楽しかった嬉しかったという感情を生み、今後のステップに繋がる。
● 魅力をブランディング化して、価値に高めていくような授業・交流にまでするには、自分の地域の魅力を挙げて観光のPRをしたところに対して何か言ってもらうだけでは価値の違いを見つけれられない。そのあたりを追究する余地がある。
● 観光の成立要件として、観光資源の魅力化、サービス、交通の整備、これらが重要な3項目であり、これらの視点で違いを見てあげると観光客から見た人気のある観光地や観光資源が見通せるようになるかもしれない。
● 絶対的な価値もある一方で、相対的な価値にも気づいていく、それが、稼ぎの種にもなるし、自分の守るべきものにもなる（例：北海道の雪質は世界一）。
● 長野県で信州学というものを総合学習でやっていて、オープンキャンパスでやってくる中

学生に我が町を紹介しているようだ。高校生なので、自分たちが住んでいる地域のデータをきっかけに見てみよう、全国のデータと比べてどうかということをやられている。ゴールが必ず決まっているらしく、産学官のどこかと絶対に連携をして、自治体に陳情するところを最終的なゴールとしているようだ。なぜそれをゴールにしているかというと、高校生が「地元の役に立った」と思えるところにつなげていると伺ったことがある。「誰かの役に立つ、地域の役に立つ」というところについて資質・能力の部分につながってくる話かもしれないが、1つの視点として必要なのではないか
● 「カリブ観光教本（(財)国際観光サービスセンター編著、2002年）」を見ると、話題提供でも言及いただいた、経済の観点がすごく出てくる。自分の国がどれだけ観光産業で利益を出しているか、それが経済の点だったり観光保全の点だったり、地域について構造的に見ていく視点があって、そうするとやはりお金のことは避けられない。むしろお金・経済を理解した上で、そのために何ができるかを考えていくと地域貢献や役に立つという話に結び付く。

⑦ 他者への貢献を同時に実現する学び

● 観光甲子園とかは実社会において大人向けに自分たちの学習成果を発表する場。逆に、子どもが下の学年の子どもたちに自分たちの旅行商品企画をわかってもらえるようなプレゼンをする発想もあって良い。
● 高大連携を見ると、大学のゼミ生が高校生に街歩きのガイドをしたり、音を伝えることはよくやっている。高校でも高校生が中学生を教えるなど、オープンキャンパスの時などに、中学生に勉強を教えるとかはあると思うので、それは、上の子たちにとっても良い学びの機会になり、下の子にとっては分かりやすい内容になる。
● 専門高校は比較的時間があてられ、材料もそろっているのも、もしかしたら高校生だからこそ、繋げる（コーディネートをする）役割ができることもあると思われるとともに、そういう能力を身につけてもらおうと良いか。
● 観光や地域振興に問題意識を持つ地域の人々はアクション（例：観光大臣会議）をおこしているが、他の住人が追随できていないため子どもの頃から教育していくことは重要。

⑧ デジタルツールを活用した学び

● オンライン慣れしているのは教員より生徒の方で、オンラインとリアル併用の併用も観光教育の中で考えていく必要があると感じている。
● ホストタウンミーティングで、日本各地の子どもたちの交流（地域の魅力を見出し伝達）が可能となった。
● オンライン上でも観光は展開されており、その観光も高校生に経験してもらうことは重要。オンラインと観光教育の関わりも考えられるべき。オンライン学習企画を先導する事業者も存在する（例：JTB）。
● 全国大会やコンテストなどをオンラインやハイブリットで実施すると、交流が生まれて非常に意義があると思われる。
● オンラインでの開催スタイルでのイベントやミーティングの実績が生まれている。今後、

オンライン上での生徒交流ができるのではないかな。
● 全員がコンピューターを持つ GIGA スクール構想においては、うちの町の観光業に関わっている人はこういう人がいるということについて、小学生同士、中学生同士で話をしてみるだけでも意味がある。そうして我がまちの独自性を見出し、それが町に対する自己肯定感につながれば、そこに住む子どもたちにとってもやる価値のある観光教育につながっていくのではないかな。

⑨ 学外組織・社会の力の活かした学び

● 各成長段階において、高校の体験入学など次の段階における観光教育を体験できると良いかもしれない。高校ではこんなことを学べて面白いということを意識の下、基礎をしっかりとやっておいてもらおうと、強く思いとともににより成長できるので良い。
● 年次を超えて一緒に行動して発表会をしたり、体験入学をしたりと、それぞれの学びの成果を教え合うことにより（上の学年から下の学年だけでなく）人に伝えるという経験や他の学年のことを知るきっかけになる。
● 大人が認めてくれることの成功体験を作り出すことが重要（例：イラストが観光施策において利用される経験）。
● 役職ある方と交流をしたり、話を聞くことも様々な学びが出てくる。
● 外資系の観光事業者と連携し、5 つ星ホテルでのサービスマインドを学んだり、多民族国家ならではの集会や文化、人との関わりを身につける実習をしている。
● 地域と共同で観光教育を実践する際、生徒が「人手（ボランティアの人員）」と認識されかねない。活動趣旨はあくまでも、教育目的（例：学びという点で生徒が地域を活用して自分のキャリアや自己に向き合える）が第一であると理解いただくための地域の方々との地盤形成、関係性づくりが最初に必要な。
● 観光教育ソリューションを提供する民会事業者では、提供する行事や旅行・研修などが生徒の資質・能力、コンピテンシー、暗黙知、非認知能力といったものをどのくらい変えたのか提供する側としては見せていくことが必要と考えており、デジタルシステムでデータが見える化して評価するようにしている。
● 学校現場に出前講師を派遣する事業を続けていて、優れた観光関係者が出前授業に行くが教員は全部丸投げ状態で自ら学ぼうとせず、「良いお客さんが、良い話をしてくれたね」で終わり。実際の業界と接点があっても、学校の先生方が本気になれないところにメスを入れる必要があり仕組みの問題として捉えている。

⑩ グローバルな活動・国際交流

● 国内だけで完結するのではなく、国際交流を伴う活動もまた重要。
● 外に出ることの楽しみを知ると海外に興味を持つ率も高くなり、実際に外に出たいと発言する生徒も増える。そして、外に出て地元に帰って来たいという生徒もあり、様々なパターンで生徒の興味・関心が高まる。
● 子どもたちが外国に出ていくことに関する教育があまり多くは挙がっていない印象。
● 海外からの実習生との異文化交流で、国際的な感覚を養うことができる。

● 留学生に向けて我がまちを紹介してもらおう取組もできるのではないかと。留学生には日本語が流暢な人が多く、将来は日本で働きたいと思っている優秀な人材がいるが、日本に溶け込もうと思っても他の日本学生と関わる機会がなかなかないようだ。留学生は、学校の授業で専門的なことを議論する以外には活動の機会があまりなく、もっと日本のことを知りたいので活動の場を広げたいこともあるようだ。
● 小中学校の時の国際的な感覚が、観光に興味を持って自分で学んだり、それをスキルにして国際的な問題に取り組んでいこうということで大学を選択したりすることはないか。ニセコ町だと、夏休みに入ると小中学校では1か月休みを取って旅行に行かれる方が多く、そういうことが自然に観光に興味を持つことに繋がるほか、外国人の役に立つ仕事に就きたいなどの感情を抱くことに繋がっていると感じる。

⑪ 将来の観光需要者を創造する視点

● 外に出て旅を楽しむことが、経済的・社会的に世の中を動かす意味でも、旅をする人・したい人を育てることは重要。
● 実際に旅へと連れて行けば、自ずと関心は高まる。機会が必要。
● 旅する人を育てるという視点では、複数時間の授業を通じて生徒自身が旅について調べだし、いつのまにか旅をする人、旅をしたい人になると感じる。何がきっかけかは生徒によって異なり、それが科目を通してなのかは確認する必要がある。
● 専門学科では専門教育が行われるため、導入などでは旅行者目線の手法を採る場合もあるが、地域理解や旅人創出は目的ではなく、結果論として達成されている可能性がある。
● インバウンドによって地域の観光資源を見直す、活かすなど、「稼ぐ」という商業ベースの観点が強かったが、未知の場所に出かけていく力を養わなければ、日本は観光先進国にならないのではないかと。
● 観光まちづくり教育は地域資源を見直す、誇りを持つ、良さをクローズアップするということが、その子どもたちが外国に出かけていくという視点での学習ではなく、この部分も守備範囲に入るのではないかと。

⑫ 進路・キャリアの視点

● 職業観に関して、観光教育を経験した子どもたちが観光業や関連産業に従事する流れをつくる視点も必要。
● 高校生のキャリア教育と観光教育を繋げることについて、専門学科は実践しやすい一方、普通科では具体的にどのように取り組むかが検討課題。
● キャリア教育に関しては、その先を見据えて大学選びをするというような、従来の進学指導からは変化している。現実、高校と大学でやっていること（活動で志向すること）が異なる実態があり、ギャップの解消が必要。
● 大学進学や専門学校への進学を経て、観光に携わるキャリアを考える普通科の生徒に対して、どのような教育ができるのか議論が必要。
● 水産高校では、船員の人材不足を背景に後継者育成が重要な視点。観光教育においても共通していると考えており、出口指導を強化する（魅力ある職業を紹介する）ことから始め

られる。

4) 継続的な検討事項 ～実施枠について～

① 学校教育における実施枠

● 地元の観光ツアーみたいなものは課題研究や授業で取り組む。
● 学校設定科目で実施できる。
● 基礎科目としての位置づけ。商業高校の観光教育の場合は、比較的いくつかの科目を構成しながら専門性を磨き、実学に繋がれることが強み。
● 部活としての本格的な活動。
● 商業科以外の専門科でも観光教育は実施できる。幅広い視点で専門教育と観光教育の繋がりを構想すべきか。
● 自身の学校でも、2年後には観光ビジネスを取り入れるが、最初は全員履修させようという声はあったものの、今はそれが消えつつ観光コースで観光ビジネスをやってみる話になっている。観光から学べるものはすごく大きいのでもう少し広げていきたい
● 普通科には「探究」の時間があり、継続的な取組のために重要と思っている。
● 課外活動で行うものを、特別活動として実施できないか。修学旅行やHR（ホームルーム）のように、特別活動に入れられると制度化できる。
● 学校指定科目としての実施（私立ではやりやすい）や、その前段階として特別活動に位置付けて年間スケジュールに入れ選択式にしていく方法がある（例：淡路島・石垣島・大島では郷土芸能として取り組む）。
● 観光教育に関係する試験（例：地理検定）をきっかけに観光への興味を醸成する方策が考えられる。
● 高校は3年間あるものの、実質的には、かなり短時間で育成しなければいけない。もし、観光に興味を持てば、例えば高校であれば修学旅行があるので、修学旅行を生徒がプロデュースしたりすることで観光について小中学校で学んできたことが活かせる。
● 修学旅行における自主研究の事前事後指導としての導入は、一例として理解されやすい。
● 修学旅行等に他教科の先生の視点を加えるような形にしたら、観光教育が分かりやすいものになる。社会科教員がプログラム検討を担うケースが多い印象。
● カリキュラムとしてリベラルアーツを科目の枠で展開することが難しいのであれば、教科の枠組みにとらわれずに物事を考えていくことの訓練ができる場が考えられる。例えば、当校は私立だが土曜日の授業をやめており、その時間を有効に使ってもらうことで人生観を養ってもらうことを期待しているとともに、その時間の使い方をどう発想してもらうかも課題として考えられる。
● 安全性の問題で、わがまちの探検などを学校から止められることが多く、学校では外に出る機会がとても少ない状況。そのため、（学校外において）自分で一人旅に出るなど、旅に出ることを自分で計画立てて味わうことが必要。それがあってはじめて観光や旅が楽しいのだと思えるのではないか。
● 県やNPOと協力し、「子ども観光大使」事業を実施してきた。観光講座への参加、検定問題への合格、はがきなどで良さを発信することが条件であり、県知事から子ども観光大使として認定をしてもらえる。全国の先生方から評判となり、各地で子ども観光大使の取組

が実施されるようになったが、予算の関係で終了となってしまった。
● オンライン上で気軽にやれるような人と繋がるようなプログラムと、それを誰もが実行できるようなテキストができれば良いのか。
● 観光庁が関わる、ツーリズム EXPO を観光教育でも活用できるようになると良い。大きな箱で教員や学生が集まる場、発表できる場を提供いただきたい。

② 教科学習との関連・連動

<総論> ● 教科学習と観光には関連する内容が様々な場面で存在する。観光という観点で、教科学習を深めていくと面白いことになるが、そうした思想の学習プログラムの検討は今後の課題。 ● 観光というキーワードは、幅広い分野・領域と関連（例：商業では商品開発、など）。 ● 専門学科のみに限らず、通常の教科の中でも広く考える力を養うきっかけになる。 ● 学習を通して、観光地や地理、飛行機の運賃計算など、観光の深い部分を知ることによって、観光にはこういう仕事もあるというような、様々な方向性を見いだせる。国語、社会などの通常科目と観光教育をつなげていくことも重要（例：車いすを利用してどれだけバリアフリー化されているかなど、サービスの観点）。 ● 運賃起算から、なぜ地方路線の金額が高いのか、利用率、過疎化の問題や廃線危機など、地域の課題が見えてくる（旅行業取扱管理者試験の範囲なので、深く掘り下げずに終える可能性もある）。 ● 他教科の先生と連携する際は、教科担当のルーティンを崩したくないとなると、絶対に受け入れてはもらえない。当該教科の内容と観光教育との連動や先生方の理解や人間関係も重要。 ● ビジネスとしてどう感動させるかというシステムを考えるのが専門科。 ● 人が移動することで観光の現象が生まれるため、広い意味で考えると、様々な教科に関連してくる。 ● 観光は学問の対象であり学問ではないと言われていたこともある。反対に、観光はすべてを内包し得るため、身の回りにあるもの引っ張り出して組み立てることができる。 ● 基本的なことをしっかり学びつつ、他の科目で関係のあるものを観光につなげて、様々な知識を取込んで、広い意味での観光に繋がる授業ができると良い。実際に生徒に体験、経験してもらえるようなことが観光教育として重要。 ● 観光教育を行う高校教員の取組を調べると、商業に次いで社会科で多く取組まれている。中には理科や体育や家庭科、英語の教員もいるが、極めて少ない状況。それぞれの先生が問題意識を持って観光を使った教育を実施するものの、観光教育ではなく地域理解教育・郷土教育・まちづくり教育など、地域を素材に学習しているケースがほとんど。 ● 各教科で観光教育と関連する取組として何がやられているのか把握すると面白い。家庭科など、食と関連付けて取り入れている先生も意外という。

<社会>

- 社会科の中で経済を教える中にきちんと入れないといけないかもしれない。日本の将来が美しい話のようになれば良いが、現実にはそのような余裕はない。
- 特に社会科については、学校の教育の現場において普及するためには、資料集が鍵と感ずる。各地域での観光活動の様子や世界遺産など、様々な資料を網羅しつつ、これらの資料を使ってこのような授業をしているということを、実例として紹介することはできないか。まずは資料集で学校教育として取組んでいる方たちに発信し、興味を持ってもらえる面白い。
- 地域について総合的にまる掴みする地理学の方法論としての「地誌」があり、観光をフィルターにすると、観光地誌と名づけられ、主力教材の1つになりえる。
- 地理の授業では、自分の住んでいる地域と他地域を比較する中で、観光が取り上げられる。自分の住む地域が他地域からはどう見えるかなど、客観的に地域を見ることについて、観光を通じて行うことはとても面白いこと。
- 観光公害を教材化し、京都、白川郷と地元の事例を取り上げ、タイプの違う地域の問題を如何に解決するかを考えることで、他の地域にも応用できるのではないか。

<国語>

- 社会科では感動は扱われにくい一方、国語では感動という言葉が扱えるので、彼らは観光の核心部分を学んでいるとも捉えられる。
- 以前、修学旅行後の教育をどうしたら良いかと聞かれた時に、何が面白かったかのオチをはっきりとさせてオチに向かって経験を説明するようにすると、皆で発表した時にオチを競いあえるよと言ったら国語の先生方が目からうろこ仰っていただいた。物語をどう作るかということが重要なので、国語は国語でやったことを観光教育として発表していただくことは良いかもしれない。

<理科>

- 理科教育では、一例として、天文観測、博物館訪問などが観光と関連する。
- 観光学部の学生は文系なのでアイデアやマーケティングの話はよくするが、技術面でのアプローチは主だったものはない。

<数学>

- データ分析は数学で扱われている。

<美術>

- 小中学生が旅行プランを考えて、絵で表現するという取組には美術の先生と社会の先生が連携することが考えられる。

<体育> ● スポーツを通じた交流（スポーツツーリズム）など体育の中で観光を意識した部分が生まれるかもしれない。
<情報> ● ビッグデータを用いて情報系の学生が観光に関わることが観光教育のひとつの形か。
<複合領域> ● 防災の学びとしての観光の側面もある（ダークツーリズム）。 ● 環境教育は比較的根付いていて、特に小中学校ではリサイクル、自然保護活動、ESD、SDGsに移行して、熱心な先生方が学会、団体になっている。 ● 商業科では一般的と思われるが、知恵によって稼げることを普通科でも教えることも重要（例：イールドマネジメント）。 ● 日常社会での気づきは観光の重要な視点であり、教科での気づきとはやや異なる（例：観光地の美味しいものと自地域や日常生活で食べるものの差は何か）。

③ 修学旅行

● 修学旅行を活用する際、目的地も多様化している。各地域の素材が活かせられると良い。
● 私が校長をしているときの中学校の修学旅行はパッケージから選ぶ旅行だったが、選ぶ地域の問題点がどの教科のどの単元に関係があるかを説明したら先生方にとても喜ばれた。
● 修学旅行の目的が、教育目的として大切なのだという意識が、保護者の中に欠落してきているのではないかと。修学旅行に対する、学校・保護者・生徒の認識について、未来の教室などで観光教育に参加されたところとそうでないところでギャップがあると感じる。
● 観光事業者の社員であっても、昨今の新入社員の世代の肌感覚としては、皆、口をそろえて修学旅行がなくなると言っている。それを不思議に思うが、時代の空気感かもしれない。人によって温度差はあると思うが、世代が変わり保護者が修学旅行をそれほど重要視しないという世の中の大きな感覚の中で、修学旅行の重要性の占める割合を考えると質量が軽くなっているのは間違いない。
● 500 人で行く大型の修学旅行はいまや瓦解をしており、1つのコースが 60～80 人でしていることもある。旅行内容も個別選択で、団体行動の見本という昔の就学旅行の感じは、薄らいできている印象がある。
● 個別最適が教育界に浸透してきていて、その方向にベクトルが向いてくると、300～500 人単位の団体行動が必要なのか、枕投げをすることにどれだけの意味や価値があるかという話にはなってしまう、そういう時代の入り口に入っている感じもする。
● 修学旅行は全員参加必修にしていない学校もある。旅行をやるからには、出かけたことに対する意義を何らかの形で見出していこうと考えると、どうしても個別にそれぞれの目的にあわせて分散していくことになる。また、飛行機がどんどん小さくなってきていて団体旅

行をしづらくなっていることもある。
● 修学旅行が、教育現場での教員の授業の枠組みの感覚で語られているかもしれない。「修学旅行を学習指導要領に位置づけてこうやる」という意識が現場に浸透しており、修学旅行でこれを学ばなければならないと縛られている印象もある。勿論、目的なく旅して遊ぼうでは目的が達成できない。
● 修学旅行では、事前事後の学習も含めて科目との整合性等を意識するあまり、緻密にしすぎている印象を全体的に感じるとともに視野を広く持つ部分を縛りかねない。
● 観光教育の意義・目的は、教科書的なものを学ぼうとしているわけではなく肌感覚として生徒がどこかに出かけることによって、何かを学び、それがきっかけとして、これからに繋がるということを教員ももっと共有しなければいけないし保護者も理解が必要。
● 修学旅行において全てを学ぼうとは考えず、自分たちの発想の中では考えなかったような旅を学校が提供するような、そういったものを実施すれば、もう少し学校の中で旅ができると思われる。そもそも、修学旅行という呼び方自体も変える必要があるかもしれない。

(4) 取組領域 D：ネットワークづくりに関して

1) 提案された取組事項

① 指導側の体制・ネットワーク

● ネットワーク作りについては、まずプラットフォームを整備してもらうことが重要。それができれば、人的、教材的なものも一括で相談・連携できる体制が作れる。
● 先生の育成の観点からは、先生自身がやりやすいようにしてあげるのが一番大事ではないか。いろいろな先生が参加して実践できるようなシステムを作っていけたら、その結果として生徒たち、子どもたちに繋がっていくだろう。
● 大会を開催する時など、1つの教科の部会が入ってしまうと、他の教科の先生が入りづらくなったり、他の教科の先生に連絡がいかなくなる問題が出てくる。
● 研究会などでは、教科や高校という括だけではなく、大学や観光関連企業、団体も参加できるような集まりにできると望ましい。
● 観光教育に取組む各組織（例：観光教育の教員の集まり）との連携や、意見交換をする機会を設ける視点が重要。
● 学会などでも、高校の先生にも参加していただきたいが、大学教員のように研究費などがなくて参加できない現状がある。
● 「観光庁のホームページ」も2年、3年と取組を継続し、内容を充実させていけると良い。
● オンラインが使えるようになってきたことで、全国の先生が一斉に集まって行うことができる、研修会、勉強会のようなものを頻繁にやるということも1つのアイデア。
● 自宅に帰らないと Zoom ができない先生もたくさんおり、リアルな研修会をいくつかの地域で行うのも良い。
● 産学官の連携によって、子どもが中心となるシンクタンクを地域レベルで設立できないか。そのハブとなるのが各地の商業高校と思われる。商業高校の観光ビジネスを学んだ学生が横串を指すような役割を担い、専門学科の生徒が中心となって参加するシンクタンクがあると良い。
● 観光教育における学びにおいても、「よその・わかもの・ばかもの」と称されるような方の大胆で柔軟な発想や、地元の人が気づかない示唆をとりこみたいところ。
● 地域の指導者を学校の中に入れ込んでより深い学びを提供するためには、教員の理解を得て、受け入れ態勢を作ることが大きな課題。観光教育以外でも、色んな方の手を借り進めていく必要があり、教員に研修等を行い理解してもらうことが必要。
● 特定教員の関与・尽力が終わった途端に、活動が途切れるものがある。活動の継続性を確保する仕組みなどを検討・共有する必要がある。
● 観光教育の取組を頑張っているが、今はマンネリ化していて、活動も一部の先生に限られているという課題もある。そのため、他の先生たちが手伝ってくれるかということが一番心配なところ。
● 教員がインターンシップをする機会は少なく、教員が観光の現場を知ることによってどういった着眼点を持つべきかを学ぶ機会も必要。
● 専門学科は社会とつながれるような活動の体制がシステム化されていて、地元の商工会や

組合を通じてそこも組織化されているので対応してくれる。しかし、普通科の場合は地域が対応してくれるのが精一杯で、生徒の社会連携を受けれる仕組みがあまり出来ていない。地元と交わるときだけでなく、就学旅行など遠方の社会にかかわるときでも同じことが言える。
● 着地した先で一体どんな受け入れや交流が待っているかということを重要視して、着地の地域の方々との交流や、社会に近づくとか、開かれた社会を見せるといったこと等、平和学習みたいなものを含めて一生懸命やることに学校側に賛同いただいております、旅行先でも地域が協力してくれて色んな体験を与えてくれる方向性は正しいと思われる。

② 学び手の体制・ネットワーク

● 観光を学ぶ仲間が集まる機会がありません。これが実現した時、生徒たちも盛り上がって、良いディスカッションができた。
● 横のつながりは非常に重要。以前、工業・商業・農業・演劇の4学科がある高校におり、そこでの取組の幅に可能性を感じていた。仮にモデル校を選定するとなった場合、そういった高校で取組むと面白いのではないかと。
● 異なる属性を持つ子ども同士での学びも有意義。男子校と女子校で思考や行動に違いがみられる状況下、男女混合でグループワークをしたら良い教育効果（恐れない等）が生まれた。

2) 継続的な検討事項

前項に示す各種論点が、観光教育を普及させるためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと、着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には、一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

(5) 取組領域 E：実施体制の整備に関して

1) 提案された取組事項

① 全体的な動きのグランドデザイン

- 何年間でどう具体的なところに持っていくかが重要。社会的なトピック（例：2025 年の万博）も気にしつつ、スケジュールを設定する方法もある。

② 指導者の活動インセンティブ創出

- 観光教育を教える先生には、普通の科目に加え、プラスアルファで実践的なことへと取組むために非常にパワーが必要で、サポートが必要。
- 教員のモチベーションの維持も課題。
- 学んだことを観光庁等が証明（ディプロマ）してくれると、大学、社会に出るときの評価書に書けるため、社会連携も進むのではないかと。
- 良い取組の持続性や継続性に課題があると考えており、続かない理由を明らかにする必要がある。観光教育が教育の素材として持続する仕組みは検討事項。
- 「〇〇教育」の類は特定の先生がいなくなってしまうと、廃れていく傾向があり、どこまで持続させられるのかの視点が必要。
- 現在、熱心に観光教育に取り組む方々は、自腹で個人参加している方も多い。学校として観光教育に取り組んでいるイメージを校長が持つことも課題。
- 校内連携の視点が求められるという視点が、学会にて挙げられた。
- 授業として取り組むにあたり、観光学習をやるから地域学習をなくすということではなく、今ある授業に加えてということになる。地域学習で地域特性を学んでいるのであれば、同じことを観光学習で繰り返すことはなく、他の授業と重複しないように先生同士で共有する仕組みやシステムを構築する必要がある。
- 中学校から高校にかけて教科分岐していくとき、どう観光教育が他教科とリンクするのかは重要な問題。授業の進捗度合いの調整は学校内で情報収集して対応する方法もあるかもしれないが、前提として、学校内のコンセンサスを図るために、教員間、少なくとも副校長の理解が重要。
- 社会協働をする際、外部の人間が学校の立場を尊重できる必要がある。例えば、出前授業が悪いわけではないが、それだけではダメで、やはり先生たちが教えられるようになることが一番。先生たちが何を知りたいのか、どうしたいのかについて配慮する必要があり、先生たちの信用を得たことにより先生たちがのびのびとやれるようになる。
- 学科を超えた繋がりができるのは非常に良いこと。
- 観光教育に関わる中で、観光に対して高い関心をもってお互いに努力しこんなこともしているのだという繋がりが本当に素晴らしいと思っており、自分以外にも色々な取組があることが心強い。

③ 活動資源の確保、他事業との連動

● 人・モノ・金の3要素をどう揃えて進めるか検討が必要。
● 観光教育は、やはり経費が発生するため、サポートが必要となる。お金をかけずに「楽しむ」こともあるが、「楽しむ」ためにはどうしてもお金が必要であり、研究モデル校として助成金などがあると、学校としては取り組みやすい。
● 観光ボランティアを県の補助を利用して実施している。取組の当初は、生徒の拝観料は全て学校持ちだった。当時、使える予算があったらと考えると、取組のハードルが下がっていただろう。
● 取組を展開するにあたり、資金が重要な場合も、人のつながりが重要な場合もある。各種の施策を有機的にどう結びつけるかが大きな課題。
● 教員だけで観光を教えるのは難しい場合もある。教員が新たな教育に取組む際に難しいのは、観光協会や地元の観光施設といった、他団体との連携を構築することのサポートがあると、観光教育が推進されるか。
● 商工会などは学校に対して遠慮がちにはなるが、繋がりたいという要望があることが分かった。
● 最も重要なのは「観光協会や商工観光課」と「教育委員会」の連携。観光協会の方には、子どもが観光を学ぶモチベーションの維持・向上のために頑張っていただきたい。子どもたちを動かしていく上での何らかの推進費用、教員のファシリテーション能力も鍵なので、教育委員会の頑張るところか。
● 徳島県では、今年度観光教育の会議が立ち上がっており、県の観光課が主導しつつ DMO も参加している。教育委員会ではなく県の観光部署が行っており、学校の先生や大学の先生も招聘され、学びの仕組みを作ろうと取組んでいる。
● 教員は、人、モノ、金に関しては、文科省から支援を受けている。観光については観光庁が所管のなか、どう横の連携を図るか具体化していくと良い。
● 県の留学支援制度を活用する視点が必要。
● 国の中核人材養成事業と連携する視点が必要。
● マイスタースクール（次世代地域産業人材育成事業）（※SPH（スーパープロフェッショナルハイスクール）の後継的事業）と連携する視点が必要。
● SPH 事業などに取組むことで、様々な人脈ができることも重要な視点。
● 観光版の SPH 事業があることが望ましい。
● 民間主導の地域活性化プログラムと連携する視点が必要。
● 「環境モデル都市」、「SDGs 未来都市」に選定される中で、持続可能な街づくりの実践として管区教育を行ってきた。
● 「財団による補助」を受けながら実施することもある。
● 学外の関係者（社会）が教育に関わろうとする際、教育分野では補助をする予算がないため、他の分野における補助などを活用しながら、社会の関与を図っていく視点も必要。
● 札幌市では、雪対策に関する事業とも関連させて、観光教育を行っていた。
● 中部電力の補助金研究費を受けながら観光シンポジウムや日本地理教育学会での発表や観光教育推進について検討してきた。

● 内閣府の地方創生に関する、RESAS（地域経済分析システム）データ活用や政策アイデアコンテストの枠組みにおいて、地域課題の解決学習として観光教育を実施することができる。
● 観光産業や研究を行っている大学やまちづくり団体と連携し、教科学習の課題として、また、専門性を持った教育テーマとして深めていくためには、観光産業の人材や観光の研究を行っている大学やまちづくり団体との連携が実現できると良い。
● 民間主導の地域活性化プログラムと連携する視点は重要。教育委員会は絡んでいないが、長野県の湯田中温泉で八十二銀行が実施している「WAKUWAKU やまのうち」という地域活性化プログラムがあり、温泉街の再興をしている。その中で、小中学生に温泉街について学んでもらう授業を実施しており、通学路の旅館と子どもの交流が来ている。新しい事業を始める人が小中学生と交流を持つことが、自分たちの町のビジネスとは何なのかを考える機会になっている意味で好事例。
● 過疎・少子高齢化で悩む地方などは観光が地域活性化の起爆剤。そのためにどのように地域人材を育てるか、地域間で連携して盛り上げるにはどうすれば良いかを考えられる子どもを誰が育成するのかという点にクローズアップすべき。
● 民間の観光事業者には、旅行サービスの提供で培われた知見、経験則を基に、体験学習や探究学習のソリューションを展開するインセンティブを持つところもある。
● 民間の観光関連事業者が課題を提示する探究学習づくりも重要。
● 観光協会などの観光組織（DMO 等も含む）が、観光教育のプログラムを高等学校に販売する手法も考えられる（例：ユネスコエコパークである志賀高原）。
● 地方における就職事情としては、地元の有力企業に就職したい風潮があると思われる。業界や職業に対するイメージは職業選択に影響を与える意味で、取組の議論余地が存在。
● 特定の業界・業種・職種に関する課題に対して、対応策の基本計画が策定され、産学官連携で対応しており（例：船員不足）、そこに観光教育が解決ツールとして含まれる。

2) 継続的な検討事項

前項に示す各種論点が、観光教育を普及させるためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと、着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には、一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

(6) 領域横断の取組

1) 提案された取組事項

① モデル事例の整理・創出

● 小中高と探究的な時間が増えるとはいえ、学校現場は仕事で追い詰められており、なかなか新しいことに取組にくい状況。観光でなければいけないという縛りはないため、巻き込みたい思いはあるものの、スムーズにはいかない状況もある。そのため、「モデル事例を出して、面白そうで効果がある」と見せる必要がある。
● 学校の管理職に対してもアプローチできるよう、インセンティブが選べるモデル事業のような形を観光庁で検討し、大きな商業高校や学校で管理職を巻き込んで行う動きが全国に広がれば、裾野も広がる。
● 年間いくらかの補助が伴うモデル校事業を作りたい。旅費も学校で中々出ない。発表ど の名目で子どもを集めていただく方法がある。そこで情報交換をしたり、観光教育について学ぶような動きもあって良いのではと感じた。
● モデル事例としては、「突出した尖った事例」と「どこでもできる普及型の事例」の2種類をきちんと示すことが必要。頑張ればこのようなこともできるという事例と、今すぐに見える事例を示すことで、指導者を育成する土壌を作っていく。観光庁で文科省を巻き込んでもらい、続いて各県の教育委員会が巻き込まれていけば、大きく普及していく印象。その中で例えば、中心的な普及をするところに対しては事業化や補助金などを含めてサポートがなされると、強制的に前に進めていくことができる。
● 観光教育に取り組んでいる事例を見ると、コースや類型で実施しているところが多い。コースや類型の単位でまとめた予算をかけて事例を採っていくと、少ない人数で負担になってしまう懸念がある。そのため、2〜3校が集まる形で指定をかけ、まとめて予算にして動かすと良いか。取組の違いが分かって興味深いうえに、子どもたちにとってもまたやりた い、こういうことを知りたいと思ってもらうきっかけになるのではないかな。
● 専門学科で育まれたカリキュラムを基軸に、普通科やほかの学科へ展開する経路もある。

② 情報や知見を共有できる仕組みづくり（アドバイザー制度、プラットフォーム、等）

● 様々な先生の間で情報共有する中で、コンテンツやツール、繋がりを作る仕組みができた ら良い。Zoom など新たな情報ツールもどんどん取り入れ、リアルでも色々な方々、他の学 校（小中高大）の先生と話す機会が増えれば、様々な課題が解決されていくと感じる。
● 小中高が縦に繋がるような議論の場をどう継続していけるのかは重要な視点。
● 小中学校の学習指導要領では観光についての話が見えにくく、授業では観光を扱って もらえない状況。どうしたら学校教育に入れられるのか考えながら実施してきたものの、 結局は、地域の中のボランティアでやっていたことを子ども観光大使の事業では発表し ていた。6年継続していたが、予算の関係で終了となっている。国語でやったことを国語で、 社会でやったことを社会で、家庭科でやったことを家庭科で発表するのであれば、各学 校で導入しやすい。観光庁が主催で全国大会を開催すれば教員は授業も見られるし、子 どもたちも発表できる。各教科で分科会もできると良い。

● 観光教育の実践経験を広められる「助けの場となるプラットフォーム」の必要性はかねがね考えている。どこに相談したら良いのかなど、答えを返してくれる場所があると良い。
● やりたいけれどやることができない、まだ学びたいという先生方が、観光に関してはたくさんいると思う。「教員が学べるような場」や経験のある先生がほかの先生方へと教材やプログラムなどについてアドバイスできる、「アドバイザー制度」のような仕組みづくりができると、後々広がっていくためにとても有効。
● 特に商業高校などでは、これから観光教育がビジネスで始まるので、まちづくりアドバイザーなど様々な制度が各自治体にあるので、そうしたところも視野に入れ、広く「小中高の観光教育を推進するためのサポートシステム」について、一定の有識者や経験者がいて、地域ごとにサポートできることが望ましい。
● SPH のように学校に完全な裁量がある事業など、「既存事業の取組内容を観光教育の視点で整理」すると、観光に特化した SPH の事例として抽出・紹介できる。そこに、「モニタリングやチェックなどのサポートを業界や観光教育の実践者を巻き込んで実施」できると良い。
● いろんな事例が各学校にたくさんあると思うが、共有できる場所がないことが課題。自分のまちは SDGs 未来都市に認定されており、修学旅行に来る人が多く、自然に集まることができ情報交換が盛んに行われるチャンスがあるとも捉えられる。
● まずは学校の先生に観光教育の一端を知ってもらい、見てもらう機会を作りネットワークを広げていくことも重要。観光教育の経験のある先生に、授業をやっていただく機会を設けるにあたり、今は Web 会議ツールで中継することもできる。高校生同士でも、教員同士でもネットワークを広げていくことが必要。
● 観光教育を始めるにあたり、観光教育研究会から学んだことが多かったのも、そうした研究会へとアクセスしやすくする取組が求められるとともに参加したことを効果的にしていくことが重要。今あるものを持続的に動かしていくことも有効な手立てとなりうる。
● 「アイデアを共有する場」があり、それが「データベース化される機能」があると嬉しい。そこを見ることで、何らかの情報・ヒントを得られると先生たちの引き出しになる。引き出しの多さが、生徒たちの興味関心に繋がっていく。見る（求めている）人は多いが、書き込む人が少なくなる可能性もあり、どのようにデータベースを構築していくかが重要

③ 評価視点・評価方法の確立による指針設定

● プログラム・モデルを作ることは大事である一方、どの能力を伸ばしていくかを明示する必要がある。
● どういう生徒をどう育てたいということを決めるのが先であり、それを実現するモデル校的なものを作ってみて、モデルとして回すとどうなったか、こういうカリキュラムだと効果があるということが何年後かの段階で入ってくると良い。
● 教材ツールの観点では、評価をどのように一体化させるか、コンピテンシー評価も各学校で必要だと思うが、それに向かってルーブリック含めどのような評価ルールを作っていくか、この学びをするとこのような資質が成長するということをきちんと示すようなものが、必要ではないか。

④ 観光を学びたい子どもを増やす視点

- 観光教育を学びたい生徒を増やす視点も重要。学校紹介の場などに、観光庁関係の発信力ある人に来ていただくことや、専門家と普通科が協力して観光教育について宣伝することも考えられる。参加ハードルの低い Web 会議ツールの活用も重要。
- 最終的には生徒がいかにそこに入ってきてくれるか、どういう生徒を育てられるかが、学校現場の先生方にとっては重要。生徒たちと地域との関わりが見いだせるような、例えば、地域や現場と生徒たちが活動して共有できる場も作るなど、色々な機会を観光庁として創出していき、学校と教育現場が観光教育を魅力的なものとして受け止めて、広げていけると良い。

⑤ イベント、コンクールの活用

- 観光系のイベント（例：観光サミット）について、文部科学省が後援になっていないために、先生の出張が難しいこともある。後援等の要件整理が必要。
- 観光アイデア、観光関連作品などについて、発表の場や表彰の場が設けられることが重要。
- 大会・コンクールは、小中学校だけでなく高校でもモチベーションに貢献する。例えば、自校では、経済産業省中小企業庁のビジネスコンクールにおける「地域を探る」部門に参加している。周りの人に知ってもらえるきっかけにもなるので、観光庁でもこのようなコンクールがあると面白い。
- 学校の先生方が興味示してくれなくても、興味を持っている高校生がたくさんいて、学校を介さなくて良いなら関わってみたい、やってみたいという学生が結構多いということが分かった。学校を介さなくても良いということであれば、様々な学校で教材を作って生徒たちが自由に見ることができ、生徒間の関わりから学校間の関わりにも繋がる。そのひとつとして、観光学習のキャンプのようなものがあっても良いのではないかと（高校生向けの政策のアイデアコンテストで、当初、窓口が学校だったので参加生徒が少なかったが、今年はコロナでやむを得ず、学生が直接応募する形にしたら応募数が倍に増えた）。
- 大会などの事業は、学校行事のスケジュールを鑑みて開催いただきたい。

⑥ 観光ビジネスの枠の活用

- 観光ビジネスの導入は非常に大きなチャンスであり、これを逃さない施策が求められる。商業教育に限らないが、今後、各種のカリキュラムが出来たあと、それを観光庁として、具体的に地域と結んだプログラムにどう展開していけるのか検討が求められる。

⑦ 各行政の取組連動

- 教科書へと観光産業とは何か、具体的な記載がそろそろなされても良いか。
- 小中高にどう落とし込んでいくかについては、学習指導要領にどう落とし込むかが重要。沖縄の海洋学習の例を挙げると、海洋基本法に基づいて各自治体で海洋基本計画が策定されており、そこから学習指導要領に落とし込まれているため、教員としては取組まざるを得ない状況であるがゆえに取組みやすい状況となっている。また、現在小中学校にも海洋学習の内容が組み込まれており、連携しやすい環境となってきた。

● 「総合的な学習」に関して、市町村教育委員会毎の教育課程編成権限（指導権限のようなもの）を明記しても良いか。
● 社会科において、「人口減少問題×地方創生」と関連して、「観光単元」を作ることが検討なされても良いか。これは、市町村単位で策定される標準カリキュラムのレベルで対応することも重要。
● 「学習指導要領＋標準カリキュラム＋教材」がそろうと、強力に推し進めることができる。その前段の準備として、例えば、研究授業を重ね、その研究授業を原型に教育課程編成の手引に反映させることを、校長、教員、教育委員会の指導主事、行政（例：商工観光課）がチームを組んで検討する方法が挙げられる。
● 経産省の未来の教室における巻き込み方は上手。EdTech と STEAM が GIGA スクールに直結している。GIGA スクールで整備をして、その中身を STEAM 教育で広めていく構図。STEAM 教育は多くの県の教育大綱の中で謳われており、そこに観光教育も入るイメージになると、教育委員会としてもこれは PR していく取組の一環だという認識になる。実際に、複数の自治体では教育計画の中身の改革をしており、来年度は何校、再来年度は何校と広めていく計画を教育委員会として立てており、そのようなやり方をすれば確実に広まるという印象を持つ。

2) 継続的な検討事項

前項に示す各種論点が、観光教育の普及ためのアクションとして考えられ、観光教育の推進関係者それぞれができることへと、着実に取組んでいくことが求められる。

一方、取組案の中には一個人、一組織ではできない取組もあるため、観光教育の関係者間で連携を図りながら取組を進める視点も求められる。

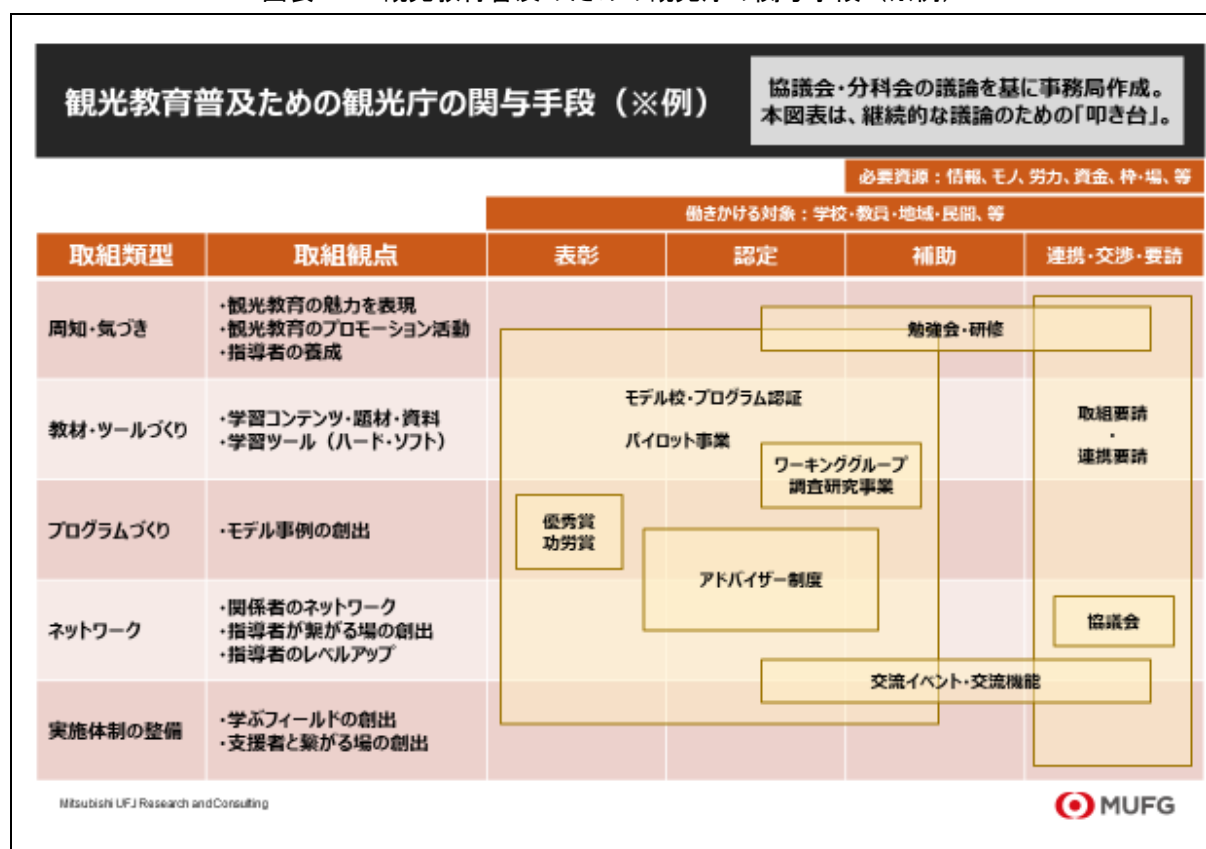
6. 観光庁としての取組に関して

(1) 観光教育の普及支援について

今後、観光教育を普及・展開するにあたり、特に、教員に対する「周知・気づき」の活動のベースとなる情報を整備するために、多種多様な観光教育プログラムが肯定されるような指針を、継続的に検討していくことが求められる。具体的な資質・能力が一義的に定められた指針を積極的に公表する方策もある一方、多様な観光教育のプログラムが生まれることを期待して、導入・実践のヒントとなるようなもの（例：学習設計の意図、学習評価の方法、プログラムの運営マネジメントのポイントなどを参照できる取組事例）を、特定領域の取組に限定せず整備することも有効な手段になりえる。

本年度の議論を通じて、観光教育を普及するための多くの取組アイデアが抽出されたが、観光庁で全てを担うことは難しいため、政策執行のリソースに鑑みて、各主体との連携も念頭に費用対効果の高い施策を選択していくことが求められる。資金（予算）を抑える形での施策も存在するため、観光教育関係者の支援ニーズを適切にくみ取りながら、柔軟な対応を継続的に検討することが求められる。例えば、他省庁における取組が観光教育と近い、もしくは観光教育そのものとなっている場合があり、そうした場合には連携を行う余地ある。

図表 50 観光教育普及のための観光庁の関与手段（※例）



（2）観光教育推進のグランドデザインの必要性

観光教育の関係者とコミュニケーションを図る中で、観光教育の普及に関する動きの全体像や全体計画（例：どの主体が何を担うのか、どのようなスケジュールで推進するのか、等）を定めることが、今後の検討課題と考えられる。教育界だけでなく、産業界（観光産業をはじめとする様々な業種の事業者や団体が対象）による支援の輪が広がる余地があるため、教育現場では不足するリソースを、連携の中で確保する視点を持ち、働きかけを継続していくことが重要となる。

観光産業の即戦力となる実務人材（外国人材）の確保・育成に関する業務

【発行日】 令和３年３月

【発注者】 観光庁 参事官（観光人材政策）付

〒100-8918 東京都千代田区霞が関 2-1-2

TEL 03-5253-8111（代表）

【受託者】 三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社

〒461-8516 名古屋市東区葵 1 丁目 19-30

TEL 052-307-1103（代表）

リサイクル適正の表示：印刷用の紙へリサイクルできます

本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Aランク〕のみを用いて作製しています。